大学共同利用機関法人人間文化研究機構
国立国語研究所
理論・構造研究系　領域指定型プロジェクト

言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約

Linguistic Variations within the Confines of Language Faculty

日本語獲得に基づく実証的研究

Studies in the Acquisition of Japanese and Parametric Syntax

成果報告書 II

プロジェクトリーダー:	村杉 恵子	(Keiko Murasugi)	
プロジェクトメンバー:	窪薗 晴夫	(Haruo Kubozono)	(2010–2013)
	斎藤 衛	(Mamoru Saito)	(2010–2013)
	杉崎 鉱司	(Koji Sugisaki)	(2010–2013)
	岸本 秀樹	(Hideki Kishimoto)	(2010–2013)
	高橋 大厚	(Daiko Takahashi)	(2010–2013)
	高野 祐二	(Yuji Takano)	(2013)
	瀧田 健介	(Kensuke Takita)	(2013)
	多田 浩章	(Hiroaki Tada)	(2013)
	藤井 友比呂	(Tomohiro Fujii)	(2013)
	宮本 陽一	(Yoichi Miyamoto)	(2013)

2013年9月

大学共同利用機関法人人間文化研究機構　国立国語研究所

理論・構造研究系　領域指定型プロジェクト

言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約
日本語獲得に基づく実証的研究
成果報告書 II

目次

はしがき i
村杉　恵子（南山大学）

1.　日本語文法を特徴付けるパラメター再考 1
斎藤　衛（南山大学）

2.　主語・目的語省略の比較統語論 31
高橋　大厚（東北大学）

3.　動詞の自他と分裂動詞句分析 53
岸本　秀樹（神戸大学）

4.　付加詞と文の階層構造 69
岸本　秀樹（神戸大学）

5.　言語獲得からみる移動操作：かき混ぜ 85
村杉　恵子（南山大学）、杉崎　鉱司（三重大学）

6.　日本語における *wh* 島制約の獲得：予備的研究 105
杉崎　鉱司（三重大学）、村杉　恵子（南山大学）

7.　言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約：
日本語獲得に基づく実証的研究 117
村杉　恵子（南山大学）

はしがき

国立国語研究所 理論・構造研究系領域指定型プロジェクト「言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約：日本語獲得に基づく実証的研究」は、現代言語理論を背景にして、統語理論研究の成果を検討し、発展させた上で、文法の普遍的属性を反映していると考えられる日本語の獲得過程を実証的に分析することを目的としている。

本報告書は、国立国語研究所、南山大学、神戸大学において研究会・ワークショップを重ね、発展させてきた成果の一部を、日本語で纏めるものである。ここでの執筆者は 2010・2011 年から共に研究を進めてきた五名（斎藤衛、岸本秀樹、高橋大厚、杉崎鉱司、村杉恵子）によるものであるが、本報告書を基に、今後理論と実証の関連を深める予定である。

本プロジェクトは、理論・構造研究系長　窪薗晴夫氏の下で活動を行ってきた結果、大きく三つの成果をまとめている。この報告書とは別に、英語による報告書(発行済み)と、南山大学大学院人間文化研究科研修生　中谷(村井)友美が中心となってまとめた日本語を母語とする幼児のデータベースを作成している。また、2013 年には、新たに理論言語学と言語獲得理論に精通する五名（多田浩章、高野祐二、宮本陽一、藤井友比呂、瀧田健介）が加わり、本プロジェクトの研究の層は広く厚くなりつつある。

短い期間の中で、このプロジェクト研究を進めることができたことは、国立国語研究所所長　影山太郎氏、理論・構造研究系長　窪薗晴夫氏をはじめとした国立国語研究所の先生方、そして高山和男氏、米田純子氏をはじめとした事務職員の皆様のお支えと励ましによるものである。この場をお借りして、深く感謝する。

また、それぞれの時間の中で自らの研究を進め、お互いの研究について親身になって考え、そして心の通じあう時を共にしてくださったプロジェクトのメンバーの皆様、南山大学言語学研究センター、南山大学大学院人間文化研究科の大学院生と研修生の皆様に、この機会をお借りして、心から感謝する。

研究が、お互いへの友情と尊敬で結ばれ遂行されたことも、このプロジェクトの成果であった。東北地方太平洋沖地震直後には、南山大学にて研究会が開催され、皆で『同じ釜』を囲んで励ましあったこともあった。南山大学言語学研究センター資料室にて集まり、皆で国語研プロジェクトを一緒に推し進めていこうと話し合ったのは2013年春も梅の花の咲くころのことである。生成文法理論に基づく言語理論と言語獲得研究は、今後、多くの言語学研究者の方々にご示唆を頂戴し、新たなメンバーとともに、現代言語理論を背景とした統語論研究と言語獲得研究を更に発展させることができれば、幸いである。

国立国語研究所は、20 世紀後半、大久保愛氏の研究をはじめとし、言語獲得研究の中核であった。そこでの一連の優れた成果を、現代言語理論の下で、再度、見直す必要もあるだろう。本プロジェクトの成果が、言語研究の更なる発展の一助になることを祈っている。

村杉恵子

日本語文法を特徴付けるパラメター再考*

斎藤　衛

1. 序

Chomsky (1981) における原理とパラメター理論の提案以降、日本語文法を特徴付けるパラメターに関する様々な仮説が示されてきた。Hale (1980) の階層性パラメターは、日本語を非階層言語とすることにより、以下の特徴に説明を与えることを試みたものである。

(1) a.　自由語順
　　b.　空項の広範な分布
　　c.　複合動詞の多用

また、Kuroda (1988) は、日本語においては「一致」が随意的であるとし、その帰結として、(2) に示す現象を導く。

(2) a.　スクランブリング
　　b.　多重主格主語文
　　c.　義務的な wh 移動の欠如

本論は、1990 年代以降の極小主義アプローチに基づく研究の成果をふまえ、Kuroda (1988) の理論を発展させることを目的とする。具体的には、φ素性一致の欠如を日本語の基礎的な性質として、文法格の役割と与値メカニズムを捉え直し、項省略現象、多重主語現象、スクランブリング、語彙的複合動詞の多用に説明を与えることを試みる。

φ素性一致の欠如に基づいて日韓語の特徴に分析を加える試みは、Saito (1982)、Yang (1983) や Fukui (1986) に見られるように、1980 年代前半から追究されてきたが、より最近の提案としては、Saito (2007)、Şener and Takahashi (2010) による項省略現象の分析がある。第２節では、まず、この分析を概観し、日韓語が φ素性一致を欠くとする仮説の有効性を確認する。次に、この結論をふまえ、日本語における文法格の与値メカニズムを検討する。Chomsky (2000) は、文法格が φ素性一致を通して与値されることを提案するが、この分析は φ素性一致を欠く言語には適用しえない。本論では、格の与値が φ素性一致とは独立した形でなされるとする Bošković (2007) の分析を採用し、その帰結として多重主格主語文の存在が導かれることを示す。

日本語が φ 素性一致を欠くとする仮説の下では、文法格の存在意義も再検討する必要が生じる。Chomsky (2000) では、文法格が φ 素性一致を可能にする役割を担うとされているからである。本論の第 3 節では、Chomsky (2013) の構成素ラベリングに関する議論を概観し、日本語文法格がラベリングにおいて不可欠な役割を果たすことを提案する。具体的には、併合により形成された (3) の構成素において、文法格が αP を不可視的にする機能を有し、結果として、構成素が βP のラベルを継承することを可能にする。

(3)　{αP [文法格], βP}

その上で、述語の連体形、連用形、終止形等の屈折が、ラベリングにおいて、文法格と同様の役割を担うことを示唆する。この仮説は、日韓語における述語の屈折と文法格を類似するものとして分析する Sells (1995)、An (2009) の洞察をふまえて、両者に統一的な統語分析を与えるものであり、帰結として、日本語においてスクランブリングが可能であることを導く。

第 4 節では、述語屈折がラベリング補助の機能を担うとする分析に基づき、影山 (1993) が詳細に例証する日本語の語彙的複合動詞の性質に説明を与えることを試みる。語彙的複合動詞の分析としては、(4) に示すように、二動詞を直接併合することにより生成され、動詞の連用屈折がこれを可能にしているとの提案を行う。

(4)　{V [屈折], V}

第 5 節の目的は、日本語における φ 素性一致の欠如と主要部後置型語順の関連を探ることにある。まず、外池 (2009) が提案する句構造派生のメカニズムを採用することにより、Kayne (1994) の線上的先行関係の構造対応公理 (Linear Correspondence Axiom) から日本語の主要部後置型語順を導こうとする Saito (2012) の議論を概観する。その上で、当該の句構造派生メカニズムが、φ 素性一致の欠如によって可能となることを示す。

2. 日本語における φ 素性一致の欠如と文法格与値のメカニズム

日本語では、φ 素性一致の現象が顕在的な形で観察されないが、このことから、φ 素性一致が存在しないことを直接結論として導くことはできない。φ 素性一致が抽象的な形で存在する可能性を否定しえないからである。本節では、まず、Saito (2007) および Şener and Takahashi (2010) が提案する項省略現象の分析を概観し、日本語が φ 素性一致を欠くとする仮説の有効性を見る。次に、この結論をふまえて、文法格の与値を φ 素性一致とは独立したプロセスとして捉える Bošković (2007) の分析を日本語に適用し、その帰結を探る。

日韓語における項省略現象は、Oku (1998) および Kim (1999) によって指摘されたもので

ある。両言語における空項の広範な分布は広く知られているが、Kuroda (1965a) 以来、これは、*pro* が項の位置に自由に生起することによるとされてきた。しかし、Otani and Whitman (1991) が、(5b) に例示するように、空目的語がスロッピー解釈を許容することを考察し、*pro* 仮説が不充分であることが示された。

(5) a. 太郎は、いつも自分の博士論文を引用する。
　b. でも、花子は、全然 [*e*] 引用しない。
　　i. [*e*] = 太郎の博士論文 (ストリクト解釈)
　　ii. [*e*] = 花子の博士論文 (スロッピー解釈)
　c. でも、花子は、全然それを引用しない。
　　i. [*e*] = 太郎の博士論文 (ストリクト解釈) のみ

(5c) が示すように、代名詞はスロッピー解釈を許容しない。従って、(5b) の空目的語が *pro* であるとする分析は、スロッピー解釈を予測することができない。他方、スロッピー解釈は、(6) の VP 省略の例に見られるように、省略 (削除) に伴う現象であることが知られている。

(6) a. John loves his mother.
　b. Bill does [*e*], too.
　　i. [*e*] = love John's mother (ストリクト解釈)
　　ii. [*e*] = love Bill's mother (スロッピー解釈)

Otani and Whitman (1991) は、この事実をふまえ、VP 省略による (6b) の派生を提案する。この分析によれば、(6b) は、動詞が T に移動し、結果として目的語のみを含む VP を省略することにより派生される。

しかし、Oku (1998)、Kim (1999) は、VP 省略によっては説明しえない例をあげ、Otani and Whitman (1991) の分析に疑問を投げかける。例えば、Oku (1998) は、主語の位置に生起する空項もスロッピー解釈を許容することを指摘する。(7b) が一例である。

(7) a. 花子は、[$_{CP}$[$_{TP}$[自分の提案]が採用される] と] 思っている。
　b. でも、太郎は、[$_{CP}$[$_{TP}$[*e*] 採用される] と] 思っていない。
　　i. [*e*] = 花子の提案 (ストリクト解釈)
　　ii. [*e*] = 太郎の提案 (スロッピー解釈)

この種の例に基づき、Oku (1998) と Kim (1999) はそれぞれ日本語と韓国語において、主語、目的語等の項自体が省略される現象があるとの結論を導く。

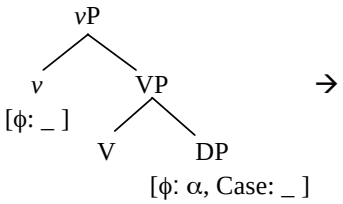
Oku と Kim の結論が正しければ、なぜ、日韓語において項省略が可能であるのかが追究さ

れなければならない。(8) が示すように、例えば英語では、項の省略は文法的に許容されない。

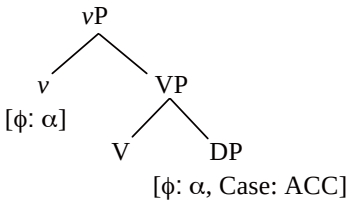
(8) a. John always cites his dissertation.
b. *But Bill doesn't cite [*e*] at all.

この問題は Oku (1998) においてすでに論じられているが、Saito (2007) は、φ素性一致の欠如が、項省略を可能にすることを提案する。この提案は、項省略が LF コピーにより解釈されるとする Oku (1998)、篠原 (2006) の結論に加え、Chomsky (2000, 2008) が提示する φ素性一致のメカニズムに基づく。後者は、値を欠く φ素性を伴う機能範疇主要部が、DP を探索し、「一致」の関係を結ぶとするものである。*v* の場合を (9) に例示する。[1]

(9) a.



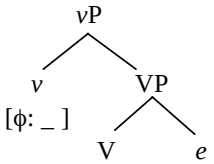
→ b.



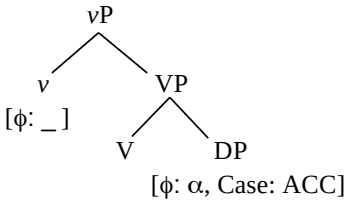
v は φ 素性の値を必要とするため、領域 (c-統御領域) 内を探索し、φ 素性を有する DP と「一致」の関係に入る。この一致により DP の φ 素性が *v* にコピーされ、またその反映として、DP の格に ACC の値が与えられる。ここで重要となるのが、一致の関係が成立するための必要条件として課される活性条件 (activation condition) である。この条件は、一致の関係を結ぶ双方の要素が値を必要とする素性を有しなければならないとし、特に、格の与値を必要とする DP のみが機能範疇に φ素性の値を供給しうる事実を説明する。(9) においては、*v* が φ素性の値、DP が格の値を必要とするが故に、*v* と DP の間に一致が成立し、*v* の φ 素性が与値されることになる。

機能範疇の φ素性が、(9) に例示したメカニズムにより与値されるとすれば、項省略は文法的に許容されない。目的語省略を例にとって考えてみよう。

(10) a.



→ b.



(10a) では、目的語が省略され、空となっている。LFコピー分析によれば、この構造は、(10b) に示すように、先行する文脈から DP を空目的語の位置にコピーすることにより解釈される。しかし、コピーされる DP は、先行文脈ですでに格を与値されていることから、活性条件を

満たさず、*v* にとって一致の対象とはなりえない。[2] 結果として、*v* の φ素性が与値されず、この派生は破綻することになる。このように、Chomsky (2000, 2008) が提示する φ 素性一致のメカニズムは、英語では項省略が許容されないことを正しく予測する。

では、なぜ、日韓語においては、項省略が可能なのだろうか。言い換えるならば、なぜ、日韓語では、(10b) に示した LF コピーが派生の破綻を引き起こさないのだろうか。日韓語が φ素性一致を欠く言語であれば、この問いに明確な答えが与えられる。φ素性一致とは、T および *v* が φ素性を有し、T は主語、*v* は目的語から φ素性の値を与えられる現象である。従って、φ素性一致の欠如は、T と *v* が φ素性を有しないことを意味する。再び (10) を例にとって、日韓語の場合を考えてみよう。(10b) において、活性条件により、*v* と DP の間に φ素性一致の関係は成立しえない。しかし、*v* に与値されるべき φ素性が存在しないのであれば、このことにより何の問題も生じないし、そもそも、*v* は φ素性の値を提供する DP を探索しない。よって、日韓語では、LFコピーによる空項の解釈が可能であり、項省略が許容されることが正しく予測される。

項省略現象が、日本語が φ素性の一致を欠くとする仮説を裏付ける証拠となることを見てきたが、この仮説の下では、日本語における文法格の存在意義と格与値のメカニズムを再考する必要が生じる。(9) に見たように、Chomsky (2000, 2008) の理論では、文法格は φ素性一致を成立させるために存在し (活性条件)、φ素性一致を通して与値される。従って、この理論を前提とする Ura (1999)、Hiraiwa (2001)、Takahashi (2010) 等における日本語文法格の分析では、日本語においても φ素性一致が抽象的には存在することが仮定されている。しかし、日本語の特徴を φ素性一致の欠如に求める限り、Chomsky (2000, 2008) の文法格の分析をそのまま日本語に適用することはできない。以下、本節の後半では、日本語文法格の与値メカニズムについて、Bošković (2007) の分析に基づく代案を提示し、日本語における文法格の存在意義については、次節で取り上げることとする。

まず、日本語文法格の与値が、φ素性一致によらないことを示す独立した根拠があることを指摘したい。日本語では、DP のみならず、PP が文法格を伴うコンテクストが広範に観察される。(11) の PP 主語は、その一例である。

(11) a.　ここからが、富士山に登りやすい。
　　 b.　５時までが、運賃が安い。

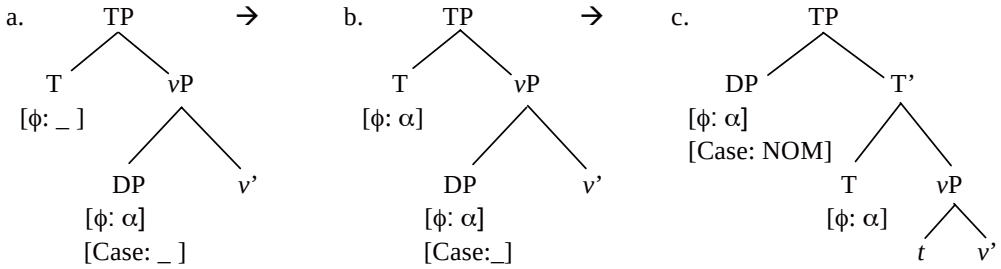
また、名詞の投射内では、PP は、項であるか修飾句であるかに拘らず、属格を伴わなければならない。

(12) a.　[太郎の [友達との [ヨーロッパへの旅行]]]
　　 b.　[花子の [無一文での [東京からの出発]]]

DP と異なり、PP は少なくとも意味解釈が与えられうる φ 素性を有しない。従って、PP に付随する主格や属格が φ 素性一致を通して与値されるとは考えにくい。

では、文法格は、φ 素性一致と独立した形でどのように与値されうるのだろうか。統語理論において、文法格与値を φ 素性一致から切り離す提案は、すでに Bošković (2007) においてなされている。Bošković は、素性の与値が、常に、値を必要とする要素が探索子となり、値を供給する要素を探索することによりなされると主張する。この提案によれば、主語と時制の φ 素性一致、主語の主格与値は、(13) に示すプロセスによる。

(13)



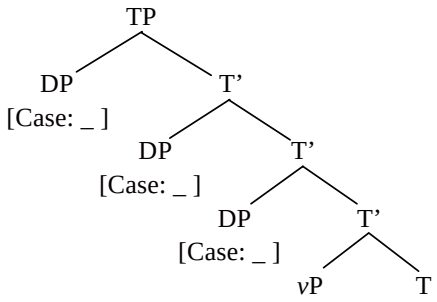
(13a-b) に示すように、φ 素性の値を必要とする T が領域内を探索して、*v*P 内主語の DP と一致し、その φ 素性を得る。しかし、この段階では、DP は探索子ではないため、格を与値されない。DP は、探索子として、T を見出すことにより主格を与値されるが、そのためには、T を領域内に含む位置に移動しなければならない。Bošković は、この理由により、主語が TP 指定部に移動するとする。(13c) が示すように、主語 DP の移動 (内的併合) により、DP が T を探索し、その格素性が主格を得る構造が形成される。[3]

Bošković (2007) の分析では、格素性の値を必要とする要素が、φ 素性一致を介在せず、直接、格の値を供給する主要部を探索し、T を見出せば主格、*v* を見出せば目的格を与値される。この分析は、φ 素性一致を欠く言語にも適用することができ、PP の格の与値も問題とならない。(11)-(12) に見た、格を伴う PP の広範な分布は、この分析を支持する証拠となる。さらに、この分析は、日本語の特徴である多重属格現象、多重主格現象を正しく予測する。(12) が示すように、日本語では、同一名詞句内で、属格 NP/PP が複数生起する。主格についても、Kuno (1973) 以来、多重主語文の存在は広く知られている。(14) は、Kuno (1973) の有名な例である。

(14) [$_{TP}$ 文明国が [$_{TP}$ 男性が [$_{TP}$ 平均寿命が短い]]]

(15) に示すように、(14) は三つの DP がそれぞれ、格素性の与値者として T を見出す例として分析することができる。

(15)



従って、多重主格文の存在は、Bošković (2007) の分析の直接的な帰結として導かれる。もし、主格の与値が T の φ 素性一致の反映としてなされるのであれば、(14) のような多重主格は予測されない。T の φ 素性を与値する DP は一つであり、φ 素性一致は 1 対 1 の関係と考えられるからである。[4]

3. ラベリングを可能にする文法格の役割

前節において指摘したように、日本語が φ 素性一致を欠くとする仮説の下では、日本語の文法格の統語的役割を検討する必要が生じる。Chomsky (2000, 2008) は、活性条件により、文法格を φ 素性一致を可能にするものと位置付ける。しかし、日本語に φ 素性一致がないのであれば、文法格の意義は他に求められなければならない。本節では、Chomsky (2013) における構成素のラベリングに関する議論を概観し、その上で、日本語の文法格がラベリングにおいて重要な役割を担うとの提案を行う。さらに、Sells (1995)、An (2009) の洞察に基づいて、述語の屈折にも同様の機能があることを主張し、日本語の句構造形成におけるラベリングについてより一般的に議論する。

Chomsky (1994) の裸句構造理論では、言語を言語足らしめるために最低限必要な操作として、任意の二要素を含む構成素を形成する「併合」が仮定される。例えば、(16) に示すように、併合により、α と β を含む構成素 γ が形成される。

(16)　$\gamma = \{\alpha, \beta\}$

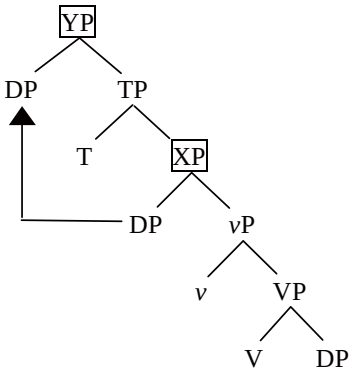
ここで、統語論が供給しなければならない情報として、形成された構成素 γ の性質がある。具体例としては、α が動詞、β が目的語として解釈される DP であれば、γ は 動詞句として α の性質を受け継ぐことなどが挙げられるが、より一般的に併合により形成される構成素の性質を決定するメカニズムが求められる。これが、Chomsky (2013) が取り上げる構成素のラベリングの問題である。

Chomsky (2013) は、まず、以下の三つのケースを考慮する。

(17) a. $\gamma = \{H, \beta P\}$
b. $\gamma = \{\alpha P, \beta P\}$
c. $\gamma = \{H, H\}$

(17a) は、主要部と句 (非主要部) が併合する場合で、γ は主要部のラベルを受け継ぐと考えられる。問題となるのは、二つの要素が識別できない場合であり、句と句が併合する (17b) および主要部と主要部が併合する (17c) がこれに相当する。Chomsky (2013) は、(17b) の具体例を考察しつつ、二つの提案を行う。(18) に示す TP の構造を例にとって、Chomsky の提案を見ていくことにしよう。

(18)



この構造を下層から順次形成していった場合、外項の DP を *v*P に併合した時点で、最初に (17b) のパターンが生じる。このケースについて、Chomsky (2013) は、DP が TP 指定部に移動する (コピーされる) ことを考慮し、構成素は、そのすべてのコピーを含む要素からのみラベルを受け継ぐことができるとする。この提案により、XP のラベルが *v* であることが正しく予測される。

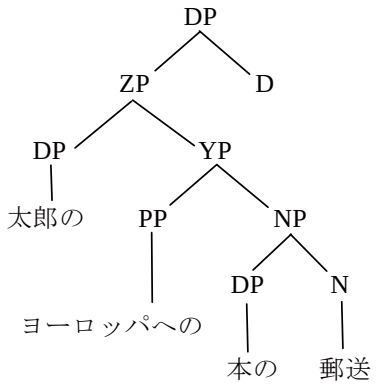
次に (17b) のパターンが生じるのは、外項の DP が移動により TP に併合する時点である。この場合には、DP と TP (あるいはそのラベルである T) が φ 素性一致により、φ 素性の値を共有している。そこで、Chomsky (2013) は、この素性の共有により YP のラベルが決定されることを提案する。素性の共有によるラベリングは、演算子の CP 指定部への移動にも適用される。例えば、wh 句が疑問文 CP の指定部に併合した場合、wh 句と C は疑問の素性 Q を共有しており、この素性の共有が形成される構成素のラベリングを可能にする。

Chomsky (2013) が提案するラベリングのメカニズムは、φ 素性一致の統語的役割を示すものである。(18) における YP のラベリングは、φ 素性一致により可能になることから、φ 素性一致はラベリングにおいて不可欠な役割を果たす。一方で、日本語のような言語におけるラベリングについては、様々な問題が生じる。まず、日本語が φ 素性一致を欠くとすれば、主語の TP 指定部 への併合によって形成される構成素のラベリングがどのようになされる

かが定かではない。また、複数の DP が TP に併合する多重主格主語文や以下のような名詞句も問題となる。

(19) a.　[太郎の [ヨーロッパへの [本の郵送]]]

b.



この例の派生は、三つの項の併合を伴う。その中で、ラベリングの問題を誘発するのは、PP の NP への併合、さらに主語 DP の併合である。明らかに素性の共有はなく、形成される構成素のラベルを決定することができない。[5]

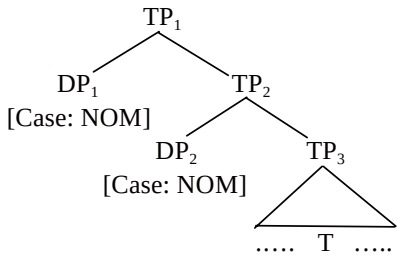
上に述べたラベリングの問題に対する解決案として、日本語の文法格がラベリングに寄与する可能性を追究したい。まず、明確な一般化として、格を伴う句は常に最大投射であり、さらに投射することはないということがある。そこで、文法格の機能として、ラベリングにおいて句を不可視的にすることが考えられる。この仮説に従えば、(20) では、αP は不可視的であり、結果として γ は βP のラベルを受け継ぐことになる。

(20)　$\gamma = \{\alpha P\ [Case], \beta P\}$

主格主語と TP の併合によって形成される構成素は、TP のラベルを引き継ぐ。また、(19b) においては、すべての項が属格を伴うことから、YP と ZP のラベルは N となる。

日本語の文法格がラベリングにおいて句を不可視的にするとする仮説により、二つの帰結が導かれる。第一に、前節で提示した多重主格主語の分析が完結したものとなる。前節では、Bošković (2007) の分析の帰結として、(21) に示すように、複数の主語が T により主格を与値されることを指摘した。

(21)



しかし、この分析は、すべての言語に適用されるものであり、多重主語が日本語では許容され、例えば英語では許容されないという言語間の相違には、まだ説明が与えられていない。英語については、Chomsky (2013) のラベリングに関する仮説によって説明が可能となる。通常の主語 DP_2 は、T と φ 素性を共有しており、結果として TP_2 のラベリングは問題なくなされる。しかし、DP_1 には T との φ 素性の共有がないため、TP_1 のラベルを決定することができない。よって、英語における多重主語は、ラベリングのメカニズムにより排除される。他方、日本語では、文法格が {αP, βP} のラベリングに寄与する。DP_2 が格を有するため、TP_2 は TP_3 のラベルを受け継ぎ、DP_1 の格が TP_1 のラベリングを可能にする。従って、多重主語に関する言語間の相違は、文法格の与値メカニズムではなく、ラベリングのメカニズムによって説明される。

第二に、日本語において、DP のスクランブリングが可能であることが予測される。日本語のスクランブリングについては、様々な分析が提案されているが、明確な性質の一つとして、演算子移動でも A 移動でもないということがある。[6] この性質は、以下の例に見ることができる。

(22) a. みんなが [$_{CP}$ 花子がどの本を選んだか] 知りたがっていること
b. どの本を$_i$ みんなが [$_{CP}$ 花子が t_i 選んだか] 知りたがっていること

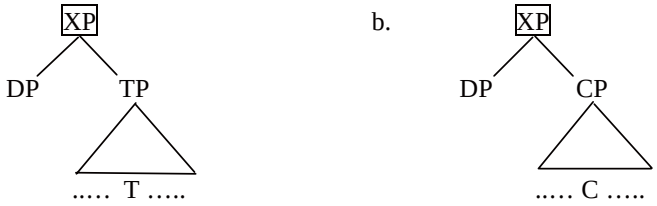
(22a) は、wh 句「どの本を」が疑問文に含まれる通常の例である。(22b) では、wh 句がスクランブリングによって、補部の疑問文から取り出され、主文の文頭に移動している。この移動に拘らず、(22b) は文法的に適格であり、(22a) と同様の解釈を受ける。(22b) に観察されるスクランブリングは、A 移動の局所性を満たさず、A 移動ではありえない。また、演算子移動であれば、「どの本を」が着点において演算子として解釈されなければならないが、この wh 句は、補部疑問文の一部として解釈される。従って、スクランブリングは演算子移動でもない。このような非演算子、非 A 移動は、なぜ日本語において許容され、例えば英語では観察されないのだろうか。

まず、英語の場合について考えてみよう。議論の前提として、(23) に A 移動と wh 移動によって形成される構造を示す。

(23) a.　A 移動　　b.　wh 移動

(23a) では ϕ 素性の共有、(23b) では Q 素性の共有により、XP のラベリングが可能になる。これに対して、非 A 移動、非演算子移動であるスクランブリングの場合は、ϕ 素性や演算子素性の共有はない。(24a) がスクランブリングによって移動する DP が TP と併合する場合、(24b) が CP と併合する場合の構造である。

(24) a.　　b.



結果として、英語においては、XP のラベルを決定することができず、スクランブリングが許容されないことが予測される。他方、日本語文法格の機能に関する仮説の下では、日本語においては、(24) の構造でラベリングの問題は生じない。スクランブリングによって併合された DP が文法格を有し、ラベリングにおいて不可視的であることから、XP は、(24a) では TP、(24b) では CP のラベルを受け継ぐ。よって、日本語においてのみ DP のスクランブリングが可能であることが正しく予測される。

日本語において、スクランブリングの対象となるのは、DP だけではない。(25) に示すように、PP や副詞句もスクランブリングによって前置される。

(25) a.　ロンドンから$_i$ 花子が t_i 戻った
　　b.　静かに$_i$ 太郎が t_i 帰った

PP は、(12) に見たように、名詞の投射内では属格を伴う。(12) を (26) に再掲する。

(26) a.　[太郎の [友達との [ヨーロッパへの旅行]]]
　　b.　[花子の [無一文での [東京からの出発]]]

そこで、(25a) のように PP が文内に生起する場合にも、音声的に空の格を伴うものと仮定す

ることができる。副詞句については、どのように考えることができるだろうか。この問題に答えるために、日韓語の文法格と述語屈折を類似するものとして捉える Sells (1995)、An (2009) のアプローチを発展させつつ、日本語におけるラベリングについてより一般的に考察することにする。

日本語文法格の機能を、ラベリングにおいて句を不可視的にすることに求める仮説は、日本語文法格が英語等の文法格とは根本的に異なることを含意し、その点で、韓国語の属格を連体形の一種とみなす An (2009) の分析と共通性を有する。日韓語では、述語が、その投射が併合する要素により、異なる屈折を示す。現代日本語では、表層的な屈折形の区別が部分的に失われているが、形容動詞句 (AVP) の場合には、例えば以下のパターンが観察される。

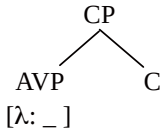
(27) a. この部屋は、[とても静かだ] (終止形)
b. [とても静かな] ホテルの部屋 (連体形)
c. 太郎は [とても静かに] 部屋を出た (連用形)

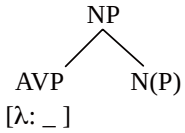
An (2009) は、DP や PP も同様の屈折を示すとし、属格を DP と PP の連体形を形成する要素として分析する。ここで、格を伴う DP や PP と同様に、屈折述語を主要部とする句も、屈折の形を決定する要素と併合する際に、決して投射しないことに注目されたい。例えば、(27b) では、AVP「とても静かな」と NP「ホテルの部屋」が併合するが、形成される構成素は、NP のラベルを受け継ぐ。従って、述語の屈折も、文法格と同様に、ラベリングにおいて句を不可視的にする機能をもつと考えることができる。この仮説は、文法格と述語屈折の共通性に実体を与えることにもなる。例えば、ラベリングにおいて句を不可視的にする「反ラベリング素性」λ が存在し、λ は DP や PP においては文法格、述部においては屈折として与値されるとすることができるのである。

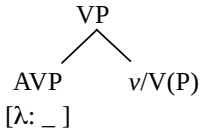
ここで、素性 λ に関するより具体的な与値メカニズムを考えてみよう。まず、いかなる要素も λ をもつことができると仮定する。[7] 句と句を併合する場合には、(28) に示す三つの可能性がある。

(28) a. $\gamma = \{\alpha P\ [\lambda], \beta P\ [\lambda]\}$
b. $\gamma = \{\alpha P\ [\lambda], \beta P\}$
c. $\gamma = \{\alpha P, \beta P\}$

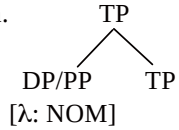
(28a) では、γ は αP、βP のいずれのラベルも受け継ぐことができず、ラベルをもつことができない。(28c) においても、素性の共有がなければ、γ のラベルを決定することができない。(28b) の場合のみ、γ は βP のラベルを受け継ぐことができる。以上の仮定の下に、(29) に示す形容動詞句の λ の与値を見てみよう。

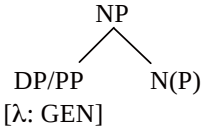
(29) a.


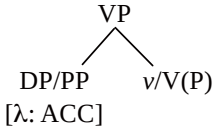
b.


c.


形容動詞の屈折は、形容動詞句が C と併合した時に終止形、N あるいは N の投射と併合した時に連体形、*v*/V あるいはその投射と併合した時に連用形となる。従って、λ は C によって終止 (conclusive)、N によって連体 (prenominal)、*v*/V によって連用 (preverbal) の値を与えられるものとすることができる。λ が DP あるいは PP に付随する場合には、類似する形で、以下のように、主格が T、属格が N、対格が *v*/V により与値されるものとする。[8]

(30) a.


b.


c.


以上に概観した文法格と述語屈折の統一的な分析により、日本語スクランブリングの説明が完結する。問題として残されていた (25b) を (31) に再掲する。

(31)　静かに$_i$ 太郎が t_i 帰った

この例では、スクランブリングにより、AVP「静かに」が TP と併合する。形成される構成素のラベリングが問題となりうるが、AVP は連用 (preverbal) として与値された λ 素性を有しており、ラベリングにおいて不可視的である。結果として、スクランブリングにより形成された構成素は、TP のラベルを受け継ぐことになる。

本節では、λ 素性により、日本語では、{αP, βP} の構造が比較的自由に形成されうることを提案した。次節では、λ 素性が {H, H} を可能にする場合があることを示唆する。具体的には、影山 (1993) において詳細に検討されている日本語の語彙的複合動詞を取り上げ、述語屈折の λ 素性としての分析により、その特異な性質が説明されることを示す。

4.　語彙的複合動詞に見られる他動性調和現象

影山 (1993) は、日本語における複合動詞を、統語的複合動詞、語彙的複合動詞、語彙概念構造の操作を伴う複合動詞の三種に分類した上で、語彙的複合動詞が、以下の他動性調和の原則に従うことを論証する。

(32)　語彙的複合動詞 V_1+V_2 において、V_1 と V_2 は外項の有無に齟齬があってはならない。

この一般化は、V_1 と V_2 の一方が非対格動詞であれば、もう一方も非対格動詞でなければならないというものである。一例として、(33a) と (33b) の対比を示す。

(33) a. 花子が太郎を押し倒した
b. *太郎が鯨を浮かび見た

(33a) では複合動詞が二つの他動詞によって構成されているのに対して、(33b) の複合動詞は非対格動詞と他動詞の組み合わせとなっている。(34) に他動性調和の原則に従う複合動詞、(35) にこの原則と矛盾する不適格な複合動詞を挙げる。

(34) a. 他動詞＋他動詞：引き抜く、握りつぶす、叩き落とす、刈り取る、受け止める
b. 非能格＋非能格：走り寄る、飛び降りる、駆け上る、歩き回る、群れ飛ぶ
c. 非対格＋非対格：滑り落ちる、浮かび上がる、生まれ変わる、降り注ぐ
d. 他動詞＋非能格：持ち歩く、探しまわる、待ち構える
e. 非能格＋他動詞：泣き腫らす、乗り換える、飲み潰す、踊り明かす

(35) a. 非対格＋他動詞：*浮かび見る、*落ち隠す
b. 他動詞＋非対格：*押し倒れる、*飲み酔う
c. 非能格＋非対格：*遊び落ちる、*走り転ぶ
d. 非対格＋非能格：*落ち降りる、*流れ泳ぐ

(32) に示した一般化は、興味深い理論的問題を提示する。影山は、(32) が普遍的に観察されるものではなく、日本語に固有の制約であるとする。Huang (1992) から引用した (36) の例は、(32) が中国語の複合動詞には適用されないことを示す。

(36) a. Ta he-zui (jiu) le
he drink-get.drunk wine Asp.
‘He drank (wine) and got drunk’

b. Ta qi-lei-le lianpi ma
he ride-tired-Asp. two horse
‘He rode two horses and got them tired’

同時に、日本語を母語とする幼児が、経験を通して (32) を獲得するとは考えにくい。(32) の獲得は、間接否定情報を必要とすると考えられる。生得的原理でも、経験を通して獲得されるものでもないとすれば、(32) は日本語の語彙的複合動詞の性質から導かれる帰結であると考えるのが妥当であろう。本節では、当該の性質が、複合動詞が二つの動詞の併合により統語的に形成されることであるとの提案を行う。さらに、このような派生が、V_1 が λ 素性を有

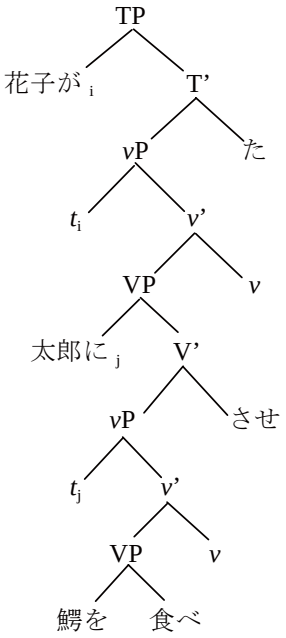
することにより可能となることを示す。

語彙的複合動詞の分析に入る前に、影山 (1993) の日本語複合動詞の分類について簡単に見ておこう。(37) は、統語的複合動詞の例である。

(37) a.　花子が太郎に鰐を食べさせた
　　 b.　太郎が鰐を食べ始めた

(37a)、(37b) は *tabe-sase-ta*、*tabe-hazime-ta* という複合動詞を述部とするが、複合動詞を構成するそれぞれの動詞が項構造を有し、VP を投射する。[9] (38) が Murasugi and Hashimoto (2004) が提示する (37a) の構造である。

(38)



影山 (1993) は、統語的複合動詞において V_1 が独自の VP を投射する証拠として、VP (あるいは V') の代用表現である「そうす」(*soo su*) の分布を挙げる。(39) に示すように、(37) の例においては、「そうす」を V_1 が投射する VP に代用することができる。

(39) a.　花子が太郎にそうさせた
　　 b.　太郎がそうし始めた

これに対して、語彙的複合動詞の場合には、以下の例が示すように、「そうす」を同様の形で用いることができない。

(40) a.　花子が太郎を押し倒した
　　b. *花子が (太郎を) そうし倒した

(41) a.　太郎が滑り落ちた
　　b. *太郎がそうし落ちた

(40b)、(41b) の非文法性は、語彙的複合動詞においては、V_1 が独自の VP を投射せず、V_1+V_2 が単独の動詞として VP を投射することを示唆する。この考察に基づき、影山 (1993) は、語彙的複合動詞は語彙部門で形成され、統語的派生においては、単独の動詞としてふるまうとする。

影山 (1993) が第三種の複合動詞として挙げるのが、語彙概念構造の操作を伴う複合動詞である。(40)、(41) の語彙的複合動詞の場合には、V_1 と V_2 がそれぞれ項構造を有し、独立した動詞として表れうる。他方、(42) の「込む」(*kom*) は、接尾動詞であり、単独では生起しない。

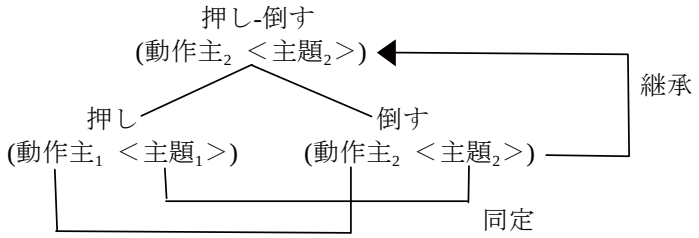
(42) a.　花子が太郎を部屋に追い込んだ
　　b.　太郎が川に飛び込んだ
　　c.　汚染水が海に流れ込んだ

(42) の例から明らかなように、「込む」は、V_1 の意味構造に情報を追加する。(42a-c) は、それぞれ、「追った」、「飛んだ」、「流れた」という動詞のみであっても、人あるいは物が移動する事象を表す。「込む」を接尾動詞として V_1 に付随させることにより、当該の人あるいは物が特定の場所に移動するという情報が加えられる。(42a) では「太郎が部屋に」、(42b) では「太郎が川に」、そして (42c) では「汚染水が海に」移動する。影山 (1993) は、「込む」の機能を、接続する動詞の語彙概念構造に情報を追加することにあるとする。

影山 (1993) は、以上の複合動詞の分類をふまえて、語彙的複合動詞の具体的な分析を提示する。語彙的複合動詞は語彙部門で形成されるが、同時に V_1 と V_2 が独自の項構造を有する。この二つの性質に基づき、影山は、V_1 と V_2 の項の同定により、V_1+V_2 の項構造を導く分析を提案する。(43) に再掲する (40a) を例にとって、影山の分析を (44) に図示する。

(43)　花子が太郎を押し倒した

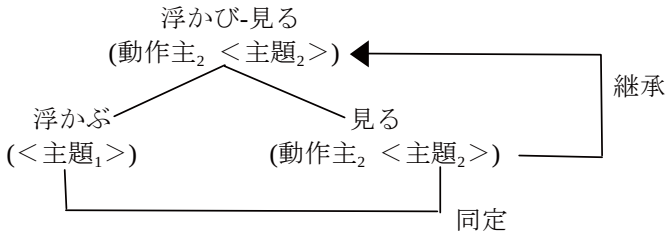
(44)



(44) に示されているように、「押す」(*os*) と「倒す」(*taos*) の動作主および主題が同定され、その上で、「押し倒す」は「倒す」の項構造を継承する。

(44) で興味深いことは、V_1 と V_2 の動作主同士、主題同士が同定されていることである。結果として、(43) において、「花子」は「押す」と「倒す」双方の動作主となり、「太郎」は双方の動詞の主題として解釈される。しかし、項の同定という操作を採用する限り、このような解釈を得る必然性はない。例えば、動作主$_1$と主題$_2$、主題$_1$と動作主$_2$を同定することも原理的には可能な筈である。また、(44) に示した語彙的複合動詞形成のメカニズムは、それ自体では、他動性調和の現象を予測しない。他動性調和と矛盾する「*浮かび見る」(*ukabi-mi*) も (45) のように形成することができる。

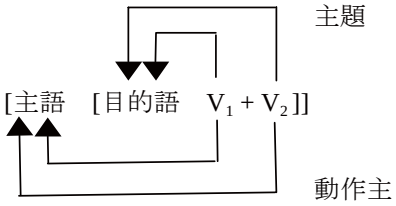
(45)



従って、他動性調和の現象を、語彙的複合動詞形成のメカニズムの帰結として導くことはできない。

(43) において、主語が「押し」と「倒す」の動作主として解釈され、目的語が双方の動詞の主題として解釈されることは、(46) に示すように、それぞれの動詞が主語と目的語に主題役割を与えることを示唆する。

(46)



主題役割がこのように与えられるのであれば、例えば、目的語が V_1 の動作主、V_2 の主題とし

て解釈されるようなことはありえない。さらに、この分析を支持する証拠を、影山 (1993) の議論の中に見出すことができる。影山は、(47) と (48) のような対比に基づいて、V_1 と V_2 の双方が主語および目的語を意味的に選択することを示す。

(47) a.　油が壁に染み付いた
　　 b.　蔦が棒に絡み付いた

(48) a. *蔦が棒に染み付いた
　　 b. *油が壁に絡み付いた

例えば、(47a) の文法性は、「油が壁に染みる」の適格さに対応し、(48a) の非文法性は、「蔦が棒に染みる」の不適格さに対応する。「染みる」(*simi*) は、液状の主語と個体状の目的語を選択するため、(47a) のみがこの選択制限を満たす。よって、この対比は、V_2 のみならず、V_1 も主語、目的語と選択関係にあり、主語、目的語を項とすることを裏付ける。

語彙的複合動詞 V_1+V_2 において、V_1 と V_2 の双方が、文内の他の構成素と選択関係にあるのであれば、*v* とも選択関係を有する。結果として、他動性調和現象は、*v* の選択制限の帰結として導かれる。(49a) は、(43) における V_1 と V_2 の目的語との選択関係、(49b) は、*v* の V_1 と V_2 との選択関係を示す。

(49) a.　[$_{VP}$ 太郎 [$_V$[$_V$ 押し]-[$_V$ 倒す]]]

b.　[$_{v'}$[$_{VP}$ 太郎 [$_V$[$_V$ 押し]-[$_V$ 倒す]]] *v**]

Chomsky (2000) 以降、*v* には二種あることが広く仮定されている。*v** は他動詞／非能格動詞を選択して、外項を指定部にとり、*v* は非対格動詞を選択する。(49b) では、「押す」、「倒す」が共に他動詞であるため、*v** の選択制限が満たされている。より一般的には、*v** の場合、V_1 と V_2 が共に他動詞あるいは非能格動詞であれば、選択制限と齟齬はない。また、*v* の場合は、V_1 と V_2 が共に非対格動詞である時のみ、選択要件が満たされる。よって、以下に再掲する他動性調和現象が説明される。

(50)　語彙的複合動詞 V_1+V_2 において、V_1 と V_2 は外項の有無に齟齬があってはならない。

他動詞／非能格動詞と非対格動詞を含む語彙的複合動詞は排除される。*v** が VP と併合すれば、非対格動詞が *v** の選択要件を満たさず、*v* が採用されれば、他動詞／非能格動詞が *v* の選択制限に抵触する。

V_1 と V_2 の双方が、文内の他の構成素と選択関係にあるという日本語の語彙的複合動詞の性質を観察し、この性質から他動性調和現象が導かれることを見てきた。影山 (1993) が指摘するように、他動性調和が日本語の複合動詞に特有の現象であるのであれば、日本語の特徴は、上記の性質を有する複合動詞の生成が可能であり、これを多用する点に求められる。なぜ、日本語ではこのような複合動詞が許容されるのだろうか。すでに紹介したように、語彙的複合動詞においては、V_1 と V_2 がそれぞれ独自の VP を投射せず、V_1+V_2 が単一の VP を投射することが、影山 (1993) によって示されている。影山は、この考察に基づいて語彙的複合動詞は語彙部門で形成されるとするが、V_1 と V_2 がそれぞれ文内の他の要素と選択関係にあることは、語彙的複合動詞が統語的に、すなわち、(51a) に示すように併合により形成されることを示唆する。[10]

(51) a.　$\gamma_1 = \{V_1, V_2\}$
　　b.　$\gamma_2 = \{DP, \{V_1, V_2\}\}$

目的語は、(51b) に示すようにこの複合動詞に併合し、V_1 と V_2 の双方から主題役割を与えられる。(51a) が可能であるためには、形態的には γ_1 が語として解釈され、統語的には γ_1 のラベルが適切に決定されなければならない。従って、この二つの条件が満たされるが故に、日本語では、二つの動詞の直接的な併合による複合動詞形成が可能になると考えられる。では、この二つの条件はどのように満たされるのだろうか。以下に、V_1 の形態的性質と前節で提案した述語屈折の分析が、この問いに答えを与えることを示す。

まず、語彙的複合動詞の V_1 は、(52) に示すように、動詞語幹＋*i* という連用形で表れる。[11]

(52) a.　押し倒す ＝　os-i + taos + ru
　　b.　滑り落ちる ＝　suber-i + oti + ru

これは、明確に語彙部門で形成される、語彙概念構造の操作を伴う複合動詞の場合と同様である。

(53)　飛び込む ＝　tob-i + kom

従って、形態部門が、語彙的複合動詞を語として解釈することに支障はない。

また、以下の例が示すように、動詞の連用接辞は、前節で提案した λ 素性の一種に他ならない。

(54) a.　花子は、いつも、[$_{vP}$ テーブルを押し]、花瓶を倒す
　　b.　太郎は、[$_{vP}$ 滑り]、穴に落ちた

(54) では、*v*P が λ 素性を有するため投射せず、λ 素性は連用 (preverbal) として与値される。実際、(55a) は、V_1 と V_2 の間にポーズを置いた場合には、(55b) の構造を与えられる。

(55) a. 花子が太郎を押し倒した
b. 花子が、[$_{vP}$ 太郎 $_i$ を押し]、*pro*$_i$ 倒した

従って、語彙的複合動詞は、正確には以下の構造をもつと考えられる。

(56) $\gamma = \{V_1[\lambda], V_2\}$

V_1 が λ 素性を有するが故に、γ は V_2 のラベルを受け継ぎ、γ のラベリングに問題は生じない。λ 素性は、V_2 により連用 (preverbal) を与値され、*-i* として具現化する。

以上の分析が正しければ、他動性調和現象を示す日本語の語彙的複合動詞の存在は、間接的にではあるが、φ 素性一致の欠如と関連していることになる。日本語は φ 素性一致を欠き、φ 素性一致に代わってラベリングを可能にする素性 λ を有する。λ 素性は、DP、PP においては文法格、述語においては屈折として表れるが、動詞が λ 素性を有する場合には、二つの動詞を直接、統語的に併合することが可能になる。このように形成された複合動詞が、語彙的複合動詞である。

5. 日本語の主要部後置型語順に関する考察

日本語の項省略現象、多重文法格現象、スクランブリング、語彙的複合動詞について分析を行ってきたが、本論を締めくくる前に、φ 素性一致の欠如を基礎とする分析が、主要部後置型語順とどのように関連するかを考える。最初に Saito (2012) で提案した日本語句構造の形成メカニズムとそれに基づく主要部後置型語順の分析を紹介する。その上で、φ 素性一致の欠如がこのメカニズムを可能にすることを示す。

第２節では、格素性の値を必要とする DP や PP が領域内を探索して、格を与値されるとする Bošković (2007) の提案を採用し、日本語文法格の分析を行った。この分析は、主格主語のみならず主格目的語も、主格を与値する T を領域内に含むことを含意する。この点において、主格目的語が、(57b) に示すように、T の投射内に移動するとする Koizumi (1998) の提案と合致するものである。

(57) a. 花子がテルグ語がわかる (こと)

b.　[$_{TP}$ 花子が [$_{T'}$ テルグ語が [$_{T'}$ [$_{vP}$ *t* [$_{v'}$ [$_{VP}$ *t* わかる (wakar)] *v*]] T (-ru)]]]

しかし、Yatsushiro (1999) は、主格目的語は (57b) にようには移動せず、目的語の位置に留まることを示す。ここでは、遊離数量詞の分布を考察することにより、この事実を確認する。

まず、Miyagawa (1989) による以下の対比を見よう。

(58) a.　学生が３人この鍵でドアを開けた
　　b. ??学生がこの鍵で３人ドアを開けた

(58a-b) は、遊離数量詞が、隣接する名詞句を修飾することを示す。[12] (58b) では、「３人」と「学生」が隣接していないため、意図された修飾関係が成立しない。この観察をふまえて、Miyagawa (1989) は、(59) の文法性が非対格仮説の証拠となることを指摘する。

(59)　ドアがこの鍵で３つ開いた

非対格仮説によれば、(59) の「開く」が非対格動詞であることから、「ドア」は、(60) に示すように、目的語の位置で主題の役割を得た後に、主語の位置に移動する。

(60)　[$_{TP}$ ドアが [$_{vP}$ [$_{VP}$ この鍵で [$_{VP}$ *t* ３つ 開い (ak)]] *v*] T (ta)]

従って、「ドア」が移動する前に、遊離数量詞「３つ」が「ドア」を修飾する関係が成立すると考えることができる。

Miyagawa (1989) の考察をふまえて、次に、以下の対比を考える。

(61) a.　学生が３人テルグ語がわかる (こと)
　　b. ??学生がテルグ語が３人わかる (こと)

(61b) は、「学生」と「３人」が隣接条件を満たさず、不適格であるが、(57b) に示した主格目的語の移動分析の下では、誤った予測がなされる。この例は、以下のように派生されるからである。

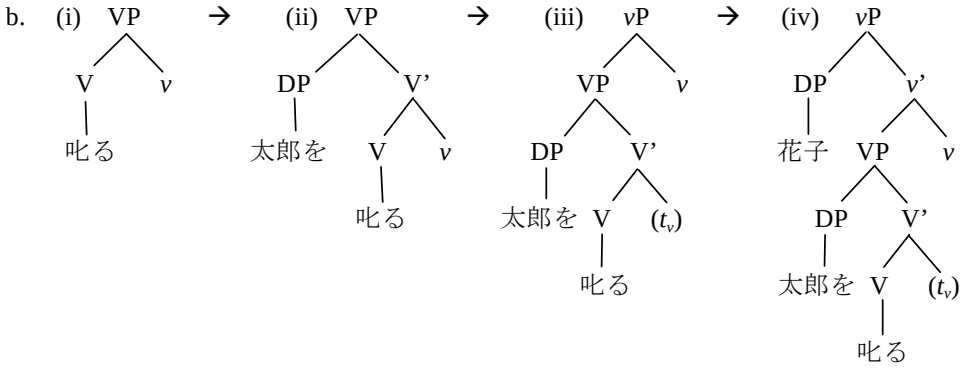
(62) [$_{TP}$ 学生が [$_{T'}$ テルグ語が [$_{T'}$ [$_{vP}$ *t* ３人 [$_{v'}$ [$_{VP}$ *t* わかる (wakar)] *v*]] T (-ru)]]]

よって、主格目的語は、T を領域内に含む位置に移動せず、目的語の位置に留まるとの結論を得る。

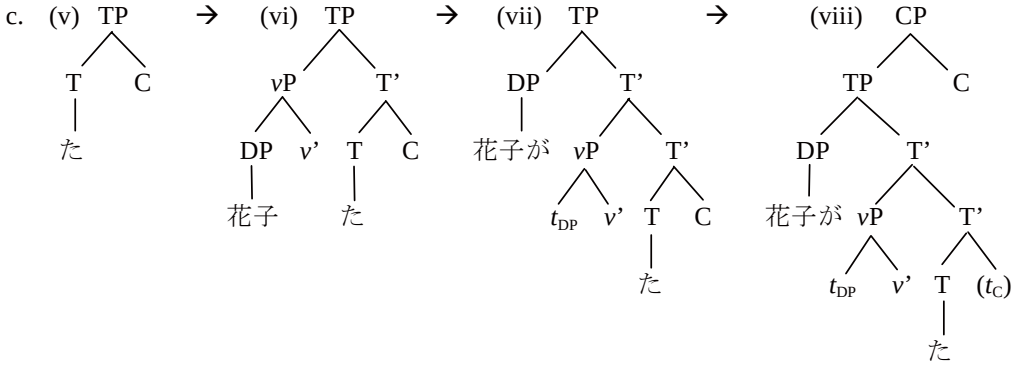
では、主格目的語は、どのように主格を与値されるのだろうか。Saito (2012) では、Kitagawa (1986)、Shimada (2007)、外池 (2009) 等が提案する主要部移動による句構造生成のメカニズムを採用することにより、この問いに答えようとする。フェイズ理論に基づく外池 (2009) の提案を (63a) に適用した派生を (63b-c) に示す。[13]

(63) a. 花子が太郎を叱った

b.



c.



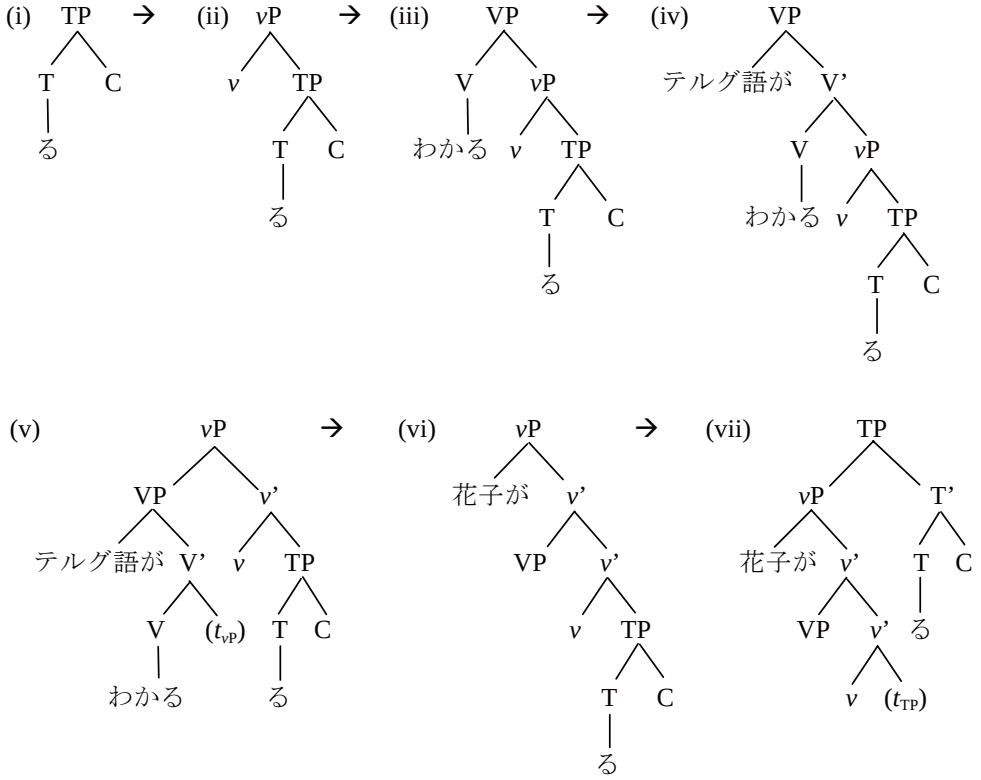
(63b) に示す *v*P フェイズの派生は、フェイズ主要部の *v* から始まる。*v* は V を選択することから、まず、(i) のように V と併合する。次に、{V, *v*} は、V の選択要件を満たすために、目的語の「太郎」と併合する。対格は、{V, *v*} が与値することが仮定されており、本論第３節で提示した文法格与値の分析に従えば、この時点で「太郎」に対格が与えられる。(iii) では、*v* が VP を補部とするために移動し、VP と内的に併合する。最後に外項の「花子」が *v*P

と併合し、*v*P フェイズが完成する。(63c) は、CP フェイズの派生を示す。フェイズ主要部の C が T と併合し、(v) を得る。(vi) では、(63b) で生成した *v*P が併合し、T の選択要件を満たす。次に、「花子」が移動 (内的に併合) し、{T, C} により主格を与値される。最後に、C が TP を補部とするために、TP と内的に併合して、(viii) の句構造が派生される。[14]

Saito (2012) は、(63) に例示した句構造派生のメカニズムの帰結を二つ指摘する。第一に、主格目的語の問題の解決が可能になることがある。すでに見たように、主格目的語は、目的語の位置に留まり、かつ、主格を与値される。Takahashi (2010) は *v* が対格の与値に関わる場合にのみ、フェイズ主要部となることを提案しているが、この仮定に従えば、(64a) に再掲する (57a) は、(64b) に示すように派生される。

(64) a.　花子がテルグ語がわかる (こと)

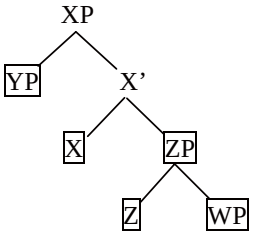
b.



この例では、対格を与値される項がないため、C が唯一のフェイズ主要部となる。(i)-(iii) では、選択要件に従って、T-C、*v*-T-C、V-*v*-T-C の構成素が順次形成される。(iv) で目的語が併合し、この時点で {T, C} により主格を与値される。このように、主格目的語は、移動することなく、目的語の位置で主格を与えられる。次に、(v) に示すように、*v*-T-C が内的に併合し、*v*P を形成する。(vi) では、主語が併合し、主格を与値される。(vii) で、T-C が内的に併合して、T が *v*P を補部とする構造ができる。最後に、C の内的併合をもって派生が完成する。

外池 (2009) の派生メカニズムを仮定することにより得られるもう一つの帰結は、Kayne (1994) の線状的先行関係の構造対応公理 (Linear Correspondence Axiom, LCA) により、日本語の主要部後置型語順を導く可能性が開かれることである。句構造は併合によって形成されるが、併合は階層関係のみを創出し、線上的先行関係を指定しない。よって、構成素の線上的先行関係を決定する理論が必要となる。Kayne (1994) の LCA は、線上的先行関係が、構造上の非対称的 c 統御関係に対応するとするものであり、この役割を果たす。(65) の構造を用いて、Chomsky (1994) が修正を加えた LCA を簡単に見ておこう。

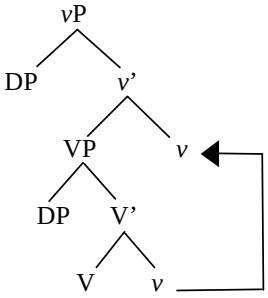
(65)



XP 内の要素の線上的先行関係を決定するのは、主要部と最大投射の非対称的 c 統御関係である。指定部にある YP は、主要部 X と補部 ZP を非対称的に c 統御する。よって、指定部は、主要部と補部に先行する。また、主要部 X は、補部内のすべての要素、すなわち主要部 Z と補部 WP を非対称的に c 統御し、その結果として、主要部は補部に先行する。このようにして、指定部 – 主要部 – 補部の語順が導かれる。

LCA は極めて有力な仮説であるが、主要部 – 補部の語順を予測するため、主要部後置型言語については、より詳細な分析が必要となる。Kayne 自身が提示する分析は、補部が主要部を非対称的に c 統御する位置に移動するとするものであるが、CP を含めすべての句が主要部後置型である日本語のような言語にこの分析が適用しうるかは定かではない。これに対して、外池 (2009) の派生メカニズムは新たな可能性を示唆する。*v*P フェイズを例にとって、LCA の適用を考えてみよう。

(66)

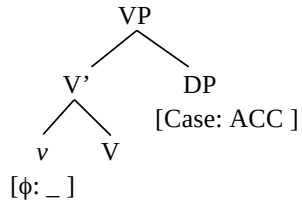


v は、まず V と併合し、VP と内的に併合することにより、*v*P を投射する。移動には、顕在的移動と非顕在的移動があるが、(66) における *v* の移動が非顕在的であると仮定しよう。非

顕在的移動では、音声素性が始点で解釈される。また、LCA は、表層的な語順に係る公理であり、音声素性に位置に基づいて、線上的先行関係を決定するものと考えられる。よって、LCA が (66) の構造から、線上的先行関係を導く際には、*v* を着点ではなく、始点にあるものとすることになる。この結論に従えば、主語 DP は目的語 DP と動詞 V を非対称的に c 統御し、目的語 DP は V を非対称的に c 統御することから、主語 (指定部) – 目的語 (補部) – 動詞 (主要部) の語順を得る。V と *v* の先行関係は指定されないが、この問題は、*v* が V に付く接辞であるとすることにより解決しうる。

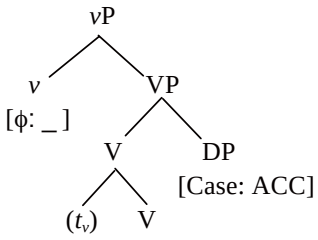
Saito (2012) では、外池 (2009) が提案する句構造形成のメカニズムを普遍的なものとして、主要部前置型／後置型の語順の相違を、主要部の内的併合が顕在的であるか非顕在的であるかの相違に基づいて分析することを示唆した。一方、Kitahara (2013) は、日本語については外池 (2009) の派生、英語については、*v* が {V, DP} と併合する標準的な派生が適用されるとしている。本論の第２節で提示した ϕ 素性と格素性与値のメカニズムにより、Kitahara の提案を支持する証拠を得ることができる。一例として、英語の *v*P について考えてみよう。主要部の内部併合を伴う派生を (67) に示す。

(67) a.



→

b.



(67a) において、目的語が {*v*, V} と併合し、対格を与値される。ϕ 素性を伴う *v* は、目的語が領域内にないため、この時点では、ϕ 素性が与値されない。(67b) に示すように、*v* は VP と内的に併合することによって、はじめて目的語を領域内に探索しうる。しかし、目的語の DP はすでに格を与値されているため、活性条件により、*v* と目的語の間に一致の関係は成立しない。*v* の ϕ 素性は与値されず、結果として派生が破綻する。第２節において英語では項省略が許容されないことを説明する際に、ϕ 素性の与値に係る活性条件が不可欠な役割を果たしたが、この分析を維持する限り、英語には、(67) ではなく、*v* が {V, DP} と併合する標準的な派生が適用されるとの結論を得る。

以上の議論は、主要部の内部併合を伴う派生は、英語のみならず、より一般的に ϕ 素性一致言語に適用されないことを含意する。日本語においてこの派生が可能であるのは、ϕ 素性一致を欠くからに他ならない。[15] 日本語では、ϕ 素性一致の欠如が主要部の内的併合を伴う派生を可能とし、また、主要部の内的併合が非顕在的であるが故に、主要部後置型の語順となるということができる。主要部後置型の語順は、Kayne (1994) が指摘するように、主要部を非対称的に c 統御する位置への補部の移動によっても得られる。従って、すべての主要部

後置型言語が、外池 (2009) が提案する派生のメカニズムを採用するわけではない。しかし、日本語においては、φ 素性の欠如と主要部後置型の語順が密接に関連していると思われる。

6. 結論

本論では、日本語の基本的性質として、φ 素性一致の欠如を仮定し、その帰結を追究した。第２節では、まず、項省略現象が、φ 素性一致の欠如の直接的な帰結として導かれるとする Saito (2007) の議論を概観した。その上で、φ 素性一致の欠如と矛盾しない文法格与値メカニズムを提供するものとして、Bošković (2007) の提案を採用し、日本語文法格の分析を提示した。この分析の顕著な帰結としては、主格、属格に見られる多重文法格現象の説明がある。第３節では、日本語文法格の機能が、ラベリングを可能にすることにあることを提案した。また、文法格と述語の屈折を類似するものとして分析する Sells (1995)、An (2009) を発展させて、両者を、ラベリングを補助する同一の素性の具現化であるとする分析を提示した。この分析により、日本語において、非演算子移動、非 NP 移動であるスクランブリングが許容されることに説明を与えた。さらに、第４節では、影山 (1993) において詳細に検討されている語彙的複合動詞の特異な性質も、この分析の帰結として導かれることを示した。第５節では、主格目的語の文法格与値をとりあげて、併合による句構造形成のあり方を検討し、日本語の主要部後置型語順が、φ 素性一致の欠如と密接に関連していることを示唆した。

本論の冒頭で紹介したように、1980 年代以降、日本語文法の特徴を説明するパラメターが様々な形で追究されてきた。本論は、φ 素性一致の欠如とその結果必要となるラベリング補助素性 λ によって、日本語の文法的特徴に説明を与えることを提案し、このプロジェクトを発展させることを試みたものである。この試論を検証し、さらに発展させていくためには、項省略、文法格、スクランブリンブ、複合動詞、線状化のそれぞれの現象について、比較統語論の観点から分析を深めていく必要がある。

Notes

* 本論は、2012 年 9 月にフンボルト大学で開催された *Formal Approaches to Japanese Linguistics* 6 における口頭発表を基礎としており、現在のバージョンは、コネティカット大学統語論セミナー (2013 年 3 月) 及び国立国語研究所共同研究プロジェクト第 6 回研究会 (2013 年 5 月、南山大学) で発表したものである。３回の発表の場で、多くの方々から有益なコメントをいただいた。特に、Jonathan Bobaljik、Željko Bošković、藤井友比呂、岩谷悠馬、岸本秀樹、Luigi Rizzi、杉崎鉱司、Hubert Truckenbrodt、八代和子の各氏に、この場を借りてお礼を申し上げる。

1. Chomsky (2008) では、φ 素性は元来フェイズ主要部の C と *v* に属し、T と V によって受け継がれるものとされており、本節の後半部で紹介する Bošković (2007) でもこの分析が採用されている。

この分析に従えば、正確には、*v* ではなく V が目的語の DP と一致することになるが、ここでは、いずれの分析を採用しても議論に影響がないため、T と *v* が φ 素性を有するというより単純な分析を仮定する。

2. (9b) において DP の格を ACC としているが、これは、DP が先行する文脈において目的語であったことを想定したものであり、もし主語であれば、NOM となる。格の具体的な値は、議論に影響を与えるものではない。
3. Bošković (2007) は、(13c) における DP と T の関係を一致の一種とみなし、この関係が活性条件を満たさないため、活性条件そのものの除去を提案している。一方で、活性条件が項省略の説明において重要な役割を担うことはすでに見た通りである。本論では、活性条件を φ 素性一致に係る条件として維持する。
4. この問題は、機能範疇主要部が複数の DP と一致することを許容する Hiraiwa (2001) の多重一致仮説により回避することができるが、日本語の多重格に関する限り、Bošković (2007) の分析がより直接的な説明を可能にすることは明らかであろう。(15) に示した多重主語文の分析は一般性を有し、例えば、英語においても多重主語文が可能であることを予測する。このことは一見問題となるように思われるが、次節で、英語においては多重主語文が他の要因により排除されることを示す。
5. 日本語の名詞句構造については、Saito, Lin and Murasugi (2008) を参照されたい。
6. スクランブリングの非演算子移動、非 A 移動としての特徴付けは、Webelhuth (1989) による。(22) のような例を詳細に検討した Saito (1989) では、日本語スクランブリングを、演算子―変項の関係を形成しない A’ 移動としている。
7. 本文では、λ 素性を句に付与されうるものとしているが、Chomsky (2000) の包括条件 (inclusiveness condition) を考慮して、λ を独立した機能範疇とすることが北原久嗣氏および Željko Bošković 氏により示唆された。この可能性は追究すべきものと思われるが、λ が意味を欠く純粋な形式的な素性であることから、ここでは、主要部とはみなさないことにする。
8. 第５節では、Chomsky (2008) の提案に基づき、主格、属格、対格がそれぞれ T-C、N-D、V-*v* に与値されるものとして、分析に修正を加える。
9. 例えば、使役の接尾辞「させ」が統語的には独立した動詞として振る舞うことは、Kuroda (1965b) 以降、広く仮定されている。使役文が補文構造を伴うことについて、最もよく知られている証拠としては、主語指向性を示す「自分」の解釈がある。使役文内の「自分」は、使役者と被使役者のいずれも先行詞とすることができる。この事実は、被使役者が補文の主語であることを示す。
10. 二動詞の直接的な併合による語彙的複合動詞の派生は、エド語結果連鎖動詞、中国語複合動詞との比較に基づき、Saito (2001) ですでに提案したものである。
11. 動詞の語幹が母音で終わる場合には、以下のように、*-i* が削除される。

(i)　群れ飛ぶ ＝　mure-~~i~~ + tob

12. Miyagawa (1989) は、より正確には、遊離数量詞と名詞句が姉妹関係になければならないとしている。
13. 外池 (2009) は英語の分析を提示しており、また、異なる仮定を採用しているため、(63) に示す派

生は細部においては外池の提案を忠実に反映したものではない。しかし、派生の基本的なメカニズムについては、外池の提案をほぼそのまま適用している。

14. (63b-c) で形成される構造には、第３節で提示したラベリングのメカニズムが適用されるものと仮定するが、唯一問題となりうるのは、(viii) における上位 T' = {*v*P, TP (下位 T')} のラベリングである。解決策としては、(i) 主要部の内部併合の痕跡 (コピー) は、統語的・意味的役割が全くないため、完全に削除される、(ii) T／TP と併合する *v*P も λ 素性を有し、T により音声的には空の値を与えられる、という二つの可能性が考えられる。

15. 日本語が、特に、主要部の内的併合を伴う派生を採用する理由としては、Pesetsky (1989) が提案する earliness principle が考えられる。素性の与値ができるだけ早期になされなければならないとすると、格素性の与値のみを必要とする言語では、目的語が併合されると同時に対格が与値される派生が選ばれることになる。φ 素性と格素性の双方が与値されなければならない場合には、両方を同時に満たすことができず、*v* と目的語のいずれかが移動しなければならない。主要部の内的併合を伴う派生では当該の移動が (67b) に示した主要部の内的併合となり、標準的な派生では目的語の NP 移動となる。従って、二つの派生は、earliness によっては区別されない。

References

An, Duk-Ho (2009) "A Note on Genitive Drop in Korean." *Nanzan Linguistics* 5: 1-16.

Bobaljik, Jonathan (1995) *Morphosyntax: The Syntax of Verbal Inflection*. Ph.D. dissertation, MIT.

Bošković, Željko (2007) "On the Locality and Motivation of Move and Agree: An Even More Minimalist Theory." *Linguistic Inquiry* 38: 589-644.

Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris Publications.

Chomsky, Noam (1994) "Bare Phrase Structure." In Gert Webelhuth (ed.), *Government and Binding Theory and the Minimalist Program*, 383-439. Oxford: Blackwell.

Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework." In Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka (eds.), Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik, 89-155. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, Noam (2008) "On Phases." In Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta (eds.), *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essay in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, 133-166. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Chomsky, Noam (2013) "Problems of Projection." *Lingua* 130: 33-49.

Fukui, Naoki (1986) *A Theory of Category Projection and its Applications*, Ph.D. dissertation, MIT.

Hale, Ken (1980) "Remarks on Japanese Phrase Structure: Comments on the Papers on Japanese Syntax." *MIT Working Papers in Linguistics* 2: 185-203.

Hiraiwa, Ken (2001) "Multiple Agree and the Defect Intervention Constraint." *MIT Working Papers in Linguistics* 40: 67-80.

Huang, C.-T. James (1992) "Complex Predicates in Control." In Richard K. Larson, et al. (eds.), *Control and*

Grammar, 109-147. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

影山太郎 (1993)『文法と語形成』東京：ひつじ書房.

Kayne, Richard S. (1994) *The Antisymmetry of Syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Kim, Soowon (1999) “Sloppy/Strict Identity, Empty Objects, and NP Ellipsis.” *Journal of East Asian Linguistics* 8: 255-284.

Kitagawa, Yoshihisa (1986) *Subjects in Japanese and English*. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst.

Kitahara, Hisatsugu (2013) “Simplest Merge and Language Variation.” Unpublished manuscript, Keio University.

Koizumi, Masatoshi (1998) “Remarks on Nominative Objects.” *Journal of Japanese Linguistics* 16: 39-66.

Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Kuroda S.-Y. (1965a) *Generative Grammatical Studies in the Japanese Language*. Ph.D. dissertation, MIT.

Kuroda, S.-Y. (1965b) “Causative Forms in Japanese.” *Foundations of Language* 1: 30-50.

Kuroda, S.-Y. (1988) “Whether We Agree or Not.” *Linguisticae Investigationes* 12: 1-47.

Miyagawa, Shigeru (1989) *Structure and Case Marking in Japanese*. San Diego: Academic Press.

Murasugi, Keiko and Tomoko Hashimoto (2004) “Three Pieces of Acquisition Evidence for the *v*-VP Frame.” *Nanzan Linguistics* 1: 1-19.

Oku, Satoshi (1988) *A Theory of Selection and Reconstruction in the Minimalist Program*. Ph.D. dissertation, University of Connecticut.

Otani, Kazuyo and John Whitman (1991) “V-raising and VP-ellipsis.” *Linguistic Inquiry* 22: 345-358.

Pesetsky, David (1989) “Language-Particular Processes and the Earliness Principle,” Unpublished manuscript, MIT.

Saito, Mamoru (1982) “Case Marking in Japanese: A Preliminary Study.” Unpublished manuscript, MIT.

Saito, Mamoru (1989) “Scrambling as Semantically Vacuous A’-movement.” In Mark R. Baltin and Anthony S. Kroch (eds.), *Alternative Conceptions of Phrase Structure*, 182-200. Chicago: University of Chicago Press.

Saito, Mamoru (2001) “Movement and θ-roles: A Case Study with Resultatives.” In Yukio Otsu (ed.), *The Proceedings of the Second Tokyo Conference on Psycholinguistics*, 35-60. Tokyo: Hituzi Syobo.

Saito, Mamoru (2007) “Notes on East Asian Argument Ellipsis.” *Language Research* 43: 203-227.

Saito, Mamoru (2012) “Case Checking/Valuation in Japanese: Move, Agree or Merge?” *Nanzan Linguistics* 8: 109-127.

Saito, Mamoru, T.-H. Jonah Lin and Keiko Murasugi (2008) “N’-Ellipsis and the Structure of Noun Phrases in Chinese and Japanese.” *Journal of East Asian Linguistics* 17: 247-271.

Sells, Peter (1995) “Korean and Japanese Morphology from a Lexical Perspective.” *Linguistic Inquiry* 26: 277-325.

Şener, Serkan and Daiko Takahashi (2010) “Argument Ellipsis in Japanese and Turkish.” *MIT Working Papers in Linguistics* 61: 325-339.

Shimada, Junri (2007) “Head Movement, Binding Theory, and Phrase Structure.” Unpublished manuscript, MIT.

篠原道枝 (2006)『日本語の項削除文の LF コピー分析 ― 痕跡の要素を含む観点から』修士論文，南山

大学大学院人間文化研究科言語科学専攻.

Takahashi, Masahiko (2010) “Case, Phases, and Nominative/Accusative Conversion in Japanese.” *Journal of East Asian Linguistics* 19: 319-355.

外池滋生 (2009)「ミニマリスト・プログラム」, 中島平三 (編)『言語学の領域（I)』東京：朝倉書店, 135-168.

Ura, Hiroyuki (1999) “Checking Theory and Dative Subject Constructions in Japanese and Korean.” *Journal of East Asian Linguistics* 8: 223-254.

Webelhuth, Gert (1989) *Syntactic Saturation Phenomena and the Modern Germanic Languages*. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst.

Williams, Edwin (1977) “Discourse and logical form.” *Linguistic Inquiry* 8: 101-139.

Yang, Dong-Whee (1983) “The Extended Binding Theory of Anaphors.” *Language Research* 19: 169-192.

Yatsushiro, Kazuko (1999) *Case Licensing and VP Structure*. Ph.D. dissertation, University of Connecticut.

主語・目的語省略の比較統語論*

高橋　大厚

1. はじめに

自然言語の中には、ある一定の条件の下で時制節の主語や目的語を音声的に表出しなくてもよい言語があり、このような音形のない主語や目的語(空主語・空目的語)をどのように扱うかは変形生成文法理論において盛んに研究されてきた[1]。1990 年代以降、ある種の空主語・目的語を省略を用いて分析する考え方が提示され、その妥当性の検証や当該の省略操作の詳細なメカニズムの解明が精力的に行われている[2]。また自然言語には空主語・目的語を許す言語が多く存在するが、それらの全てに一様に省略が関与しているかどうか、すなわち主語・目的語省略がどの程度通言語的に観察されるのかという比較統語論的な調査も重要な研究課題となってきた[3]。言語の共通特性と変異部分を明らかにすることは、生成言語学の中心的な研究目標である普遍文法の解明に不可欠であり、主語・目的語省略の比較統語論研究もまさしくこの視座に立脚している。

本論考の目的は、筆者自身の研究を含めた、空主語や空目的語を許す言語に対してこれまで行われてきた研究の結果を概観し(第 2 節)、それを説明する当該省略現象のメカニズムを提示することである(第 3 節)。最終節である第 4 節は、要点をまとめ、本論考が言語獲得研究に対してどのような意味を持つかを考察し、結論とする。

---

* 本研究は国立国語研究所共同研究プロジェクト「言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約：日本語獲得に基づく実証的研究」の補助を受けている。プロジェクトリーダーの村杉恵子氏、及びプロジェクト構成員に感謝する。また、本論文の一部は 2012 年 7 月 28、29 日に南山大学言語学研究センターで開催された比較統語論国際共同研究プロジェクト第 15 回ワークショップにおいて発表した研究に基づいている。ワークショップ出席者、特に齋藤衛氏に謝意を表する。

1 Huang (1984)、Jaeggli and Safir (1989)、Kuroda (1965)、Rizzi (1982)など参照。

2 Hoji (1998)、Huang (1991)、Kim (1999)、Oku (1998)、Otani and Whitman (1991)など参照。

3 Oku (1998)、Saito (2007)、Takahashi (forthcoming)など参照。

2. 主語・目的語省略の通言語的分布

空主語や空目的語が観察される言語において、それらに省略が関与していると言うとき、それはどのような理由によるのであろうか。日本語を例に具体的に考察する。

よく知られているように、日本語は上述のような音形のない要素を許容する言語である。

(1) ロン: ハリーが廊下をうろついていたよ。
ハーマイオニー: *e* 何かを探していたのよ。

(2) ロン: ハリーが廊下をうろついていたよ。
ハーマイオニー: スネイプ先生が e_1 見かけたら、きっと e_2 e_3 叱るわ。

(1)はロンとハーマイオニーの会話である。ハーマイオニーの発話は主語が表出していない(この空主語を *e* で表示している)。この文脈において *e* はロンの発話で言及されているハリーを指すと解釈するのが自然である。(2)も同様にロンとハーマイオニーの会話である。ハーマイオニーの発話は複文構造をしており、従属節の目的語と主節の主語と目的語が音声的に空である(それぞれ、e_1、e_2、e_3 と表記されている)。この文脈では、e_1 と e_3 はハリー、e_2 はスネイプ先生を指すと解釈するのが自然である。このように主語や目的語といった文の成分を音声的に表出しないことは日本語において極めて一般的であり、例えば英語などとの違いを示す日本語の特徴の一つである。

ここで次例を考察しよう。

(3) a. ロンは自分の母親を尊敬している。
b. ハリーも *e* 尊敬している。

Otani and Whitman (1991)などが類似した例について観察しているように、(3b)は(3a)に後続する文脈で両義的である。「ハリーもロンの母親を尊敬している。」という厳密な同一性の解釈か、「ハリーも自分、すなわちハリーの母親を尊敬している。」という緩やかな同一性の解釈のいずれかを持ちうる。ここでは

特に後者の、緩やかな同一性の解釈が可能であることが重要である。

(3)は空目的語に関するものであったが、次例(4)は同様のことが空主語にも成り立つことを示している。

(4)　a.　ロンは自分の恋人が日本語を話せると思っている。
　　b.　ハリーは *e* フランス語を話せると思っている。

Oku (1998)が類似した例文について観察しているように、(4a)に後続する場合(4b)は厳密な同一性解釈と緩やかな同一性解釈のいずれも許容するという意味で両義的である。やはり後者の読みが可能であることに注意されたい。

変形生成文法理論の登場から 1980 年代頃まで空主語や空目的語を一種の代名詞とみなす仮説が有力であった[4]。この代名詞分析は、(1)や(2)に見られるように、空主語・空目的語が談話内に存在する人・ものを指すことができるという代名詞が持つ特性を示すことにより部分的に支持される。その場合、(3b)と(4b)は各々(5a-b)のように分析される。

(5)　a.　ハリーも *pro* 尊敬している
　　b.　ハリーは *pro* フランス語を話せると思っている

ここで *pro* は音形のない代名詞(空代名詞)を表している。そうすると例えば(3b)は、音形がある代名詞が生じている(6b)や英語の(7b)と本質的に同様なはずである。

(6)　a.　ロンは自分の母親を尊敬している。
　　b.　ハリーも**彼女を**尊敬している。
(7)　a.　Ron admires his mother.
　　b.　Harry admires **her**, too.
　　c.　Harry does [$_{VP}$ *e*], too.

しかし代名詞が生じている(6b)や(7b)は(3b)とは一つの点で異なっており、それ

[4] Kuroda (1965)など。代名詞ではない別の要素であるとみなす提案が Huang (1984)、Hasegawa (1984/85)により提案された。その反論としては Nakamura (1987)が挙げられる。

は緩やかな同一性の解釈を持ちえないということである。すなわち、(6b)で「彼女」は「ロンの母親」を指しえるが「ハリーの母親」を指すことはできない。同様に(7b)は「ハリーもロンの母親を尊敬している。」という意味は持つが、「ハリーも自分の母親を尊敬している。」という解釈は持たない。

このことは、少なくとも(3b)が緩やかな同一性の解釈を持つ場合は、(5a)のように分析することが妥当でないことを示している。もちろん厳密な同一性の解釈は(6b)や(7b)も持つので、(3b)がそのような読みを持つ場合は(5a)の分析が適当かもしれない。しかし(3b)が示す緩やかな同一性は(5a)では捉えられないと思われる。

興味深いことに、(7)において緩やかな同一性の解釈は省略が生じている(7c)が持つことができる。(3b)と(7c)の共通性、すなわちいずれも緩やかな同一性の読みを持つということを捉えるには、(3b)にも省略が生じていると考えればよい。(8)は(3b)の省略にもとづく分析である。

(8)　　ハリーも ~~自分の母親を~~ 尊敬している

これは、(3b)の目的語位置には代名詞ではなく「自分の母親を」という名詞句が生じており、それが先行文(3a)の目的語との同一性のもとで音声的な省略を受けていることを示している。また(4b)の緩やかな同一性を生む空主語も同様の分析により説明される。Kim (1999)や Oku (1998)により提案されたこの分析のもとでは、(3b)が「ハリーも自分の母親を尊敬している」という読みを持つことが即座に捉えられる[5]。

では日本語以外の空主語や空目的語を許す言語においても、その空要素は同様の特性を持っているのであろうか。Oku (1998)は次例を用いスペイン語の空主語を考察している。

(9)	a.	María	cree	que	su	propuesta	será	aceptada.
		Maria	believes	that	her	proposal	will-be	accepted

[5] 厳密に言えば、(8)の省略は(7c)の省略とは若干の違いがある。(8)では目的語名詞句のみが省略されているのに対して、(7c)では動詞句が省略されている。Otani and Whitman (1991)は、(3b)でも動詞句が省略されているとする分析を提案しているが、これは Kim (1999)や Oku (1998)により反論が提示されている。この議論の展開については有元・村杉 (2005)や Takahashi (2008)が詳しい。

'Maria believes that her proposal will be accepted.'

b. Juan también cree que *e* será aceptada.
Juan also believes that it will-be accepted
'Juan also believes that it will be accepted.'

(9b)の埋め込み節には空主語が生じている。(9a)に後続する文脈で(9b)は厳密な同一性の解釈、つまり「フアンもマリアの提案が採用されると信じている。」という解釈は持つが、緩やかな同一性の解釈「フアンも自分(フアン)の提案が採用されると信じている。」を意味することはできない。このような観察に基づきOku (1998)は、スペイン語の空主語は従来標準的に仮定されてきたように代名詞と分析されると論じている。

そうすると、自然言語に観察される空主語・空目的語は、日本語の特に緩やかな同一性を示すもののような省略により生じるものと、スペイン語の空主語のような空代名詞であるものの(少なくとも)二種類に分類される。ここでスペイン語の空主語は何故省略により生じることができないのかという疑問が出てくる。本論考では、Saito (2007)、Şener and Takahashi (2010)、Takahashi (forthcoming)に従い、時制辞(T)や軽動詞(*v*)などの機能範疇主要部とそれらと関係する句との間の一致の有無が省略の可能性に深く関与していると仮定する[6]。より具体的には、機能範疇と一致を起こす句は省略をうけることができないと仮定する。この仮定の詳細、すなわち一致と省略がどのように関係しているかについての具体的な理論的考察は次節に述べることとして、ここでは日本語とスペイン語の一致に関する比較的明白な事実観察に言及を留めることにする。よく知られているように、日本語は主語・目的語と機能範疇との間の一致がない言語であり(Kuroda (1988)、Fukui (1988)など)、対照的にスペイン語は主語と時制辞との一致が存在する言語である(Jaeggli and Safir (1987)など)。上記の仮説によれば、日本語の主語や目的語は機能範疇との一致を示さないので省略されることが可能であり、他方スペイン語の主語は時制辞と一致するので省略されることができない、ということになる。

この考え方の妥当性は Şener and Takahashi (2010)のトルコ語に関する観察により支持される。まずよく知られているトルコ語の基本的特徴を見ることに

[6] 代案としては、Oku (1998)により提案された、名詞句省略をかき混ぜ(自由語順現象)と関係づける立場がある。この仮説に対する反論は Takahashi (forthcoming)において指摘されている。

する。

(10) a. (Ben) bu makale-yi yavaşyavaş oku-yacağ-**ım**
(I) this article-ACC slowly read-FUT-1SG
'I will read this article slowly.'

b. (Biz) her hafta sinema-ya gid-er-**iz**
(we) every week movies-DAT go-AOR-1PL
'We go to the movies every week.'

上記(10)は、主語が変わると動詞末端の屈折接辞の形態が変わることを示している。つまりトルコ語には主語と時制辞との間が一致が存在する。対して、ここでは特に例示しないが、目的語と動詞(より正確には軽動詞機能範疇)の間の一致は日本語と同様存在しない。さらに次例は、トルコ語は空主語や空目的語を許容することを示す。

(11) *e* *e* at-tı-m
throw-PAST-1SG
'lit. I threw *e*.'

この例では、表面的には屈折した動詞のみが現れており、主語と目的語は表出していない。主語は動詞上の一致形態素により一人称単数であることがわかり、また目的語はその文が使われる文脈中の適当なものを指すと解釈される。

ここでトルコ語は上述の日本語とスペイン語の「混成」であることに気づく。つまりトルコ語の時制節の主語はスペイン語のそれのように動詞に付加した一致要素と一致を示し、他方その目的語は日本語のそれのように一致を示さない。そうすると、主語・目的語省略が一致の欠如と相関するという仮説では、トルコ語では空主語は省略により生成されないが空目的語は省略により生じうることを予測する。Şener and Takahashi (2010)はこの予測がまさに以下の例文において裏付けられると論じている。

(12) a. Can [*pro* anne-si]-ni eleştir-di.
John his mother-3SG-ACC criticize-PAST
'John criticized his mother.'

b. Filiz-se *e* öv-dü.
Phylis-however praise-PAST
'lit. Phylis, however, praised *e*.'

(13) a. Can [[*pro* oğl-u] İngilizce öğren-iyor diye]
John his son-3SG English learn-PRES COMP
bil-iyor.
know-PRES
'John knows that his son learns English.'

b. Filiz-se [*e* Fransızca öğren-iyor diye]
Phylis-however French learn-PRES COMP
bil-iyor.
know-PRES
'lit. Phylis, however, knows that *e* learns French.'

まず(12b)は空目的語を含む文であり、(12a)に後続する文脈に生じている。この場合、(12b)は両義的であり、特に緩やかな同一性の解釈を持ちうる。これは、その空目的語が省略により生じうることを示す。他方、(13b)では埋め込み時制節に空主語が生起している。(13a)に後続する文脈において、(13b)は厳密な同一性の読みしかなく、緩やかな同一性の解釈が不可能であることはその空主語が省略により生じたものではないことを示している[7]。

以上、本節では空主語や空目的語が観察される日本語、スペイン語、トルコ語を考察し、主語・目的語が省略を受けるためにはそれらが機能範疇との一致をしないことが必要であるという一般化(以下、反一致条件と呼ぶ)が得られることを述べた。次節では、この一般化を説明する省略の理論を提案する。

3. 主語・目的語省略のメカニズム

従来、変形生成統語論では省略現象に対して大別して二通りの分析法が提案されてきた。それらは、削除に基づく分析(Chomsky and Lasnik (1993)、

[7] トルコ語の空主語はスペイン語の空主語同様、一致により認可される空代名詞であると仮定するのが妥当だと思われる。Şener and Takahashi (2010)はさらに、トルコ語でも主語・動詞の一致を示さない節ではその空主語は省略的でありえると論じている。

Merchant (2001)、Ross (1969)、Sag (1976)など多数)と転写に基づく分析(Chung, Ladusaw, and McCloskey (1995)、May (1985)、Williams (1977)など多数)である。前説で見た主語・目的語省略に関しては、転写による分析が Oku (1998)や Saito (2007)により提案されている。筆者も Takahashi (forthcoming)などで Saito (2007)の転写分析を採用したが、ここではその対案として削除による分析を提案したい[8]。

削除分析と転写分析を比較検討しその優劣を決することは簡単なことではなく、このような小論で詳細を網羅的に考察することは不可能である。詳しい議論は別の機会に譲り、ここでは削除分析を採用することの理論的論拠を一つ紹介し、自説のメカニズムを提示することに留める。

まず次例を考察する。

(14) a. Harry met someone.
b. I know who.
c. I know who Harry met.

(15) a. I know [$_{CP}$ *C* [$_{TP}$ Harry met who]]
b. I know [$_{CP}$ who *C* [$_{TP}$ Harry met *who*]]
c. I know [$_{CP}$ who *C* [$_{TP}$ ~~Harry met *who*~~]]

(16) a. I know [$_{CP}$ who *C* [$_{TP}$ *e*]]
b. I know [$_{CP}$ who *C* [$_{TP}$ Harry met someone]]
c. I know [$_{CP}$ who$_{x}$ *C* [$_{TP}$ Harry met *x*]]

(14b)は疑問節縮約の例であり、(14a)に後続する文脈で(14b)は省略を受けていない文(14c)と同じ意味を持つ。(15)は削除分析による(14b)の派生である。(15a)の基底となる構造から、疑問詞が移動して(15b)が得られ、(15b)が音韻部門(音声形式、PF)と意味解釈部門(論理形式、LF)への入力となる。(15b)の派生が PF に進むと(15c)に示されているように TP 部分が削除を受け、(14b)の表層形式が得られる。この場合、疑問詞が対格を担っていることや動詞 *met* の内項であることは、(15a)で疑問詞が動詞 *met* に併合され、その後その構造が軽動詞 *v* と併合される時点で得られる。つまり、残余句である疑問詞に関するこれらの情報

[8] 本論考では、削除とは当該構成要素を音声的に具現化しない、あるいは音声的に具現化しないように標示することと了解する。

は派生の進行にともない順次得られることになる。

他方、(16)は転写分析による(14b)の派生である。この分析では、(16a)に示されるように、残余句は表層の位置に基底生成され、省略部分は空範疇として派生に導入される。(16a)はこのまま PF への入力となり、(14b)の表層形式を生む。一方、(16a)では意味解釈が適切に行われず、当該の構造に適切な解釈を与えるために先行文(14a)の TP 部分が(16a)の空の TP 部分に転写され、(16b)が得られる。その後、疑問詞を転写された TP 内の *someone* と関係づける操作(例えば、Chung, Ladusaw, and McCloskey (1995)により提案された merger 操作など)により、(16c)の意味表示が得られる。(16c)は疑問詞が目的語位置の変項を束縛する演算子であることを表している。この分析では、疑問詞が対格を担い動詞 *met* の内項であるという情報は派生が(16c)の段階になって初めて得られることになる。つまり疑問詞が文中でどのような役割を持つかはそれが派生に導入された時点ではわからず、派生が進んだしばらく後に決定されるのである。この「残余句の身分決定の保留」問題は上記(15)で見た削除分析では生じないことに注意されたい。

次に、この疑問節縮約に関する考察が、主語・目的語省略にも同様にあてはまることを見る。次例は省略された目的語名詞節からの抜き出しが可能であることを示す[9]。

(17) a.　ハリーが[スネイプが *e* 呪文をかけるのを]見たのは鼠にだ。
　　 b.　ロンが [*e*] 見たのはカエルにだ。
(18) a.　ハリーが[*e* 電話をかけるのを]忘れたのはジニーにだ。
　　 b.　ロンが [*e*] 忘れたのはハーマイオニーにだ。

(17b)と(18b)はそれぞれ(17a)と(18a)に後続する文脈で「ロンがスネイプが呪文をかけるのを見たのはカエルにだ。」、「ロンが電話をかけるのを忘れたのはハーマイオニーにだ。」を意味する。つまり(17b)と(18b)の[*e*]で示された部分は先行文の目的語名詞節に相当するものが省略されている。

(17)と(18)は分裂文であることに注意されたい。日本語の分裂文に関しては、焦点要素に対応する空演算子もしくは焦点要素そのものが *wh* 移動と同種の A' 移動を受けるという考え方が主流である(Hiraiwa and Ishihara (2012)、Hoji

9 (17)や(18)と類似した例文が Nishigauchi and Fujii (2006)により指摘されている。

(1990)など)。ここでは説明の便宜上 Hoji (1990)の分析を採用し、日本語の分裂文には空演算子の A'移動が関与すると仮定する。

主語・目的語省略を削除を用いて分析する場合、例えば(17)は以下のように扱われる。

(19) a. [$_{CP}$ *OP*$_i$ [$_{TP}$ ハリーが [スネイプが *t* 呪文をかけるのを] 見た]の] は 鼠に$_i$ だ

b. [$_{CP}$ *OP*$_j$ [$_{TP}$ ロンが [スネイプが *t* 呪文をかけるのを] 見た]の]は カエルに$_j$ だ

c. [$_{CP}$ *OP*$_j$ [$_{TP}$ ロンが [~~スネイプが *t* 呪文をかけるのを~~] 見た]の]は カエルに$_j$ だ

(19a)は(17a)の表示で、名詞補部節の目的語位置から前提節の CP 指定部に空演算子 OP が移動し、それが焦点の「鼠に」に束縛されていることを表している。(19b-c)は(17b)の派生であり、まず(19b)で(19a)におけるのと同様に空演算子が移動し、その後(19c)のように目的語節が削除を受ける。

次に当該の省略現象が転写により分析される場合、(17)は以下のように扱われると考えられる。

(20) a. [$_{CP}$ *OP*$_i$ [$_{TP}$ ハリーが [スネイプが *t* 呪文をかけるのを] 見た]の] は 鼠に$_i$ だ

b. [$_{CP}$ *OP*$_j$ [$_{TP}$ ロンが [*e*] 見た]の]は カエルに$_j$ だ

c. [$_{CP}$ *OP*$_j$ [$_{TP}$ ロンが [スネイプが *t* 呪文をかけるのを] 見た]の]は カエルに$_j$ だ

(20a)は(17a)の表示であり、(19a)と同じである。(20b-c)は(17b)の派生を表している。まず(20b)において、動詞「見た」の補部は空になっており、空演算子は CP 指定部に直接生成される。(20b)は PF と LF への入力となり、PF ではその表示に基づき(17b)の表層形式が出力される。一方、LF では適切な解釈を与えるために先行文の対応部分、すなわち補部名詞節が空補部に転写され、LF 表示(20c)が得られる[10]。ここで空演算子は転写された補部節内の目的語と関係付け

[10] LF 転写は反循環的であるという問題も生む。これに対して Saito (2007)は Chomsky (2000)

られ、空演算子を束縛する焦点要素は間接的に動詞「かける」の着地点の意味役割を担う内項の一つであり、与格を標示されているということが認可される。

ここにおいて、上記で述べた「残余句の身分決定の保留」問題が生じることとなる。(17)(もしくは(20))において省略の残余句は焦点要素「カエルに」もしくはそれに束縛される空演算子である。それらは、派生の後の段階でどのような意味役割や格を認可されるのか未決定な状態で文の構築に導入され((20b))、転写が行われて初めて当該の情報が得られるのである。他方、(19)の削除分析ではこの問題は生じない。空演算子は動詞「かける」の内項の一つとして派生に導入され、その動詞句内で与格が標示される。その後 CP 指定部に移動し、最終的に焦点要素「鼠に」と結びつけられ、その意味役割と格が「鼠に」の形式と合致するかどうか照合される[11]。つまり「身分決定の保留」は生じないのである。

この「保留」を理論的に認めるか否かは簡単にけりをつけることができないものかもしれないが、少なくとも他の条件が同一であればそのような問題がない分析法がそれを認めざるをえない分析法よりも勝っているし、また言語に関する計算は局所的に行われるべきだというテーゼを掲げる極小主義理論では特にそのことは顕著である。本論考は、これを主語・目的語省略現象を削除を用いて分析する立場の一つの論拠とみなし、以下では前節で見た反一致条件が削除分析のもとでどのように捉えられるかを考察する[12]。

最近の省略に関する研究において、Aelbrecht (2009)や Baltin (2012)は、削除を受ける要素は文構築の途中段階において削除を認可する構造が得られた時点で削除(もしくは削除適用の標示の付与)を受けるという仮説(派生的省略仮説)を提案している。また、削除された構成素(あるいは、削除適用の標示を受けた構成素)の内部にある要素はその後外部からの操作に対して不可視的になるという仮説を立て、それにより省略構造が示すある種の統語的制約を説明しようと試みている。本論考はこの基本的な考え方を採用し、主語・目的語省略に対して次のメカニズムを提案する。

(21)　a.　　$[_{VP}\ V\ [_{DP}\ \ldots\ ]]$

などによる「一つのサイクル」仮説のもと、当該の転写は循環的に顕在的統語部門で適用されると論じている。この分析のもとで(17)や(18)がどのように説明されるかは簡単な問題ではなく、本論考では触れないこととする。

11　Hiraiwa and Ishihara (2012)の焦点要素移動分析を採れば、この手続きはより単純化される。

12　Saito (2007)は転写分析のもとで反一致条件を導いている。

b.　$[_{vP}$ $[_{DP}$ ...] $[_{v'}$ v ...]]

(21a)と(21b)はそれぞれ、目的語省略と主語省略の構造を示している。(21a)において他動詞 V の補部に名詞句 DP が生起している。ここで注意したいのは、目的語省略は省略を受ける名詞句だけで成立するものではなく、その名詞句を目的語たらしめる他動詞の存在があって得られるものであるということである。同様に、(21b)では名詞句 DP は軽動詞 v の指定部位置に生じており、行為主などの意味役割を付与され主語(正確には外項)と認定される。従来、Zagona (1988)、Lobeck (1995)、Saito and Murasugi (1990)など多くの研究者が、省略には省略される句を認可する主要部の存在が必要であると論じてきた。ここでは、目的語の省略では名詞句を目的語たらしめる他動詞が、そして主語の省略では名詞句を主語たらしめる軽動詞が認可主要部として機能していると仮定する。そして派生的省略仮説によれば、(21a-b)の構造が得られた時点で目的語や主語の削除(あるいは、削除適用の標示)が行われることになる。

(21a-b)の構造に対してさらに派生が進んだ場合を考察する。(22a)は(21a)と軽動詞が併合されてできる構造、(22b)は(21b)が時制辞と併合されてできる構造を示している。

(22)　a.　$[_{vP}$ v $[_{VP}$ V $[_{DP}$ ...]]]
　　b.　$[_{TP}$ T $[_{vP}$ $[_{DP}$ ...] $[_{v'}$ v ...]]]

機能範疇が解釈不可能な ϕ 素性を持っている言語では、(22a)においては軽動詞 v の ϕ 素性が目的語の ϕ 素性と、(22b)においては時制辞の ϕ 素性が主語の ϕ 素性と一致する必要がある。しかし(22a-b)の目的語や主語の DP は(21)の段階で削除の適用(あるいはその標示)を受け、不可視的になっていることに注意されたい。省略される主語や目的語はその外側にある機能範疇と一致をすることができず、つまりそのような省略は機能範疇が解釈不可能な ϕ 素性を持っていない日本語のような言語のみに許されること(反一致条件)が導かれる。

省略を受ける名詞句が外部からの統語操作に不可視的になるのであれば、なぜ(17)や(18)で見たように省略部分からの抜き出しが可能なのかという疑問が生じる。例えば、(22a)において目的語が削除(標示)され不可視的になるのであれば、その内部の要素も当然不可視的になるはずで、外部への移動操作を受け

ることができないということが予測されよう。

ここでは、Chomsky (2008)の、ある一つの位相主要部に関わる複数の統語操作は同時に起こるものとみなされるという仮説を援用し、例えば(21a)の構造が得られ目的語が削除(標示)されるのと同時に、おそらく V が持つ周縁部素性(edge feature (Chomsky (2007))によって駆動される VP 周縁部への移動も生じてもよいと考える。これは以下に示される。

(23)　a.　$[_{VP}$ V $[_{DP}$ ... α ...]]

　　b.　$[_{VP}$ α $[_{VP}$ V $[_{DP}$ ... t_{α} ...]]

(23a)において、名詞句 DP と他動詞 V が併合される。派生の次の段階で(23b)が形成されるのであるが、このステップで V による目的語の削除(標示)と DP 内部の要素 α の VP 周縁部(付加位置もしくは指定部)への移動が同時に起きている。厳密に言うと、この(23a)から(23b)へのステップの途中では目的語はまだ不可視的になっていないので、α の移動が許されることになる。このように省略部分から脱出できた α は、その後例えば CP 指定部に A'移動することが可能である[13]。(17b)や(18b)のように省略された目的語から焦点要素の移動が生じている次例は、まさにこのような VP 周縁部を経由した A'移動が関与していると本論考は考える[14]。

このような脱出操作は、派生が削除を認可する主要部の投射を形成している段階であれば(例えば、(23)のように V の投射を形成している段階であれば)可能であるが、一度 V の投射が別の主要部の投射に組み込まれてしまえば不可能となる。(22a)において、V の投射(つまり VP)は軽動詞と併合され後者の投射に組み込まれているので、その時点で目的語はすでに不可視的であり、軽動詞の ϕ 素性から「見えなく」なっている。

以上本節では主語・目的語省略の削除に基づく分析を提案した。これは、削除は認可する構造が得られた時点で生じるという派生的削除仮説と、主語・目的語省略を認可する主要部はそれらの名詞句に意味役割を与える軽動詞や他動

13　*wh* 移動などの A'移動の途中に VP 付加が使われるという仮説については Chomsky (1986)や Takahashi (1994)を参照されたい。

14　Saito (2007)は省略された動詞補部内からのかき混ぜ移動が許されないという観察をしている。これは、かき混ぜが V の周縁部素性により誘引されず、よって VP 周縁部を経由しないと考えれば説明される。どのような移動が省略された部分から許されるのかについての詳細な検討は別の機会に譲る。

詞であるという仮説を採用している。これにより、省略された主語・目的語が外部の機能範疇と一致することができないという反一致条件と、そのような省略部分から A'移動が可能であるという事実を説明することができる。

4. 終わりに

主語・目的語省略を一致の有無と関係づけ、それによりその通言語的分布を説明しようという考え方と、その二つの関係を捉えることができる省略のメカニズムを紹介した。最後に、例えば日本語話者がどのように自分の言語で主語や目的語の省略が可能であるという「知識」に至るのかについて、つまり主語・目的語省略の獲得可能性について考察してみたい[15]。

まず最初に主語や目的語などの項の省略が言語獲得の初期から利用可能になっていると仮定する。その場合、日本語学習者は次のような道筋をたどって日本語の関連する知識を獲得すると考えられる。

(24) a. 日本語学習者は最初に自分が獲得しようとしている言語が空主語・空目的語を許すことに気付く。
b. 項の省略は初期の段階から利用可能になっている。
c. 日本語学習者は自分が獲得しようとしている言語に一致が存在しない(つまり、関連する機能範疇に解釈不可能なφ素性が存在しない)ことに気付く。
d. そのまま主語・目的語の省略を「使い」続ける。

日本語の獲得の場合、初期の段階から項省略が存在し、それが変わりなく大人の文法まで使われ続けるというのがこのシナリオである。

次にこのシナリオのもとでのスペイン語の空主語の獲得について考察する。以下の道筋が考えられる。

(25) a. スペイン語学習者は最初に自分が獲得しようとしている言語が空

[15] 主語・目的語省略の獲得に関する研究としては Otaki and Yusa (2012)や Sugisaki (2007, 2009)を参照されたい。

主語を許すことに気付く。

b.　項の省略は初期の段階から利用可能になっている。

c.　スペイン語学習者は自分が獲得しようとしている言語に主語と時制辞の間の(「豊かな」)一致が存在することに気付く。

d.　主語の省略を使わなくなる。

ここで注意すべき点は、スペイン語の獲得の初期の段階では主語の省略は利用可能になっているということである。学習者が主語と時制辞の間の一致を獲得するのに従って、そのオプションは「消滅」することになる。

もちろんスペイン語は2節で述べたように空主語自体は許容する言語なので、主語に空代名詞を用いるオプションが存在していないといけない。これに関しては二通りの考え方が可能で、一つは空代名詞は省略同様初期の段階から利用可能なオプションであり、対象言語に「豊かな」一致が存在することが確認されて使われ続ける(逆に、そのような一致が存在しない場合は使用されることがなくなる)というものである。もう一つの考え方は、空代名詞は初期の段階では利用可能ではなく、獲得対象言語に「豊かな」一致が存在することが学習されてはじめて出現するというものである。前者の場合、スペイン語の獲得では(25b)の段階から空代名詞が利用可能で、(25c)の知識の獲得によりお墨付きを与えられ、その後も引き続き使用されることになる。後者の場合は、(25c)における一致の獲得に応じて空代名詞の使用が出現することになる。

空代名詞は当然普遍文法が許すオプションとして存在しているわけであり、条件さえ合致すればいずれの言語でも原則観察されうるものであると考えられる。上記の空代名詞に関する二通りの考え方のもとでは日本語の空主語・目的語の獲得はどのようになるであろうか。空代名詞が初期段階から存在すると仮定すると、日本語の獲得の筋道を示した(24)において、(24b)の段階で空代名詞は省略と並び利用可能であるはずである。その後(24c)における一致の非在の獲得に応じて空代名詞の使用は消滅することになる。他方、空代名詞は「豊かな」一致に呼応して出現するという立場では、日本語の獲得では空代名詞はどの時点でも出現しないことになる[16]。

---

[16] Takahashi (2008)は日本語の空主語や空目的語は省略により派生されるか、空代名詞と分析されるかの二通りの可能性があり、その意味で両義的であると論じている。本論考によれば、(少なくとも日本語の大人の文法では)空代名詞は存在しないことになる。これについては稿を改めて考察することにする。

省略と空代名詞のオプションが共存しているトルコ語の獲得はどのようなものであろうか。以下の道筋が考えられる。

(26) a. トルコ語学習者は最初に自分が獲得しようとしている言語が空主語・空目的語を許すことに気付く。
b. 項の省略は初期の段階から利用可能になっている。
c. トルコ語学習者は自分が獲得しようとしている言語に主語と時制辞の間に「豊かな」一致が存在すること、及び目的語と軽動詞の間には一致が存在しないことに気付く。
d. 空主語には空代名詞を用い、目的語には省略を「使い」続ける。

ここでも、もし空代名詞が初期の段階から利用可能であるならば、そのオプションは(26b)の時点で存在しているはずで、(26c)の知識の獲得を経て、主語については空代名詞が使われ続け、目的語については使用が停止されることになる。

最後に、そもそも空主語や空目的語を許容しない英語のような言語の獲得はどのように考えられるであろうか。以下のシナリオが考えられる。

(27) a. 英語学習者は最初に自分が獲得しようとしている言語が空主語・空目的語を許さないことに気付く。
b. 項の省略(及び空代名詞)は使われない。
c. 英語学習者は自分が獲得しようとしている言語に「貧弱な」一致が存在することに気付く。
d. 項の省略と空代名詞は大人の文法では使われない。

ここでは(27a)にあるように、そもそも獲得対象言語に空主語・空目的語が存在しないので、そもそも省略や空代名詞は発動されないと考えている。しかしながら英語学習者は初期の段階で空主語と、それより頻度は低いものの空目的語を(誤って)使うことが知られている[17]。もしそのような空名詞句の誤用が一致の獲得の前に起こるならば、学習者はそれが省略により生じたものであるとみなすことが予測される。

ここまでは項の省略が言語獲得の初期の段階から利用可能であるという仮定

[17] Hyams (1989)や Wexler (1998)、またそこで紹介されている文献を参照されたい。

の下での獲得のシナリオについて考察してきた。これに対して、項省略は初期段階には存在せず、ある誘因、2 節と 3 節の議論によれば一致の欠如により発動されると仮定してみよう。この場合、日本語の獲得は以下のような筋道をたどると考えられる。なおここでは議論をわかりやすくするために、空代名詞は初期段階から利用可能であり、その後の「豊かな」一致の存在により使用の継続が認可されると仮定する。

(28) a. 日本語学習者は最初に自分が獲得しようとしている言語が空主語・空目的語を許すことに気付く。
b. 項省略は初期の段階では利用可能ではないので、日本語学習者はそれら空名詞句を空代名詞と分析する。
c. 日本語学習者は自分が獲得しようとしている言語に一致が存在しない(つまり、関連する機能範疇に解釈不可能なφ素性が存在しない)ことに気付く。
d. 空代名詞の使用を止め、省略により空主語・目的語を生成し始める。

この獲得のシナリオと(24)の違いは、日本語学習者が極めて初期の段階において空主語や空目的語をどのようなものとして扱うかにある。それらを省略により派生されているとみなす選択肢は、(24)では存在するが、(28)では存在しない。

次に、スペイン語、トルコ語、英語における獲得の想定される筋道を以下に示す。

(29) a. スペイン語学習者は最初に自分が獲得しようとしている言語が空主語を許すことに気付く。
b. 空代名詞は初期の段階から利用可能になっている。
c. スペイン語学習者は自分が獲得しようとしている言語に主語と時制辞の間の「豊かな」一致が存在することに気付く。
d. 主語位置に空代名詞を使用し続ける。

(30) a. トルコ語学習者は最初に自分が獲得しようとしている言語が空主語・空目的語を許すことに気付く。
b. 空代名詞は初期の段階から利用可能になっている。
c. トルコ語学習者は自分が獲得しようとしている言語に主語と時制

辞の間に「豊かな」一致が存在すること、及び目的語と軽動詞の間には一致が存在しないことに気付く。

d. 空主語には空代名詞を使い続ける一方、目的語には省略を使い始める。

(31) a. 英語学習者は最初に自分が獲得しようとしている言語が空主語・空目的語を許さないことに気付く。

b. 空代名詞は使われない。

c. 英語学習者は自分が獲得しようとしている言語に「貧弱な」一致が存在することに気付く。

d. 空代名詞及び項の省略は大人の文法では使われない。

これらのシナリオと(25)、(26)、(27)の違いは、学習者が獲得の初期段階で空主語や空目的語を省略によるものとみなすかどうかである。従って、例えばスペイン語やトルコ語を獲得している子どもが空主語や空目的語を使い始めたときに、それらが緩やかな同一性などの省略の特徴を示すか否かを検証することにより、項の省略が初期のオプションとなっているかどうかを確かめることができる。また英語の学習者が初期の段階で空主語などを誤って産出することがあると上述したが、その段階の空名詞句が省略の特徴を示すか否かを調べることによっても、項省略が獲得のどの段階で出現するかをつきとめることができよう。

これらは原理的には実証的に検証されうる事柄であるが、もう少し理論的に主語・目的語省略の獲得可能性について考察することもできる。本論考では、そのような省略の認可には一致の欠如が関与しているという立場を採っている。この場合、項省略が初期段階では存在せず、一致の欠如という誘因が獲得されてはじめて出現すると考えることは妥当ではないように思われる。つまり、ある事象が存在しないという認識が得られることにより別の事象が発動されると考えることには、その誘因となる事象の非在を認識することがいかにして行われるのかという問題がついてまわる。これは、不可能ではないにしても、実行可能性という観点からは非常に困難な獲得の方法である。むしろ一致などの事象が存在することが別の事象を発動すると考えることの方が獲得の容易さという点で優っている。

すなわち項の省略は普遍文法が許す一つのオプションとして初期段階から利

用可能であり、一致についての獲得がまだなされていない時点で産出される空主語や空目的語は省略により生成されることができ、その後対象言語の一致についての特徴が学習され、一致が存在する場合は省略が使われなくなり、一致の存在が確認されない場合は省略がそのまま使われ続けると仮定するのが妥当である。これはあくまで机上の論理だが、上述のように獲得の極めて初期の段階で産出される空主語や空目的語の特徴を調べることにより、実証的に検証することができる[18]。

参考文献

Aelbrecht, Lobke. 2009. You have the right to remain silent: the syntactic licensing of ellipsis. Doctoral dissertation, Catholic University of Brussels.

有元將剛・村杉恵子. 2005. 『束縛と削除』研究社.

Baltin, Mark. 2012. Deletion versus pro-forms: an overly simple dichotomy? *Natural Language and Linguistic Theory* 30: 381-423.

Chomsky, Noam. 1986. *Barriers*. MIT Press.

Chomsky, Noam. 2000. Minimalist inquiries: the framework. In Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, eds. *Step by step: essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, 89-155. MIT Press.

Chomsky, Noam. 2007. Approaching UG from below. In Uli Sauerland and Hans-Martin Gaertner, eds. *Interfaces + recursion = language? Chomsky's minimalism and the view from syntax-semantics*, 1-30. Mouton de Gruyter.

Chomsky, Noam. 2008. On phases. In Robert Freidin, Carlos P. Otero, and Maria Luisa Zubizaretta, eds. *Foundational issues in linguistic theory,*133-167. MIT Press.

Chomsky, Noam and Howard Lasnik. 1993. The theory of principles and parameters. In Arnim von Stechow, Joachim Jacobs, Wolfgang Sternefeld, and Theo Vennemann, eds. *Syntax: an international*

18 筆者は言語獲得の専門家ではないのでここで述べたことがどの程度実証的に検証されることができるかについては知識を持たない。一致などの屈折の獲得が極めて早い段階で行われるとすると(Wexler (1998))、非常に難しいのかもしれない。

handbook of contemporary research, 506-569. Walter de Gruyter.

Chung, Sandra, William Ladusaw, and James McCloskey. 1995. Sluicing and logical form. *Natural Language Semantics* 3: 239-282.

Fukui, Naoki. 1988. Deriving the differences between English and Japanese: a case study in parametric syntax. *English Linguistics* 5: 249-270.

Hasegawa, Nobuko. 1984/85. On the so-called "empty pronouns" in Japanese. *The Linguistic Review* 4: 289-341.

Hiraiwa, Ken and Shinichiro Ishihara. 2012. Syntactic metamorphosis: clefts, sluicing, and in-situ focus in Japanese. *Syntax* 15: 142-180.

Hoji, Hajime. 1990. Theories of anaphora and aspects of Japanese syntax. Ms. University of Southern California.

Hoji, Hajime. 1998. Null object and sloppy identity in Japanese. *Linguistic Inquiry* 29: 127-152.

Huang, C.-T. James. 1984. On the distribution and reference of empty pronouns. *Linguistic Inquiry* 15: 531-574.

Huang, C.-T. James. (1991) Remarks on the status of the null object. In Robert Freidin ed. *Principles and parameters in comparative grammar*, 56-76. MIT Press.

Hyams, Nina. 1989. The null subject parameter in language acquisition. In Osvaldo Jaeggli and Ken Safir, eds. *The null subject parameter*, 215-238. Kluwer.

Jaeggli, Osvaldo and Ken Safir. 1989. The null subject parameter and parametric theory. In Osvaldo Jaeggli and Ken Safir, eds. *The null subject parameter*, 1-44. Kluwer.

Kim, Soowon. 1999. Sloppy/strict identity, empty objects, and NP ellipsis. *Journal of East Asian Linguistics* 8: 255-284.

Kuroda, S.-Y. 1965. Generative grammatical studies in the Japanese language. Doctoral dissertation, MIT.

Kuroda, S.-Y. 1988. Whether we agree or not: a comparative syntax of English and Japanese. *Linguisticae Investigationes* 12: 1-47.

Lobeck, Anne. 1995. *Ellipsis: functional heads, licensing, and identification*. Oxford University Press.

May, Robert. 1985. *Logical form*. MIT Press.

Merchant, Jason. 2001. *The syntax of silence: sluicing, islands, and the theory of ellipsis*. Oxford University Press.

Nakamura, Masaru. 1987. Japanese as a *pro* language. *The Linguistic Review* 6: 281-296.

Nishigauchi, Taisuke and Tomohiro Fujii. 2006. Short answers: ellipsis, connectivity, and island repair. Ms. Kobe Shoin Graduate School and University of Maryland.

Oku, Satoshi. 1998. A theory of selection and reconstruction in the minimalist perspective. Doctoral dissertation, University of Connecticut.

Otaki, Koichi and Noriaki Yusa. 2012. Quantificational null objects in child Japanese. *MIT Working Papers in Linguistics* 64: *Proceedings of the 5th Formal Approaches to Japanese Linguistics*. 217-230.

Otani, Kazuyo and John Whitman. 1991. V-raising and VP-ellipsis. *Linguistic Inquiry* 22: 345-358.

Rizzi, Luigi. 1982. *Issues in Italian syntax*. Walter de Gruyter.

Ross, John R. 1969. Guess who? *Papers from the 5th regional meeting of the Chicago Linguistic Society*: 252-286.

Sag, Ivan. 1976. Deletion and logical form. Doctoral dissertation, MIT.

Saito, Mamoru. 2007. Notes on East Asian argument ellipsis. *Language Research* 43: 203-227.

Saito, Mamoru and Keiko Murasugi. 1990. N'-deletion in Japanese: a preliminary study. *Japanese/Korean Linguistics* 1: 285-301.

Şener, Serkan and Daiko Takahashi. 2010. Ellipsis of arguments in Japanese and Turkish. *Nanzan Linguistics* 6: 79-99.

Sugisaki, Koji. 2007. NP ellipsis and parameters: an acquisitional perspective. *Proceedings of the 2nd Conference on Generative Approaches to Language Acquisition North America*. 416-425.

Sugisaki, Koji. 2009. The acquisition of argument ellipsis in Japanese: a preliminary study. *Nanzan Linguistics* 5: 61-73.

Takahashi, Daiko. 1994. Minimality of movement. Doctoral dissertation, University of Connecticut.

Takahashi, Daiko. 2008. Noun phrase ellipsis. In Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito, eds. *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, 394-422. Oxford University Press.

Takahashi, Daiko. forthcoming. Argument ellipsis, anti-agreement, and scrambling. In Mamoru Saito, ed. *Japanese Syntax in Comparative Perspective*. Oxford University Press.

Wexler, Ken. 1998. Very early parameter setting and the unique checking constraint: a new explanation of the optional infinitive stage. *Lingua* 106: 23-79.

Williams, Edwin. 1977. Discourse and logical form. *Linguistic Inquiry* 8: 101-139.

Zagona, Karen. 1988. Proper government of antecedentless VP in English and Spanish. *Natural Language and Linguistic Theory* 6: 95-128.

動詞の自他と分裂動詞句分析*

岸本　秀樹

1．はじめに

本論では，二つのタイプの自他交替（本論では使役交替と所有交替と呼ぶ）を取り上げ，日本語の動詞の自他交替について検討する。使役交替おける日本語の自動詞と他動詞のペアは，英語とは異なり，「開ける／開く」「破る／破れる」など，他動詞と自動詞とで異なる形態をもつことが多い。この交替が分裂動詞句分析(Split vP Analysis)により仮定される v-V のフレームの中にある v の性質の違いに帰結させる可能性について考える。具体的には，使役交替は，v が使役者をとるかとらないかによって他動性が決まり，この反映として動詞の形態が変化する（つまり，v レベルの性質の違いが動詞語幹につく形態素として反映される）ことを論じる。また，所有交替では，他動性の交替が起こっても動詞の形態は変化せず，他動詞の主語は「が」格ではなく「に」格で現れるが，この交替自体もやはり v が所有者をとるかどうかによって決まると論じる。所有者交替については，自他交替の他にも，存在・所有動詞の「ある」「いる」が使われた場合に，動詞が「が」格名詞句と有生性の一致(animacy agreement)を起こすという現象も観察される。この動詞の有生・無生の一致も，他動性の交替と同様に，v レベルでの特性に帰結させることができるということも論じる。

2. 使役交替

英語と日本語の自他のペアがある動詞をいくつか見てみると，break「壊す／壊れる」, sink「沈む／沈める」, open「開く／開ける」のように状態ないし位置の変化を表す動詞は，使役者（動作主，行為者）を追加したり削除したりすることによって自動詞と他動詞が交替する。特に，この交替は，使役交替(causative alternation)と呼ばれることがあり，この使役交替の特徴として，他動詞の目的語

* 本論は，国立国語研究所領域指定型プロジェクト「言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約：日本語獲得に基づく実証的研究」（プロジェクトリーダー：村杉恵子）での理論的研究の成果の一部として報告するものである。なお，本論の不備はすべて著者の責任である。

にあたる名詞句が自動詞の主語として現れるということがあげられる。英語では，使役交替を起こす動詞は，他動詞形も自動詞形も形態的には区別されないものが多い（たとえば，open, close, break, roll）が，古い時代の英語の名残として fall/fell, rise/raise, lie/lay のように母音の交替で自他を区別する例が少数ある。

日本語では逆に，自動詞と他動詞で形態的に異なるペア（日本語学では有対動詞と呼ばれる）をなすことが多い。そして，「門が閉じる／門を閉じる」，「店をひらく／店がひらく」のように自他同形のものは少数派であると言える（ただし，漢語動詞では「拡大する」「縮小する」のように自他の両方の用法があるものは自他同形である）。日本語の場合，（非状態動詞の）自他交替については，総じて，形態が異なるものが多いが，いくつかのパターンを示すことも事実である。以下では，動詞の形態という点から，自他交替における動詞派生の方向性について検討する。

自他交替を起こす動詞がどのようなパターンで形態が変化するのかについて，最も包括的にリストした研究は，Jacobsen (1991)であろう。Jacobsen (1991)の研究では，１６のパターンの動詞の形態変化が提示されているが，ここでは自他交替の形態からみる交替の方向性について検討する。自動詞と他動詞がペアになる動詞の派生の方向性には，三つ論理的な可能性が考えられる。それは(1)自動詞が他動詞に変わる「他動詞化(transitivization)あるいは使役化(causativization)」(2)他動詞が自動詞に変わる「自動詞化(intransitivization)あるいは反使役化(anti-causativization)」(3)派生の方向性が決められないもの（他動詞・自動詞が別個に派生する「両極化(equipollent)」あるいは動詞の自他が同形になる「浮動(labile)」）である（奥津 1967, Haspelmath 1993 参照）[1]。

日本語の自他交替は，形態的には語幹を共有し自動詞化あるいは他動詞化する形態素が付加し，自他交替が成立する。日本語では，形態的には，上であげた三つの可能性のどれもが具現化される。これを具体的に見てみると，まず，他動詞化を誘発すると考えられる形態素には，-e, -s, -as, -ase, -se などがある（これらの形態素は，使役の-sase との形態的な関連がしばしば指摘されている（野田 1991, Shibatani 1990 など）。(1)の例は，自動詞にそのような形態素がついているために，形態的な面から見ると，他動詞化により自他交替が成立していると考えられる。

[1]「死ぬ」と「殺す」のような語幹を共有しない自他の対立は，どちらかが補充(suppletion)によって動詞が供給されていると考えられる。このタイプの自他交替は本論では議論しない。

(1)　自動詞　他動詞

a. 開く(ak-u)　開ける(ak-**e**-ru)

b. 建つ(tat-u)　建てる(tat-**e**-ru)

c. 沸く(wak-u)　沸かす(wak-**as**-u)

(2) a. お母さんがお湯を沸かした。

b. お湯が沸いた。

(1)にあげた例は，自動詞から他動詞を派生することになるが，他動詞から二重他動詞を派生するような場合もある。

(3)　他動詞　二重他動詞

a. 知る(si-u)　知らせる(sir-**ase**-ru)

b. 着る(ki-ru)　着せる(ki-**se**-ru)

c. 渡る(wata-ru)　渡す(wata-**s**-u)

(4) a. 子供が服を着る。

b. 母親が子供に服を着せる。

c. 母親が子供に服を着させる。

(3)は，(4a)と(4b)の例が示しているように，二項をとる他動詞から三項をとる二重他動詞への派生が関与している。(4b)の二重他動詞は(4c)の使役動詞とは異なる点に注意してもらいたい。この二つの動詞の違いはいくつかあるが，(4c)の被使役者の「子供」は意図的な行為を行うという解釈ができるのに対して，二重他動詞の(4b)の「子供」はそのような解釈ができない。直接受身文の形成の可能性も異なる。二重他動詞の場合は，「に」格名詞句も「を」格名詞句も受身の主語にすることができる。これに対して，使役動詞は「に」格名詞句しか受身の主語にすることができない。

(5) a. 子供が服を着せられた。

b. 服が子供に着せられた。

(6) a. 子供が服を着させられた。

b. *服が子供に着させられた。

このような例は，二重他動詞が統語的な操作によって作られると考えられる使役と異なる振る舞いを示すということである。いずれにせよ，(1)や(3)の例は，語彙のレベルでの他動詞化が関与し，形態素の付加により，動詞に対して項を一つ増やす効果をもたらす自他交替であるということができる。

他動詞化とは逆方向の派生，すなわち，自動詞化（あるいは逆使役化）は動詞の項を一つ減らす語彙的な操作であると考えられる。このタイプの形態素には，(7)で示されるように，-e, -ar, -re などがある（自動詞化を誘発する形態素に対しては受身との関連性がしばしば指摘されている（野田 1991, Shibatani 1990 などを参照））。

(7) 自動詞 他動詞

a. 破れる(yabur-**e**-ru) 破る(yabur-u)

b. 切れる(kir-**e**-ru) 切る(kir-u)

c. ふさがる(husag-**ar**-u) ふさぐ(husag-u)

(8) a. 穴がふさがった。

b. 彼が穴をふさいだ。

このタイプの使役交替は，動詞の語幹に-e, -ar というような形態素が付加され他動詞が出現するので，他動詞から自動詞を語彙的に派生する自動詞化あるいは反使役化の操作が関わっているといえる。

次に，両極化の操作が関わっている例を見てみることにする。両極化は，(9)にあるように，動詞語幹にそれぞれ何らかの形態素が付加されることにより他動詞と自動詞が派生される。

(9) 自動詞 他動詞

a. 汚れる(yogo-**re**-ru) 汚す(yogo-**s**-u)

b. 増える(hu(y)-**e**-ru) 増やす(huy-**as**-u)

c. 治る(nao-**r**-u) 治す(nao-**s**-u)

d. 上がる(ag-**ar**-u) 上げる(ag-**e**-ru)

(10) a. 風船が上がった。

b. 彼が風船を上げた。

また，浮動とよばれる自他交替も存在し，この場合には自動詞化や他動詞化に関与する形態素は付加されない。これは，自他で形がまったく同じになる交替である。（このタイプの交替を起こす動詞は，主に，他動性を表す形態素をつけることができない漢語由来の動詞（特に「する」が付加する「動詞的名詞（動名詞）」）である）[2]。

(11)　　自動詞　　他動詞

a. 閉じる(tozi-ru)　　閉じる(tozi-ru)

b. 開く(hirak-u)　　開く(hirak-u)

c. 拡大する(kakudai-su-ru)　拡大する(kakudai-su-ru)

(12) a. 幕が閉じる。

b. 彼が幕を閉じた。

もちろん，両極化や浮動による自他交替の場合，動詞語幹に自動詞化および他動詞化の形態素がつく（あるいは全く形態素がつかない）ことにより自動詞と他動詞が形成されるため，派生の方向性は形態的には決定できない。しかし，文の形式から見ると，両極化が関与していても自動詞化が関わっていると考えてよい場合もある。(13)にあるような例で，このタイプの動詞の場合，能動と受身に相当するような形式を作り出すからである。

(13)　　他動詞　　二重他動詞

a. 教わる(osow-**ar**-u)　　教える(osi(w)-**e**-u)

b. 借りる(ka-**ri**-ru)　　貸す(ka-**s**-u)

(14) a. 学生が山田先生{に/から}英語を教わった。

b. 山田先生が学生に英語を教えた。

このタイプの交替を起こす動詞はいわゆる授受関係を表す動詞である。(14)で示されるように，このタイプの動詞はどちらも「が-に-を」の格パターンをとるが，(14a)の「教わる」がとる「に」格名詞句の「に」は「から」と置き換えることができる。また，(14a)は，統語的な性質は異なるものの，(15a)の受身の形式と

[2] 特に，動詞的名詞の自他交替については，これを名詞化する際に使用される「する」の性質に起因すると考えてよいであろう。

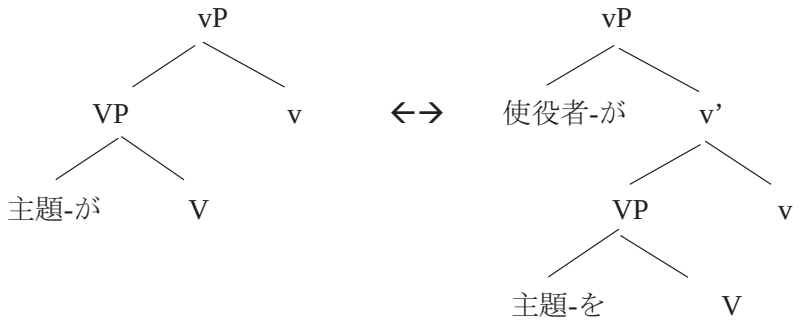
基本的に同じ意味を表すことになる。

(15) a. 学生が山田先生{に/から}英語を教えられた。
　　 b. 英語が山田先生から学生に教えられた。

受身は，能動文に相当する構造から派生されること，および，(14a)の「教わる」の例では，「山田先生」につく「に」を「から」に置き換えられることから，「教わる」の「に」格名詞句は項というよりも付加詞として働いていると考えてよいと思われる[3]。そうすると，「教える」「教わる」のような動詞のペアは，二重他動詞から他動詞が派生されていると考えられるであろう。ただし，このように文の形式から派生関係を決められる例は限られる。

日本語の自他交替動詞は，多くの場合，動詞語幹に他動詞化あるいは自動詞化の形態素がつくので，動詞に v と V の二つの要素を仮定する分裂動詞句分析からその振る舞いと形態の関係を説明することができる。分裂動詞句分析は，Larson (1988)の二重目的語動詞の VP-シェル(VP-shell)の分析がもととなっているが，従来一つの動詞句として従来扱われていたものを少なくとも二つの動詞句の投射が存在するものとする (Chomsky 1995, 2000, 2004, 2008)。

(16)



この分析では，v の投射が動詞の他動性を決めることになるので，項の取り方と形態の関係を局所的に説明ができるようになる。まず，使役交替の本質は，v が使役者（あるいは動作主）をとるかどうかということで，これは v が使役者をとるかどうかということに関係する。v が使役者をとらなければ，自動詞が派生

[3] 「教わる」「教える」のようなペアは授受関係を表す動詞であり，このタイプの動詞については様々な研究がある（例えば，奥津(1979)，松本(2000a, 2000b)などを参照）。

し，v が使役者をとれば他動詞が派生することになるので，動詞の他動性の決定は，v の性質によって決まるとすることができる。そして，日本語の場合，動詞の他動性は，形態に違いが出る場合には，動詞語幹の右側に付加する形態素によってマークされる。これは，まさに v が形態的に具現化する位置で，この事実は，まさに分裂動詞句分析が予測するところである（長谷川 1999 参照）。

ちなみに，日本語においては，自動詞および他動詞の最も上位にある項は，節の主語位置に移動することになる。

(17) a. [$_{TP}$ 主題-が [$_{vP}$ ~~主題-が~~ [$_{VP}$ ~~主題-が~~ V]v]T]
b. [$_{TP}$ 使役者-が [$_{vP}$ ~~使役者-が~~ [$_{VP}$ 主題-を V]v]T]

自他交替を起こす動詞で，自動詞は主題項をとる。これは，V によって選択される項である。主題項は「が」格でマークされる。主題項は，もともと目的語位置に生成されるが，それが TP の指定部まで移動することにより，主語として機能することになる。また，他動詞では，使役者項が「が」格でマークされ，主語位置に移動し，文の主語として機能することになる。したがって，使役交替では，他動性の違いにかわかわらず，「が」格でマークされる名詞句が主語として機能するのである。

幼児の動詞の他動性の言語獲得については，Murasugi and Hashimoto (2004)や Murasugi, Hashimoto, and Fujii (2007)などの研究がある。これらの研究では，幼児の動詞の言語獲得に次のような段階があることを観察している：Stage I (v が tiyu/titta/tite である段階)，Stage II (v が null である段階)，Stage III (語彙的な使役や二重他動詞の獲得段階: v の語彙的な具現化に間違いが生じる)，Stage IV(統語的な使役の獲得段階：V の語彙的な具現化に間違いが生じる)。ここで注目したいのは，Stage II で幼児が見せる誤りである。Murasugi and Hashimoto (2004), Murasugi, Hashimoto, and Fujii (2007)によれば，Stage II では，非対格動詞と他動詞が獲得される段階であるが，この時期に見られる間違いとしては，非対格動詞を他動詞（あるいは二重他動詞）として用いるケースが観察される（例えば，「見せる」の意味で「見る」を使用する間違い）。これに対して，逆の動詞使用のケースは見られないとしている。これらの研究では，この幼児の間違いが，v を[+causative]や[-causative]に指定してもそれが null として実現する（つまり形態的に具現化しない）ことによると主張している。つまり，日本語を獲得する

子供は，状態や状態変化を表す VP を最初に獲得し，その後，それを v に埋め込むことになるのであるが，その際，v が形態的に空であると仮定するため，非対格動詞を誤って他動詞あるいは二重他動詞として用いることになるとするのである。本論との関係でこの獲得研究が重要な点は，形態と他動性が v によって指定されることを示している点である。

以上をまとめると，使役者をとりつけたりとりはずしたりする使役交替では，v が重要な働きをしている。使役交替では，v が外項をとるならば動詞は全体として他動詞（あるいは V が項をとらない場合には非能格動詞）になり，v が項をとらないならば非対格動詞になる。そして，日本語の場合 v の性質は動詞語幹に付加される他動詞化あるいは自動詞化の形態素の形に反映されるという性質があり，これがまさに分裂動詞句分析によって説明されるべき現象であることを示している。

3. 所有交替

前節では，日本語の使役交替について概観したが，本節では日本語の研究において比較的議論が少ないタイプの自他交替（本論では所有交替とよぶ）について考える（岸本 2005, 益岡 2000）。先に議論した自他交替は，いわゆる「使役者」（あるいは「動作主」「行為者」）のつけはずしが関与する交替であるが，ここで議論する所有交替は「所有者」のつけはずしに関する自他交替（他動性交替）である。所有交替は使役交替とは異なるメカニズムで交替が起こるため，統語的な振る舞いが異なることになる。所有交替の典型例を(18)にあげる。

(18) a. 子供が生まれた。
　　 b. 彼らに子供が生まれた。

(18a)の「生まれる」は一項をとる自動詞であるが，(18b)の「生まれる」は「に」格名詞句を主語とする他動詞として使用されている。このことは，日本語の主語テストを用いると簡単に判別できる。ここでは，主語指向性のある主語尊敬語化を用いる。

(19) a. 山田先生が戦後まもなくの頃にお生まれになった。
　　b. 山田先生にお孫さんがお生まれになった。

(19a)の例からわかるように，(18a)のような自動詞の用法では，「生まれる」のとる「が」格名詞句が主語として機能する。しかし，(18b)の他動使用法の「生まれる」では，「に」格名詞句が主語として機能していることは，(19b)の例より確認できる。使役交替における他動詞では，「が」格名詞句が主語として機能するが，(18b)の「生まれる」のような所有交替で派生された他動詞では「に」格名詞句が主語として機能するという特徴が見られるのである。

所有交替による自他交替の場合は，自動詞と他動詞との間で，いわゆる所有者(possessor)の付け外しにより交替が起こる。そして，所有交替では，非状態動詞でもこの格パターンが用いられるという特徴がある。動詞の形態について見ると，所有交替では，動詞の形そのものには変化が起こらない。

(20)

	自動詞	他動詞
a.	生まれる(umare-ru)	生まれる(umare-ru)
b.	誕生する(tanzyoo-su-ru)	誕生する(tanzyoo-su-ru)
c.	見つかる(mitukar-u)	見つかる(mitukar-u)

さらに，「見つかる」や「生まれる」では「見つける」や「生む」のような使役交替により派生される他動詞形も存在する。

(21) a. 山田さんが仕事を見つかった。
　　b. 山田さんに仕事が見つからなかった。

(21a)と(21b)がともに他動詞であるあることは，先に見た主語尊敬語化の可能性を見ると明らかであろう。

(22) a. 鈴木先生が仕事をお見つけになった。
　　b. 鈴木先生に仕事がお見つかりになっていない。

(22a)の「見つける」は「が・を」の格パターンをとる他動詞であるので，「が」

格名詞句が主語尊敬語化のターゲットとなる。また，(22b)の「見つかる」は，「に・が」の格パターンをもつが，所有交替により他動詞となっているので，「に」格名詞句が主語尊敬語化のターゲットとなっている[4]。なお，通常，非状態動詞は，(23b)で示されているように，「に」格名詞句をとっても，この名詞句は主語尊敬語化の対象とならない。

(23) a. 山田先生が学生にお会いになった。
　　b. *学生が山田先生にお会いになった。

(23)の動詞「会う」は「に」格名詞句を目的補語にとって，「が」格名詞句が主語として機能する。そのため，主語尊敬語化のターゲットとなるのは，「が」格名詞句に限られることになる。これに対して，(22b)の「見つかる」は「に」格名詞句を主語とする他動詞として機能していることがわかる。

これまで見てきた事実から，使役交替と所有交替の項の形態に現れる大きな違いは，格標示のパターンの違いであることがわかる。

(24) 使役交替：自動詞　　他動詞
　　主語-が　動詞　　主語-が　目的語-を　動詞
　　所有交替：自動詞　　他動詞
　　主語-が　動詞　　主語-に　目的語-が　動詞

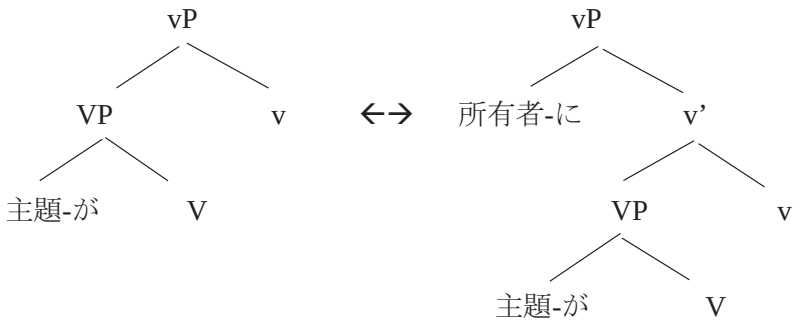
使役交替で作られる他動詞は，「が・を」の格パターンをもつのに対して，所有交替で作られる他動詞は「に・が」の格パターンをもつ。通常，この「に・が」の格パターンを見ただけでは，他動詞化が起こっているかどうかについては判断できない。しかしながら，日本語の主語テストを用いると，「生まれる」「見つける」のような例においては，所有交替による自他交替が起こるということを確認することができる。

所有交替の項のつけはずしに関しては，使役交替と同じ外項に関わるものであると考えられる。したがって，交替には v に所有者が現れるかどうかによっ

[4] 使役交替と所有交替の両方が可能な場合には，(21)のようなパターンが出現する。(i)は，その類例である。
(i) a. 彼がお金を儲けたはずがない。
　　b. 彼にお金が儲かったはずがない。

て他動性が変化するものと考えられる。つまり，(25a)のように所有者が vP の中に現れなければ，その動詞は自動詞になる。逆に，(25b)のように所有者が現れる場合には，その動詞は他動詞になるのである。

(25)



所有交替と使役交替の基本的な違いは，v のとる項の意味役割が異なることおよび主題項の格（「が」格）が変化しないことである。所有交替では動詞の形態的な変化は起こらないものの，所有者は外項として機能する。したがって，所有交替における所有者のつけはずしは，v の性質によって決まると考えてよい。所有交替の場合にも，節の主語位置に移動する項は，構造上もっとも上位にある項となる。

(26) a. [$_{TP}$ 主題-が　[$_{vP}$ ~~主題-が~~　[$_{VP}$ ~~主題-が~~　V]v]T]
　　b. [$_{TP}$ 所有者-に [$_{vP}$ ~~所有者-に~~ [$_{VP}$ 主題-が　V]v]T]

(26)で示されているように，所有交替を起こす動詞では，自動詞用法の場合は主題項が主語となり，他動詞用法の場合には，「に」格名詞句が主語となるのである。使役交替の場合とは異なり，主語位置に入る項の格標示は自動詞と他動詞で異なるため，主語のマーキングが動詞の自他により異なることになる。

所有交替は，非状態動詞だけでなく状態動詞でも起こりうる。この代表的な例が「ある」「いる」を用いた，存在文・所有文の交替である。

(27) a. 公園にブランコがある。
　　b. 公園に子供がいる。

(28) a. ジョンに子供が{ある/いる}。
　　b. ジョンにお金がある。

Kishimoto (2000)や岸本(2005)が議論しているように，(27)は自動詞タイプの存在文であるが，(28)の所有文は存在文をもとに所有者を付け加えることによって派生した所有文であると考えられる。したがって，主語尊敬語化に関しては，(27)では，「が」格名詞句がそのターゲットとなり，(28)では「に」格名詞句がそのターゲットとなる[5]。

(29) a. 公園に<u>木村先生が</u>いらっしゃる。
　　b. <u>木村先生に</u>お孫さんが{いらっしゃる/おありになる}。

存在文では「が」格名詞句が主語尊敬語化のターゲットとなるが，所有文では、動詞が「ある」であっても「いる」であっても、「に」格名詞句をターゲットとした主語尊敬語化ができる。そうすると, (27)と(28)も(25)と(26)で示したような派生関係を持っていることがわかる。

存在文と所有文では，「ある」「いる」の選択に関して非対称性がある。存在文では、(14)が示すように「ある」「いる」の有生・無生の区別が「が」格名詞句の有生・無生と一致することが要求される。しかしながら，所有文では，「ある」では「が」格名詞句との一致が義務的であるのに対し，「いる」の場合が」格名詞句との一致は義務的でなくなる。Kishimoto (2012)によると，これは主題を表す「が」格名詞句がvPへ移動するかどうかによって決まる。存在文では，主題名詞句が主語位置に移動する。この場合，主題名詞句は，(30)のようにvPを通過する移動が常に起こる。

(30) a. [$_{TP}$ 主題-が [$_{vP}$ ~~主題-が~~ [$_{VP}$ ~~主題-が~~ いる]]]
　　b. [$_{TP}$ 主題-が [$_{vP}$ ~~主題-が~~ [$_{VP}$ ~~主題-が~~ ある]]]

Kishimoto (2000)によると，vP 内に主題名詞句が現れると，動詞「ある」「いる」

[5] 動詞が「いる」の所有文では「が」格名詞句が主語尊敬語化のターゲットとなることがある。この問題についての議論については，Kishimoto (2000, 2012)，岸本(2005)を参照していただきたい。

はこの主題名詞句との一致が要求される[6]。したがって，存在文では動詞と「が」格名詞句の一致が常に起こる。これに対して，所有文では，「が」格名詞句は目的語として機能し，動詞が「いる」の場合のみ一致が義務的になる。

(31) a. [$_{TP}$　所有者-に　[$_{vP}$ 主題-が　~~所有者-に~~　[$_{VP}$　~~主題-が~~　　いる]]]
　　b. [$_{TP}$　所有者-に　[$_{vP}$　　~~所有者-に~~　[$_{VP}$　主題-が　　ある]]]

所有文では，動詞が「いる」の場合のみ，「が」格の主題名詞句との一致が要求されるが，これは，(31a)のように，主題名詞句が vP へ目的語転移によって移動するからである。所有動詞が「ある」の場合，(31b)のように，主題名詞句の目的語転移は起こらないので，動詞は有生の主題名詞句をとってもよいし無生の主題名詞句をとってもよいということになる。そうすると，存在文・所有文における「ある」「いる」と主題名詞句の一致現象は，vP レベルでの一致ということになる[7]。

これまでの議論は，「ある」「いる」の動詞の一致現象も v の性質によってその振る舞いが決まる vP レベルでの現象であることを示唆している。「ある」「いる」は，幼児も頻繁に用いる基本的な動詞である。幼児の言語では，「ピーマンあそこにいる」のような大人の文法では誤用になる発話も観察される。本論での見方が正しければ，これは，v の性質が子供の言語でまだ正しく決まっていないためということになり，子供がこれを正しく指定できるようになった時に「ある」「いる」の正しい使用ができると考えられる。この一致現象は，vP レベルで決まるので, 同じく vP レベルで決まる自他交替と同じぐらいの時期に獲得できる文法であると予測されるが，その予測が正しいかどうかについては今後の研究にゆだねることにしたい。

4. まとめ

本論では，使役交替と所有交替を取り上げ，日本語の動詞の自他交替が v の特性によって交替の可能性が決まることを論じた。使役交替おける日本語の自動

[6] 存在文で「に」格名詞句の位置は表示していない。Kuno (1973)が議論するように，存在文の基本語順が「に・が」の配列になるのであれば，「に」格名詞句は TP に付加されていると考えてよいと思われる。
[7] この点に関する詳しい議論は，Kishimoto (2000, 2012)を参照していただきたい。

詞と他動詞のペアは，異なる形態をもつことが多いが，これは v の性質の形態的な反映である。さらに，この使役交替が分裂動詞句分析において，v-V フレームの中で，使役交替は，v が使役者をとるかとらないかによって他動性が変化するため，動詞の自他を v の性質の違いに帰結させることができることを論じた。所有交替では，他動性の交替が起こっても動詞の形態は変化せず，他動詞の主語は「が」格ではなく「に」格で現れるが，この交替自体は v が所有者をとるかどうかによって決まる。所有者交替については「ある」「いる」動詞の「が」格名詞句との有生・無生に関する一致現象についても観察し，この一致も，他動性の交替と同様に，v レベルでの他動性の違いであることを論じた。

参考文献

Chomsky, Noam (1995). *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam (2000). “Minimalist inquiries: The framework.” In *Step by step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Roger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89-155. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam (2001). “Derivation by phase.” In *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam (2004). “Beyond explanatory adequacy.” In *Structures and beyond: The cartography of syntactic structures: Volume 3*, ed. Adriana Belletti 104-131. New York: Oxford University Press.

Chomsky, Noam (2008). “On phrases.” In *Foundational Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*, ed. by Robert Freidin, Carlos P. Otero, and Maria Luisa Zubizarreta, 133-166. Cambridge, MA: MIT Press.

長谷川信子 (1999). 『生成日本語学入門』大修館書店.

Haspelmath, Martin (1993). “More on the typology of inchoative/causative verb alternations.” In Bernard Comrie and Maria Polinsky（eds.）*Causative and Transitivity*, pp. 88-120. Amsterdam: John Benjamins.

Jacobsen, Wesely (1991). *The Transitive Structure of Events in Japanese*. Tokyo: Kurosio.

Kishimoto, Hideki (2000). “Locational verbs, agreement, and object shift in Japanese.” *The Linguistic Review* 17, 53-109.

岸本秀樹 (2005). 『統語構造と文法関係』くろしお出版.

Kishimoto, Hideki (2012). “Subject honorification and the position of subjects in Japanese.” *Journal of East Asian Linguistics* 21, 1-41.

Kishimoto, Hideki, Taro Kageyama, and Kan Sasaki (2013). “Valency classes in Japanese.” ms.

Kuno, Susumu (1973). *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, MA: MIT Press.

Larson, Richard. (1988). On the double object construction. *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.

益岡隆志 (2000). 『日本語文法の諸相』くろしお出版.

松本曜 (2000a). 「『教わる／教える』などの他動詞／二重他動詞ペアの意味的性質」　山田 進・菊地康人・籾山洋介（編）『日本語　意味と文法の風景：国広哲弥教授古希記念論文集』pp. 79-95. ひつじ書房.

松本曜 (2000b). 「日本語における他動詞／二重他動詞ペアと日英語の使役交替」丸田忠雄・須賀一好（編）『日英語の自他の交替』pp. 167-207. ひつじ書房

Murasugi, Keiko, and Tomoko Hashimoto (2004). “Three pieces of acquisition evidence for the v-VP frame.” *Nanzan Linguistics* 1, 1-19.

Murasugi, Keiko, Tomoko Hashimoto, and Chisato Fujii (2007). “VP-shell analysis for the acquisition of Japanese intransitive verbs, transitive verbs, and causatives.” *Linguistics* 45, 615-651.

野田尚史(1991). 「文法的なヴォイスと語彙的なヴォイスの関係」仁田義雄(編)『日本語のヴォイスと他動性』211-232.くろしお出版.

奥津敬一郎 (1967).　「自動詞化・他動詞化および両極化転形—自・他動詞の対応—」『国語学』70, 46-66.

奥津敬一郎 (1979).「日本語の授受動詞構文—英語・朝鮮語と比較して—」『人文学報』132, pp.1-27.

Shibatani, Masayoshi (1990). *The Languages of Japan*. Cambridge: Cambridge University Press.

付加詞と文の階層構造*

岸本　秀樹

1．はじめに

子供が文法を獲得するということは，子供が語と語を組み合わせて文を作りあげる規則を身につけるということである。子供の言語獲得には一定の段階があり，その段階に応じて異なる文法をもつ。一般に，子供は，ことばを発する際に大人とは異なるさまざまな限界があり，そのため大人の文法とは異なる文法を身につけ，そこから発達に応じて徐々に大人の文法へと移行していくことになる。子供が言語を獲得するさまざまなステージにおいて，大人の文法とは異なる発話が観察される。言語獲得の理論において，しばしば子供が一見不完全に見える文を発話する際に，その構造がどのようにして組み立てられるかということが問題になる。子供が実際に持っている文法がどのようなものであるかについては，いくつかの異なる考え方・見方がある。

本論では，付加詞（副詞）の生起に認可について考え，これが文構造を探る手がかりを与えることを論じる。本論では，まず，大人の文法の文の階層構造と付加詞の生起の間に観察される相関関係について考察し，付加詞（副詞）が節に現れるには，修飾関係をもつ投射が節において存在することが必要であることを示す。この修飾関係が成立しない場合には，付加詞の生起が許されないため，節のサイズを計測する一種の指標となることを論じる。そして，子供の言語においても，副詞の生起の可能性が，子供がどの程度の節構造を作りあげているかを調べる手がかりになることを論じる。

* 本論の題材の一部には，「国立国語研究所　理論・構造研究系プロジェクト　研究成果合同発表会（2012 年 2 月）」において「日本語の節の投射：等位節と主節不定詞」および「言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約：日本語獲得に基づく実証的研究」第 3 回研究会（2012 年 3 月）において「日本語の節構造，語彙認可，および，主節不定詞現象」として発表したものが含まれる。発表の際には，村杉恵子，斉藤衛，杉崎鉱司，高橋大厚，および聴衆の方々から貴重なコメント・示唆をいただいた。また，子供の言語データは，村杉恵子氏より提供いただいた Sumihare (CHILDES)に基づく。ここに謝意を記したい。なお，本論での不備はすべて著者の責任である。

2. 節の階層構造と付加詞

日本語の節構造（階層構造）に関する考察，つまり，文においてある種の階層構造が存在するということは，阪倉(1966)，山田(1936)，松下(1928)，益岡(1991)，野田(1995) 等，これまで何度となく論じられてきた。それぞれの研究において細かな違いがあるものの，日本語の文に階層構造があることは，これらの研究者の間で一致する見解となっている。例えば，野田(1995)は，文には(1)のような階層が存在することを示唆している。

(1) かけ—られ—てい—なかっ—た—みたいだ—ね
　　語幹-ボイス-アスペクト-否定-テンス-ムード(事態)-ムード(聞き手)

日本語の階層構造については，さまざまな議論がこれまでにもなされてきているが，その中でも，南(1974, 1993)は，節の階層構造に関して示唆的な研究を行っている(田窪(1987)および吉本(1993)も参照)。南(1974, 1993)は，節に対して描叙段階(A 類)，判断段階(B 類)，提出段階(C 類)，表出段階(D 類)の区別を設け，そこに現れうる要素に関して考察をしている[1]。特に, 南の議論で興味深いのは，埋め込みの構造において，節がどのようなものに埋め込まれるかによって，節の大きさが異なることを示していることである。以下では，この南の階層を手がかりに，文要素がどのようにして生起が認可されるかについて考察する。

南(1974, 1993)では従属節のタイプによって現れうる要素が異なることが観察されている。まず，それぞれの階層の従属節を表すマーカーを示し，A 類（「～ながら」，「～つつ」，など），B 類（「～のに」，「～ので」，「～ず」，など），C 類（「～が（逆接）」，「～から」，「～けれど」，など）の違いにより，節内に起こることができる要素が異なることを示している[2]。南(1974, 1993)では，述語部分の成分とそれ以外の成分の区別がなされている。述語の成分としては，いわゆる

[1]本論では埋め込み節の構造について考えるため，主節レベルの節構造をもつ D 類の節に関しては議論しないことになるが，このレベルの節構造では，いわゆる「よ，ね」などの談話の小辞が現れる。

[2] 同じ形態をもつ接続詞であっても，別のクラスに属する場合もある。例えば，同時の意味を表す「ながら」は A 類の従属節マーカーになるが，逆接の意味をもつ「ながら」は，B 類の従属節マーカーになる。また，接続詞の性質により，同じクラスに属する要素がまったく同じ振る舞いを示さないこともある。この違いが何に由来するのかという問題は将来の研究課題であり，ここではそのことについて議論しない。

助動詞の共起関係についての分布が示されている。ここでは，そのような要素のいくつかをとりあげて，その分布を観察する。例えば，受身の「られ」は，A 類，B 類，C 類の節に共通して生起可能な要素となる。

(2) a. [[ののしられ]ながらも]彼はなんとかやっている。(A 類)
b. [[壊された]のに]かたづけられていない。 (B 類)
c. [[一度は波にのまれた]が]彼は無事だった。 (C 類)

これに対して，「ない」などの否定要素は，A 類には生起できないが，B 類，C 類の節には生起可能である。

(3) a. *[[食べない]ながら]彼はなんとかやっている。 (A 類)
b. [[気がすすまない]のに]やっている。 (B 類)
c. [[気がすすまない]が]それでも私は行きます。 (C 類)

次に，「だろう」のような助動詞は，A 類，B 類の節には現れることができないが，C 類の節には生起可能である。

(4) a. *[[食べるだろう]ながら]彼はなんとかやっている。(A 類)
b. *[[奨学金がもらえるだろう]のに]うれしくない。 (B 類)
c. [[これからなにかあるだろう]が]気が進まない。 (C 類)

つまり，述語成分に含まれる助動詞類には節の種類において生起可能なものとそうでないものがあるのである。

述語成分に含まれないものについても，同様の分布が見られることになる。南(1974, 1993)においては，述語の成分とならない要素に対して，それ以上の区別を設けていない。しかしながら，その要素の中には，修飾語と文の必須要素（つまり，項）が含まれており，（以下でも少しだけ触れるが）それらは統語的な性質が大きく異なるので，区別しておいた方がよい。まず，文の必須要素（項）についてその分布を観察する。文の必須要素は，基本的に，「が」格，「を」格，「に」格などの格標示を受ける要素（名詞句）で，これらの名詞句および（これらの名詞句を）「は」でマークした題目について見る。まず，「に」格や「を」

格の要素は，命題の一部を構成する必須要素であり，A 類，B 類，C 類の節に共通して現れることができることは，以下の例から確認することができる。

(5) a. [[ポテトチップスを食べ]ながら]テレビを見ている。 (A 類)
b. [[賞をとれなかった]のに]残念じゃないなんて。 (B 類)
c. [[ご飯を食べた]が]まだおなかはいっぱいじゃない。 (C 類)
(6) a. [[上司に話しかけ]ながら]仕事をしている。 (A 類)
b. [[抽選にはずれた]のに]よろこんでいる。 (B 類)
c. [[彼に会った]が]なにも話していない。 (C 類)

これに対して，(7)で示されているように，「が」格名詞句（主語）は，同様に命題を形成するのに必要な要素であるが，A 類の節の中には現れることができない。しかし，B 類，C 類の節中では生起可能である。

(7) a. *[[彼がテレビを見]ながら]勉強している。 (A 類)
b. [[彼が来なかった]のに]楽しくなかった。 (B 類)
c. [[彼がそのことを話した]が]誰も関心を示さなかった。 (C 類)

次に，題目を表す「は」でマークされる要素は，A 類，B 類の節内に起こることができないが，C 類の節内なら生起可能である[3]。

(8) a. *[[テレビは見]ながら]勉強している。 (A 類)
b. *[[彼は来る]のに]彼女は帰ります。 (B 類)
c. [[そのことは話した]が]誰も聞いていなかった。 (C 類)

述語成分をなす要素と同様に，文の必須要素である項も，やはり，節のタイプによって生起可能な場合とそうでない場合があることがわかる。

ここで，これらの要素の生起に関する制限と，生成文法において考えられている節構造との対応関係を考えてみることにする。南(1974, 1993)の階層と生成文法で考えられている句構造を対応させると，A 類の節は vP の投射，B 類は定

[3] もちろん，「は」については付加詞にも付加することができる。この場合も同様に C 類の節でのみ生起可能になる。

の時制を含む TP の構造，C 類はある種の演算子などを含むことができるモーダル要素が投射する ModP (=ModalP)までの構造を持っていると考えてよいであろう（長谷川 2007 参照）[4]。このように考える根拠はいくつかある。

まず，A 類の節であるが，先にも見たように，A 類は，「が」格名詞句の生起が許されない。「が」格は，時制によって，認可される格と考えられるので，A 類の節には時制要素が存在しないと考えることができる。実際，「ながら」節においては，「が」格主語とともに時制辞の生起は許されない。

(9) a. *[[彼がテレビを見]ながら]勉強している。
　　b. *[[テレビを見た]ながら]勉強している。　　(A 類)

したがって，「ながら」で導かれる A 類の節は，時制の投射 TP を含まない vP の構造を持っていると考えてよい。

ちなみに，「ながら」節に現れる動詞の主語は，節内では表出できないが，意味的には，主節の主語と同一のものを指すという性質がある。そうすると，「ながら」節はコントロール構造を持っていると考えることができる。コントロール構造を持つ節は PRO が生起することになるが，通常，PRO は（時制要素の一種の）不定詞によって null Case が認可されると考えられている(Chomsky and Lasnik 1993)。もし「ながら」節が，vP の構造をとっていると，この PRO が生起できることが問題となるかもしれない。しかし，ここでの主張は，「ながら」に埋め込まれる節が vP の構造をとるということであって，「ながら」節全体が不定詞的な構造をとらないと言っているわけではない。もし「ながら」が英語の to 不定詞の to に相当する要素であると考えることができるのであれば，[PRO[vP …. V-v]ながら]のような構造をつくるため，PRO が認可されると考えることができる。

次に B 類の節については，「が」格主語の生起が可能なこと，および，時制要素の生起が可能なことから TP の構造をもつと考えることができる。

---

[4] ここでは，分裂動詞句分析を採用する（Chomsky1995）。ModP とういう投射のラベルづけについては便宜上のもので，ModP に関して重要な点は，これが TP よりも上位にある投射であるということである。Rizzi (1997, 2004)のカートグラフィーの提案に対応させることも可能であるが，その提案のどれに対応するかについてはさらに検討する必要がある。ついでながら，ここでは議論していない D 類の節については ModP よりも大きい補文標識までを含む CP の構造に対応すると考えられる。

(10) a. [[彼がテレビを見たのに]誰も叱らない。
b. [[テレビで見た]のに]覚えていない。 (B 類)

「が」格主語や時制要素の生起が節内において可能であるという点においては，C 類の節も同様である。

(11) a. [[彼が来た]が]だれも気がつかなかった。
b. [[テレビが壊れた]が]修理しなかった。 (C 類)

したがって，C 類の節も TP の投射を含む階層構造をもつものと考えることができる。ただし，TP よりも上位の投射については，B 類と C 類の節では異なると考えられる。先にも見たように，この 2 つの節では，「だろう」の生起に関して異なる分布が見られるからである。

(12) a. 彼が来る(*だろう)のに，心配している。 (B 類)
b. 先生がそこにいる(だろう)が，私はそれでも心配だ。 (C 類)

「だろう」は判断を表す助動詞で，時制の右側に現れる。日本語のモダリティ研究においては，モダリティ要素が現れる階層が命題を表す階層よりも上位にあることがしばしば議論されている（Narrog 2009 などを参照）。そうすると，本論の見方では，「だろう」を認可する要素（モダリティを認可する要素）が主語と述語を含む投射(TP)よりも構造的に上位の主要部の位置に現れるということになる。(12)の例から，C 類にはモダリティの投射(ModP)があるが，B 類の節ではそのような投射がないことがわかる。

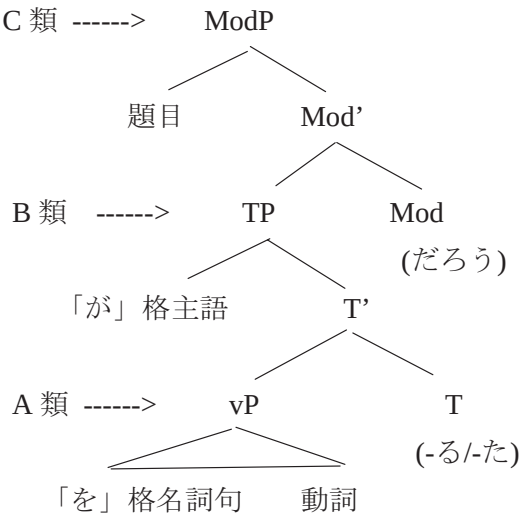
また，「だろう」の生起の可能性と「は」でマークされた題目の生起とは強い相関関係があることも指摘されている(南(1974, 1993), 益岡(1991)など)。実際，先にも見たように，題目は B 類の節では現れることができないが，C 類の節では生起可能である。

(13) a. *[[彼は来る]のに]私は帰らない。 (B 類)
b. [[そのことは話した]が]誰も聞いていなかった。 (C 類)

このような題目と評価を表す助動詞との間に見られる相関関係から，題目は命題とは切り離された要素として TP よりも上位の位置に現れ，ModP によって認可されていると考えることができる。

これらの議論を総合すると，日本語の節の投射には，(14)のように少なくとも埋め込みにおいて，vP レベルの構造，TP レベルの構造，ModP レベルの構造の投射を許す従属接続詞があるということになる。

(14)



ここで重要な点は，節にどのような投射が含まれるかによって，どのような述語要素（主要部要素）やどのようなタイプの文の構成素（項）が現れうるかが異なるということである。したがって，そのような要素の振る舞いを見ることによって，日本語の階層構造が確かめられることになる。

ここで，先には見なかった付加詞の分布について観察することにする。付加詞も，それが表す意味によって現れうる節のタイプが異なり，項と似た分布を示す。これは，付加詞は義務的に現れる要素ではないが，節に現れる際には認可される投射が必要になるからである (Zubizaretta 1987 などを参照)。付加詞については，一語をなすものから節を構成するものまでさまざまな種類のものがあると考えられるが，以下では，単独で現れる副詞の分布について考えることにする。

付加詞（副詞）は，述語要素を修飾するという機能をもつが，それがもつ意味によって修飾する先が異なる。南(1974, 1993)の分類では，付加詞に相当する

ものとして，程度副詞，状態副詞，時を表す修飾語，評価を表す修飾語，「たぶん，まさか」の類の修飾語などがあげられている。付加詞の現れうる節のタイプは，それぞれのタイプの付加詞が表す意味と相関することになる。

まず，「ゆっくり」「遅く」「丁寧に」などの程度や状態を表す副詞は，(16)で示されているように，A 類，B 類，C 類のどのタイプの節においても生起可能である。

(16) a. [[ゆっくりお風呂にはいり]ながら]考え事をする。 (A 類)
b. [[彼は遅く来る]のに]いつも早く帰る。 (B 類)
c. [[そのことは丁寧に話した]が]誰も理解していない。 (C 類)

程度や状態を表す副詞は，基本的に述語の表す事態の様態あるいは程度を示すので，述語を修飾するものと考えられる。したがって，このタイプの副詞は，vP の投射があれば生起可能となるはずで，実際，(16)から，述語と意味的に整合する限りにおいて，A 類，B 類，C 類のどのタイプの節にも現れうる要素であることがわかる。

次に，時間を示す副詞や修飾語であるが，このクラスの表現は，いわゆる時制要素と関係をもつ。そして，時間副詞の認可が TP に関係する要素によってなされるのであれば，A 類の節においては生起不可能であるが，B 類，C 類の節では現れることができると予想される。実際，「昨日」「明日」「一時間」のような副詞要素は，(17)で示すように，A 類には生起できないものの，B 類，C 類の節に現れることができる[5]。

(17) a. *[[お風呂に今はいり]ながら]考え事をしている。 (A 類)
b. [[彼は明日来る]のに]まだ準備ができていない。 (B 類)
c. [[そのことは昨日話した]が]誰も理解していなかった。 (C 類)
(18) a. *[[お風呂に一時間はいり]ながら]考え事をしている。 (A 類)
b. [[いつも一時間走る]のに]彼はぜんぜん体が細くない。 (B 類)
c. [[彼と一時間話した]が]彼は結局わかってくれなかった。 (C 類)

[5] アスペクトを指定するような時間副詞は，AspP のような投射によって認可されるとも考えられる。しかし，これは vP と TP の間に位置する投射と考えられるので，生起できる節のタイプは，TP で認可される時間副詞と同じになる。

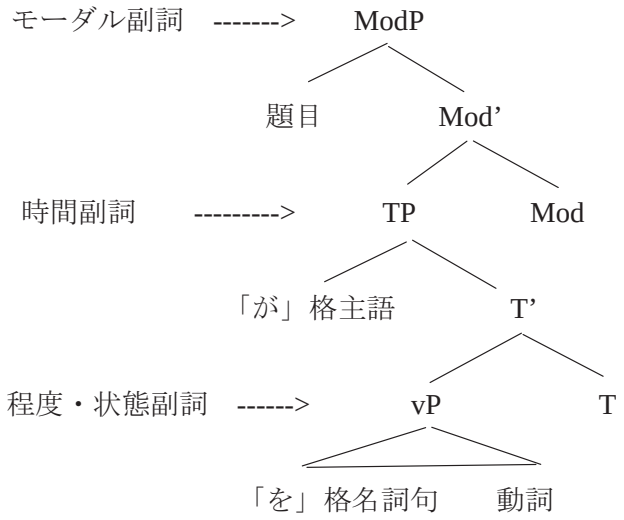
TP によって認可される時間副詞に対して，「おそらく」「たぶん」のように話者の判断を示し，Modal 要素によって認可されるような副詞も存在する。このタイプの副詞は，A 類，B 類の従属節には生起できないが，C 類の節には現れうるという特徴を示す。

(19) a. *[[お風呂にたぶんはいり]ながら]考え事をしている。　(A 類)
b. *[[彼がたぶん来る]のに]私はやりません。　(B 類)
c. [[そのことをたぶん話す]が]今は確定ではない。　(C 類)

もちろん，このタイプの副詞はモーダル的な意味を表すので，ModP によってその生起が認可されると考えてよい。そうすると，付加詞が節内において認可するかどうかは，それが意味的に修飾する投射が存在するかどうかによって変わってくるということになる。

要するに，程度・状態副詞の生起が許される節は，vP までの投射が存在し，時間副詞が生起する節は TP の投射が必要となる。モーダル副詞が生起する節では，TP の上位に投射する ModP の投射が存在することになる。

(20)



(20)で示されているように，文中に随意的に現れる付加詞の分布も，項と同じように，節内に認可される投射が存在するかどうかによって変わってくる。したがって，項や助動詞の場合と同じように，その意味的な性質により認可される

投射が異なるため，付加詞も文の階層構造をはかる尺度となりうるのである。

本節では，南(1974, 1993)の議論を手がかりに，日本語の階層構造について考察した。本節では，述語成分をなす助動詞あるいは文の必須要素である項やそれが話題化された要素とともに，付加詞もその意味的な性質により生起が認可される統語構造の投射が異なるということを示した。

3. 言語獲得と付加詞の認可

子供が言語を獲得する過程においては，大人の文法とは異なる文法がしばしば出現する。このような子供独自の文法体系は，いずれ大人の文法が獲得されるとなくなってしまうが，そのような文法は，普遍文法で許された範囲の中での変異の一種であると考えられ，普遍文法の性質を知る上で，重要な示唆を与えてくれるものである。

大人の文法を獲得する以前に，子供が一時的に作りあげる文法から出てくる言語現象はいくつかある。そのうち，ここで取り上げるのは，いわゆる「主節不定詞(root infinitive)」である。これは，定形動詞が現れなければならない主節の環境において，大人の文法では許されない不定詞形の動詞が使われる現象である（ただし，主節不定詞の環境で子供が実際に使う動詞には，不定形動詞，裸動詞，代用形動詞などがあり，言語間で違いがあるとされる）。この現象が観察されるのは，一般に２～３歳までで，この文法現象には，次のような特徴が観察されるとされている。

(22) a. finite verb の同時使用
b. 時制が完全に指定されていない
c. 空主語
d. Modal reference effect
e. イベント動詞の使用

つまり，主節不定詞は，要求や願望などを表すコンテクストに現れることが多く(Modal reference effect)，適切な時制を用いられず動詞が使用されるか，時制を欠くことが多い。同時期に，子供の産出する文は，空主語となることが多く，イベント動詞が使用されるなどの特徴が見られるのである。これらの特徴は，

この時期の子供がまだ大人の文法を構築することができず，独自の文法体系を用いていることの反映であると考えられる。

日本語に目を向けると，子供が主節不定詞の時期があるかどうか，あるいは，そもそも不定詞動詞が存在するかどうかについては，動詞の形態を見ただけでは判断することができない。しかし，Murasugi and Fujii (2009) 中谷・村杉(2009), Murasugi, Nakatani, and Fujii (2010)では，日本語を獲得する過程にある子供にも主節不定詞の時期があることが議論されている。これらの研究では，主節不定詞の子供が 1 歳代から 2 歳までの間で，いわゆる「た」形動詞が主節不定詞の動詞に相当するものであると主張されている（日本語の主節不定詞では「た」形動詞が代用形動詞として用いられていることになる）。その根拠として，これらの研究では，「た」形動詞を用いた子供の発話に(22)に上であげたような主節不定詞の特徴が観察されることがあげられている。

(23) a. ぶー，来た (1; 5)
b. あっちいった（＝あっち行って）(1; 6)
c. ちーした（＝おしっこしたい）(1; 6)
Murasugi, Nakatani, and Fujii (2010)

(23)であげられている子供の発話の例では，特に，(23b)や(23c)でわかるように，通常「た」形動詞では使用できない要求を表す意味で子供が「た」形動詞を用いている。これは，主節不定詞を使用する子供の発話に観察されるいわゆる modal reference effect の一種であると考えられ，日本語を獲得する幼児においても間接的ではあるが，主節不定詞を用いる時期があることが伺える。

主節不定詞を用いる時期の発話で，幼児は完全な文を構築していないと考えられるが，どのような構造の文が構築されているかについては，いくつかの理論的な提案がある。その一つが，Radford (1990)が提案するもので，この時期の子供の発話には，機能投射(functional projection)はそもそも存在しないというものである。また，Rizzi (1993/1994)においては，子供は獲得の段階では，文の構造は途中まで投射しているとする Truncation Hypothesis が提案されている。また，Phillips (1996) は，文の構造は，子供が獲得の段階においても，構造的にはすべて存在するが，構造とは独立の別個の理由により，文法的な形式が表出できないとしている。このように，理論的な提案はいくつかあるが，主節不定詞の時期で

は，動詞が適正な形に屈折していないため，その形を認可する時制が構造上存在するかどうかということが問題となるであろう。

主節不定詞の時期は，まだそれほど自由ではないものの，語を組み合わせて文をつくることができる時期であるので，どのような要素が動詞と組み合わされるかによって，どのような投射が存在するかを調べることができる。幼児の発話で，動詞と主語の組み合わせがあった場合，どの投射でこの主語が認可されるかについては，二つの可能性がある。まず，動詞句内主語仮説では，動詞句内において意味役割をうけ，主語が意味的に認可される。さらに，この主語の格が主格である場合には，時制辞によって格が認可されることになる。主語の格の認可が時制によって行われ，子供の発話に，格をもつ主語が存在するなら，時制の投射があると考えられるかもしれない。ただし，意味的には，主語は動詞句内で認可されるので，格のシステムが確立していなくても主語を動詞と組み合わせて使用できる可能性も残される。

より直接的な証拠は，付加詞の使用の可否によって得ることができる。先にも見たように，付加詞はそれを認可する投射がなれば，生起することができないと考えられるからである。そして，時間副詞は時制の投射が存在することによって生起可能になると考えられるので，どのような時期に時間副詞が動詞と組み合わされているかを調べることにより，時制の投射がどの時期に開始されるかについての証拠が得られることになる。日本語を獲得する過程にある幼児の発話においては，以下のような現象が観察された。

(24) てるてるぼうず，明日天気ちょうだいね　(1:10)

(25) a. もうないよ（1:10）

b. もうちゅんだ　(1:10)

c. とうちゃん，もうないよ　(1:10)　　村杉 (2011)

(24)のデータが示していることは，時間副詞が動詞と組み合わされる時期が１歳１０ヶ月においてであること（それ以前にはこの組み合わせは生じていない）。なお，それ以前でも単独で時間表現が現れることがあるが，これは，時間副詞と動詞を組み合わせて文を構築する以前から子供が「明日」のような時間副詞を語彙として持っていることを示唆している。さらに，(25)から，時間と関連するその他の表現も同時期から動詞と組み合わせができるようになっていること

がわかる。

これらのデータが示している重要な点は，時間副詞と動詞を組み合わせて文を構築することができるようになる時期は，主節不定詞の使用が終わる時期に相当するということである。そうすると，(24)と(25)のデータは，主節不定詞が頻繁に現れる時期には時制の投射（すなわち TP）がなく，それを脱する時期になって初めて，時制の投射が存在するようになるということを示唆していることになる。

4. まとめ

本論では，日本語の階層構造について南(1974, 1993)が議論している埋め込み節の構造をもとに，どのような投射がある場合にどのような要素の生起が認可されるかについて考察を行った。本論で示したことは，必須要素や述語成分をなす助動詞の生起とともに，随意的な要素の付加詞（副詞）についても，その生起を認可する投射が統語構造に存在しなければ，生起そのものが許されないということである。言語を獲得する過程にある子供（幼児）の文法では，主節不定詞の時期があるが，付加詞（時間副詞）と動詞とを組み合わせる文の産出は，この時期には見られず，主節不定詞を脱する時期に来て初めて，時間副詞と動詞を組み合わせた文が出現するようになる。この事実は，主節不定詞が用いられる時期の幼児の文法では時制の投射がないことを示唆している。

参考文献

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam, and Howard Lasnik (1993) “The theory of principles and parameters.” In *Syntax: An International Handbook of Contemporary Research, Vol. 1*, eds. Joachim Jacobs, Arnim Von Stechow, and Wolfgang Sternefeld, 506-569. Berlin: Walter de Gruyter.

長谷川信子 (2007) 「日本語の主文現象から見た統語論：文の語用機能との接点を探る」長谷川信子（編）『日本語の主文現象：統語構造とモダリティ』pp. 1–21. ひつじ書房.

益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版.

益岡隆志 (2007) 『日本語モダリティ探求』くろしお出版.

松下大三郎 (1928) 『改撰標準日本文法』宝文館.

三上章 (1960)『象は鼻が長い』くろしお出版.

南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』大修館書店.

南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店.

村杉恵子 (2011) 「言語獲得と言語理論」言語獲得プロジェクト；ハンドアウト.

Murasugi, Keiko, and Chisato Fujii (2008). “Root infinitives in Japanese and the late acquisition of head-movement.” *BUCLD 33 Supplement.*

Murasugi, Keiko, Tomomi Nakatani, and Chisato Fujii (2010) “The roots of root infinitive analogues: The surrogate verb forms common in Adult and Child Grammars.” *BUCLD 34, Supplement.*

森山卓郎・仁田義雄・工藤浩 (2000) 『モダリティ』岩波書店.

中谷知美・村杉恵子 (2009) 「言語獲得における主節不定詞現象：横断的観察的研究」『アカデミア』文学・語学編 86, 59-94.

Narrog, Heiko (2009). *Modality in Japanese: The Layered Structure of the Clause and Hierarchies of Functional Categories*. Amsterdam: John Benjamins.

野田尚史 (1995) 「文の階層構造からみた主題ととりたて」, 益岡隆志・野田尚史・沼田善子(編)『日本語の主題と取り立て』pp.1-35, くろしお出版.

野田尚史 (1996) 『「は」と「が」』くろしお出版.

Phillips, Collin (1996). “Root infinitives are finite.” *BULCD* 20, 588-599.

Radford, Andrew (1990). *Syntactic Theory and the Acquisition of English Syntax*. Oxford: Blackwell.

Rizzi, Luigi (1993/1994). “Some notes on linguistic theory and language acquisition.” *Language Acquisition* 3, 371-393.

Rizzi, Luigi (1997) “The Fine Structure of the Left Periphery,” *Elements of Grammar: Handbook of Generative Syntax*, ed. by Liliane Haegeman, 281-337, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht.

Rizzi, Luigi (2004) “On the Cartography of Syntactic Structures,” *The Structure of CP and IP: The Cartography of Syntactic Structures Volume 2*, ed. by Luigi Rizzi, 3-15, Oxford University Press, Oxford.

阪倉篤義 (1966)『語形成の研究』角川書店.

田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』第 6 巻 5 月号, 37-48.

寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味 II』くろしお出版.

山田孝雄 (1936)『日本文法学概論』宝文館.

Yuasa, Etsuyo (2005) *Modularity in Language: Constructional and Categorial Mismatch in Syntax and Semantics*, Mouton de Gruyter, Berlin.

吉本啓 (1993). 「日本語の文階層構造と主題・焦点・時制」『言語研究』103: 141-166.

Zubizarreta,Maria-Luisa (1987) *Levels of Representation in the Lexicon and in the Syntax*. Dordrecht: Foris.

言語獲得からみる移動操作：かき混ぜ

村杉　恵子・杉崎　鉱司

１．　はじめに

現代言語理論では，母語獲得は，生後取り込まれる言語経験と，ヒトに遺伝により生得的に与えられた言語獲得機構との相互作用により達成されると仮定されている。この言語獲得機構は，(i)全ての言語が満たすべき普遍的制約と，(ii)可能な言語間変異を定める制約からなると考えられているが，これらの制約の存在に関する母語獲得からの検討は，これまで主に欧米の言語を対象とした研究に限られている。 本共同研究プロジェクトの目的の一つは，詳細な記述に基づいた言語理論研究に立脚して日本語の獲得過程を分析することにより，これらの制約の存在に対する新たな視点からの検討を行うことにある。具体的には，心理実験による実証的研究，および発話分析による記述的研究の両手法を用いて，日本語における文法知識の獲得過程を明らかにし，日本語獲得から言語獲得理論へ，さらに言語理論への貢献を目指している。

本稿では、本プロジェクトで研究が進められている「かき混ぜ」に関する獲得研究をとりあげ、ヒトに生得的に与えられた「普遍文法」の属性は、生後、幼児が獲得中の言語において当該の文構造と語彙を獲得するとともに発現することを実証的に示す。日本語は語順が比較的に自由な言語であると言われている。(1a)と(1b)は共に文法的な文であり、本質的な意味においても大きな違いは見られない。

(1) a.　アヒルが 牛を 追いかけた　　b.　牛を アヒルが 追いかけた

Harada (1977)、Saito (1985)は、目的語が主語に先行する(1b)の様な文は、基底に(1a)があり 、「かき混ぜ」という名詞句の移動操作によって派生されると論じた。本論文では、幼児がこの「かき混ぜ」の移動操作を、いつ、どのように獲得するかについて検証する。

Hayashibe (1975)はかき混ぜ文がかなり遅い時期まで正しく解釈されないことを観察し、Bever (1970)の canonical sentence strategy に従って、幼児は最初の名詞句を「動作主」、2番目の名詞句を「動作の対象」として、自動的に解釈すると考えた。de Villiers and de Villiers (1973)では、英語話者の受け身文の獲得においても同様の傾向が見られると報告している。しかし、Otsu (1994)では的確な文脈が与えられれば、3 歳児でもかき混ぜ文を正しく解釈できると主張し、さらに Murasugi (2000)では、実験の場で特別な文脈を与えなく

とも、実験文として受け身文とかき混ぜ文の両方を提示することで「格」に注意を喚起できれば、2歳児でも的確にかき混ぜ文を解釈できることを実証的に示している。

Murasugi and Kawamura (2005)では、まず日本語を母語とする幼児がかなり早い時期からかき混ぜ文を正しく解釈できる事を示し、更にかき混ぜ文特有の統語的特徴も同時に獲得されている事を示している。最初の実験（実験[1]）では日本語話者の幼児の受け身文(2b)とかき混ぜ文(2c)の理解度を調べている。

(2) a. 熊がネズミを追いかけた。 (能動文)
b. [ネズミが]$_i$ 熊に t_i 追いかけられた。 (受け身文)
c. [ネズミを]$_i$ 熊が t_i 追いかけた。 (かき混ぜ文)

次に、かき混ぜ文を正しく解釈できる幼児が、その統語的特徴も獲得しているかどうかを調べた実験研究を紹介する。

(3) a. アヒルが 自分の庭で 牛を 追いかけた。
b. [牛を]$_i$ [自分の庭で]$_j$ アヒルが t_j t_i 追いかけた。

日本語においては、「自分」という照応表現は、先行詞によって c-統御されなければならない。(3a)では 「アヒルが」が「自分」を c-統御している。(3b)ではかき混ぜ操作によって c-統御の構造が表面上なくなっているにもかかわらず、同じ解釈が可能である。そこで、Saito (1989)は、かき混ぜ操作で移動した要素は意味解釈される際、元の位置に戻り、構造が再構成されると論じている。

幼児の言語知識の中に「かき混ぜ」とその特性が早くから存在することを示した後、本論文では、そのような早期獲得がいかにして可能となるのかについて検討を加える。具体的には、Fukui (1993) ならびに Saito and Fukui (1998) の主張する「（日本語タイプ）のかき混ぜは、主要部パラメータに関して主要部後置の値をとる言語においてのみ可能となる」という提案の妥当性を、日本語を母語とする幼児が手にする言語経験の観点および幼児の持つ基本語順に関する知識の観点から検討する。

2. 日本語のかき混ぜ文

2.1. 成人の言語知識

日本語を対象とする理論的研究においては、日本語の持つ比較的自由な語順は、一種の移動によるものと考えられている。Haig (1976)、Harada (1977)は、Ross (1967)の「移動

は複合名詞句や付加詞句を超えて行うことはできない」とする島の制約を用いて、かき混ぜ文が移動によって派生されることを示している。

(4) a.　ジョンが**[**$_{\mathbf{CNP}}$[あの本を　買った]人を**]**探しているらしい

b. ?* あの本を $_i$[ジョンが**[**$_{\mathbf{CNP}}$[t_i　買った]人を**]**探しているらしい]

(5) a.　メアリーが**[**$_{\mathbf{AdjP}}$ジョンが東京に行きたがっているのに**]**無視しているらしい

b. ?* 東京に $_i$ [メアリーが**[**$_{\mathbf{AdjP}}$ジョンが t_i 行きたがっているのに**]**無視しているらしい]

また、Kuroda (1980)は浮遊量化詞を用いて移動の存在を示している。一般に量化詞とそれが修飾する名詞句は隣接していなければならない。(6)では量化詞「2 人」は「女の子」を修飾する事はできるが、「男の子」を修飾する事はできない。

(6)　男の子が女の子を 2 人見た。

しかしかき混ぜ文(7)では、「2 人の女の子」という解釈が可能である。

(7)　女の子を　男の子が 2 人見た。

Kuroda (1980)は「女の子を」と「2 人」はもともと隣接している為にこの解釈が可能であると説明し、(7)のような文は目的語の移動によって派生されているとする。

更に Saito (1989)は、かき混ぜ操作で移動した句は元の位置に戻って解釈されると論じている。

(8)　どの本を $_i$ [メアリーが[ジョンが t_i 図書館から借り出したか]知りたがっている](こと)

疑問詞は通常疑問文の中でのみ解釈される。(8)では主文が能動文、補文が疑問文であり、疑問詞句「どの本を」が正しく解釈を受ける為には補文内に戻らなければならない。この「再構成」の存在は、照応形を使った文でも観察される。

(9)　a. ?* お互い $_i$ の先生が[ジョンとメアリー]$_i$ を批判した。

b. [お互い $_i$ の先生を]$_j$ [ジョンとメアリー]$_i$ が t_j 批判した。

「お互い」は「先行詞によって c-統御されなければならない」とする制約の規制を受けるため、(9a)は非文である。一方「お互い」を含む句が文頭に移動した(9b)は文法的である。これは移動した句が再構成によって元の位置に戻って解釈される為であると考えられる。後述する実験 2 ではこの再構成の知識の獲得状況を検証する。

2.2. かき混ぜの獲得に関する先行研究

Hayashibe (1975)は、幼児が課題文の内容をぬいぐるみで表現する動作法（Act-out）の実験手法を用いてかき混ぜ文の獲得時期を調べ、かき混ぜ文は比較的遅い時期まで正しく理解されることがないと報告している。例えば(10)に対して、4-5 歳の幼児達が一律、アヒルがカメを追いかける状況を表現したと観察している。

(10) アヒルさんをカメさんが追いました。

Sano (1977)及び Suzuki (1977)も同様の観察をしている。このような幼児の「間違い」は、最初の名詞句を「行動主」、2 番目の名詞を「動作を受ける物」として自動的に解釈するためであり、かき混ぜ文が正しく解釈されるのは 5 歳まで待たなければならないとしている。

これ対し、Otsu (1994)は、適切な文脈があれば 3-4 歳児もかき混ぜ文を正しく解釈できると主張した 。

(11) a. 公園に　アヒルが　いました。　(文脈)
b. そのアヒルを　カメが　追いかけました。 (かき混ぜ文)

かき混ぜ文(11b)の理解度を調べる際に、文脈(11a)を与える場合と与えない場合を比較し、文脈がない場合は、幼児はかき混ぜ文を誤って解釈するのに対し、文脈が与えられた場合には、幼児はかき混ぜ文を正しく解釈できると報告している。これは、かき混ぜの適用を受けた要素は直前の発話との「橋渡し」(Masunaga1983)の役割を果たし、文脈がなければかき混ぜ文を使う必要がないので、幼児はかき混ぜ操作がないものとみなして主語-述語の関係を解釈する為だと論じている。

幼児の言語理解は文脈に左右されやすいので、この文脈依存の考えは妥当であると考えられるが、大人との違いを考えると、更なる研究の余地があると考えられる。Murasugi (2000)は、2-4 歳児のかき混ぜ文の理解度が、文脈を与えなくとも上昇する場合があるか

どうかを調べている。具体的には、課題文に受け身文を加え、かき混ぜ文との理解度の違いを検討している 。

(12) a.　アヒルが　牛を　追いかけた。　（能動文）
b.　牛が$_i$　アヒルに　t_i　追いかけられた。（受け身文）
c.　牛を$_i$　アヒルが　t_i　追いかけた。　（かき混ぜ文）

次節で Murasugi (2000)の実験を発展させた Murasugi and Kawamura (2005)の実験的研究を概観する。

3.　Murasugi and Kawamura (2005) の実験 [1]

Murasugi and Kawamura (2005)の実験[1]では、2 歳から 6 歳の計 22 人の日本語を母語とする幼児を対象とした動作法による実験を実施し、対照群として 2 人の大人も含めた。7 つの能動文、7 つの受け身文、7 つのかき混ぜ文を無作為な順序で提示し、被験者である幼児はぬいぐるみを用いて提示された文の意味を表現することが求められた。

(13) 実験者：　これは何？
被験者：　うし。
実験者：　じゃ、これは何？
被験者：　あひる。
実験者：　そうね、じゃ、これから、牛とアヒルで私が言う事をやってみてね。
「牛をアヒルが追いかけた」（実験文） 何が起きたかな？
被験者：　（机の上のぬいぐるみを操作する。）
実験者：　よくできたね。

この場合、被験者がぬいぐるみでアヒルが牛を追いかける動作を表現した時、正答と見なした。

結果は下の通りとなった。「能動文」「かき混ぜ文」「受け身文」の欄の数字は正答率を示す。

(14) 実験[1]の結果の詳細

被験者	年齢(歳)	能動文(%)	かき混ぜ文(%)	受け身文(%)
A	2	83	83	50
B	2	83	66	17
C	3	100	100	100
D	3	100	100	28
E	3	100	100	42
F	3	28	42	0
G	3	71	71	28
H	3	100	85	57
I	4	100	100	0
J	4	100	100	71
K	4	100	100	42
L	4	100	100	85
M	4	100	100	100
N	4	100	100	100
O	5	100	100	100
P	5	100	100	100
Q	5	100	100	100
R	5	100	100	100
S	5	100	100	100
T	5	100	100	100
U	6	100	100	100
V	6	100	100	100
W	大人	100	100	100
X	大人	100	100	100

この結果は Murasugi (2000)の実験に準じており、2 つの点が注目される。まず、かき混ぜ文の正答率がきわめて高く、かき混ぜ文の獲得は能動文の獲得と同じぐらい早い時期に行われると言える。また、かき混ぜ文の正答率にくらべると受け身文の正答率は常に低くなっており、受け身文の獲得には時間がかかる事がわかる。この実験では文脈を与えなかったが、課題文に受け身文を含んだ事で、被験者の注意が「格」と「主題役割」の関係に向き、かき混ぜ文の解釈が正しく行われたと考えられる。

4. Murasugi and Kawamura (2005) の実験 [2]

実験[2]では、幼児が「自分」を含んだかき混ぜ文も正しく理解できるかという問題を取り上げ、それを調べることにより、かき混ぜ文の特徴である「再構成」の知識の獲得状況を明らかにすることを試みている。

(15)　牛を$_i$　アヒルが　t_i　追いかけた。

(16)　a. アヒルが　牛を　[自分の庭で]追いかけた。　（能動文）

b. 牛を$_i$　[自分の庭で]$_j$　アヒルが　t_j　t_i　追いかけた。　（かき混ぜ文）

(15)のかき混ぜ文を正しく解釈できる幼児が、(16b)の様な「自分」を含む文を正しく理解できるかを調べた。「自分」は主語によって c-統御されなければならない要素であり、正しい解釈の為にはこの「自分」の語彙的・統語的特徴を理解していなければならない。そこでまず(16a)の様な文を用いて、被験者が「自分」の解釈として「牛」ではなく「アヒル」を的確に選ぶか調べ、これができる被験者に対し、 かき混ぜ文(16b)においても「自分」の先行詞を正しく見つけることができるかを調査している。加えて、課題文に(17)のような受け身文も加えている。

(17)　[熊が]$_i$　ウサギに　自分の　庭で　t_i　追いかけられた。　（受け身文）

本実験では、「自分」を含んだ(16a)の様な能動文を 6 文、(16b)の様なかき混ぜ文を 8 文、(17)の様な受け身文を 6 文、計 20 の課題文を用意し、それらを被験者に無作為な順で提示した。実験[1]と同様、動作法（Act-out）の手法を用い、実験[1]と同じ被験者 22 名が参加した。それぞれのぬいぐるみに対して庭や家が準備され、 被験者は家や庭の中でぬいぐるみを動かして、課題文の内容を表現する事が要求された。 実験では下のような対話が行われた。

(18)　実験者:　アヒルはどれ？

被験者:　これ。

実験者:　牛はどれ？

被験者:　これ。

実験者:　こっちが牛の庭ね。（実験者が牛用の庭の模型を指す）

こっちがアヒルの庭ね。（実験者がアヒル用の庭の模型を指す）

実験者:　じゃ、これから私が言う事、やってみてね。

「牛を自分の庭でアヒルが追いかけた」（実験文）

被験者:　（机の上のぬいぐるみを操作する。）

実験者:　よくできたね。

この場合、被験者がアヒルのぬいぐるみがアヒル用の庭の模型の中で牛を追いかける操作をした場合、正答とみなした。下の表(19)の右側欄が本実験の結果である。

(19)　実験[2]の結果の詳細

被験者	年齢 (歳)	実験 1 能動文 (%)	実験 1 かき混ぜ文 (%)	実験 1 受け身文 (%)	**実験 2** 能動文 (%)	**実験 2** かき混ぜ文 (%)	**実験 2** 受け身文 (%)
A	2	83	83	50	0	NT	NT
B	2	83	66	17	0	NT	NT
C	3	100	100	100	100	100	50
D	3	100	100	28	100	100	33
E	3	100	100	42	100	100	16
F	3	28	42	0	50	38	16
G	3	71	71	28	66	50	50
H	3	100	85	57	83	87	50
I	4	100	100	0	100	100	33
J	4	100	100	71	100	100	33
K	4	100	100	42	66	75	16
L	4	100	100	85	83	87	33
M	4	100	100	100	100	100	33
N	4	100	100	100	100	100	50
O	5	100	100	100	100	100	100
P	5	100	100	100	100	100	100
Q	5	100	100	100	100	100	100
R	5	100	100	100	100	100	100
S	5	100	100	100	100	100	33
T	5	100	100	100	100	100	50
U	6	100	100	100	100	100	100
V	6	100	100	100	100	100	50
W	大人	100	100	100	100	100	100
X	大人	100	100	100	100	100	100

ここでは以下の 3 点に注目しよう。まず 2 歳児(AB)は「自分」を含む能動文を正しく理解できておらず、2 歳では「自分」の語彙的・統語的特性を獲得できていないと思われる。

そのため、かき混ぜ文・受け身文のテストでは NT とした。一方、3-4 歳児は「自分」の特性を獲得しつつあるように観察される。

実験[1]でかき混ぜ文を正しく解釈した被験者 C、D、E (3 歳児) と I、J、M、N (4 歳児) は「自分」を含むかき混ぜ文も正しく解釈できている。なお、被験者 K、L の実験 2 のかき混ぜ文の正答率は実験[1]に比べて低くなっているが、能動文の正答率も高くない事を考慮すると、これは「自分」の特性の獲得が終了していない為であると考えられる。

また、かき混ぜ文と受け身文の違いに注目すると、実験[2]においても受け身文の正答率が低い事がわかる。特に被験者 C、M、N、S、T、V をみると、実験[1]では正しく解釈できていても、実験[2]で受け身文に「自分」が含まれると理解が難しくなっている。これは実験で使われた A-移動を含む直接受け身文を、移動を含まない間接受け身文として間違えて解釈している可能性を示唆している。

5.　かき混ぜ文の実験研究と受け身文の獲得に関する所見

以上、日本語のかき混ぜ文とその特性の獲得に関する 2 つの心理的実験研究を紹介した。実験[1]では、能動文とかき混ぜ文の獲得状況に大きな違いは見られず、かき混ぜ文が従来考えられていたよりもかなり早い時期に獲得される事が示された。これには「格」と「主題役割」の関係に注意を向ける事が実験上重要であった。また、受け身文の獲得がかき混ぜ文の獲得に比べて遅れる事も明らかになった。ここで報告されているかき混ぜ文の獲得の時期は、2 歳児の自然発話においてかき混ぜ文が観察される事実とも一致している。

さらに、実験[2]では、幼児がかき混ぜ文を正しく理解することに加えて、かき混ぜ操作の特徴である再構成の統語的特性が、その時期に獲得されているか否かについて、実証的に調査を行った。実験[1]でかき混ぜ文を大人と同様に（正しく）解釈でき、更に「自分」の特性を獲得している子供が、実験[2]においても「自分」を含むかき混ぜ文も正しく解釈する事がわかった。ここから、かき混ぜ文を獲得する際、同時にかき混ぜ操作の特徴である再構成の特性も獲得していることが示された。また、この実験では「自分」の語彙的・統語的特性の獲得が 3-4 歳で行われる事も明らかとなった。ただし、実験[2]で用いた「自分」という表現は、先行詞に c-統御されねばならないという特性に加え、主語のみを先行詞とするという特性（「主語指向性」）を持つ。今回の実験で用いた(16b)のような文では、主語が同一文内に一つしか存在しないため、仮に幼児が c-統御の条件や再構成に関する知識として持たずとも、「『自分』は主語を先行詞とする」という知識を持っていれば、得られた結果が説明できる可能性もないわけではない。Isobe (2008)では、この点を回避するため、(20)のような埋め込み文を伴ったかきまぜ文を用いて、幼児が再構成に関する知識

を持つか否かを確かめた。その結果、幼児はやはり再構成に関する知識を持っていることが明らかとなり、Murasugi and Kawamura (2005)で得られた結論が本質的に正しいことが確認されている。

(20)　[パンダさんが自分$_i$の大きな鼻を叩いたと]$_j$　ぶたさんは$_i$　t_j　思った。

再び実験[1]・実験[2]の結果に目を向けると、両実験で受け身文の獲得が遅れる事が判明したが、この原因として 3 つの可能性が考えられる。まず、 Bever (1970)、de Villiers and de Villiers (1973)は、受け身文では語順が変わっているために獲得が遅くなると考えているが、この案では、かき混ぜ文の獲得も同様に遅くなる事が予測されてしまい、実験[1]で得られた結果と矛盾する。一方 Borer and Wexler (1987)、Schaeffer (1995)、Sugisaki (1999)、Minai (2000)なども述べるように、受け身文が含む A 連鎖の発現には「成熟」(maturation)という要因が関与しており、ある一定の発達段階まで幼児の知識に現れないためである可能性がある。また受け身文は形態的に複雑な形を持つためという可能性も考えられる。

Borer and Wexler (1987)は英語とヘブライ語の 2 種類の受け身に注目し、派生に A-移動を含む動詞的受け身文と A-移動を含まない形容詞的受け身文の獲得状況を調べたところ、同じ形態素が使われているにも関わらず、動詞的受け身文でのみ獲得遅延が見られたと報告している。ここから A-移動の獲得には時間がかかると論じた。Sugisaki (1999)は日本語の A-移動を含む直接受け身文と A-移動を含まない間接受け身文の獲得状況を比較し、 また、Sugisaki and Isobe (2001)は文頭へのかき混ぜと動詞句内のかき混ぜ(A 移動)を比較し、同様の結論に至っている。

本論文で扱った受け身文はすべて派生に A 移動を含む直接受け身文であり、一方、かき混ぜ文はすべて A’移動によって派生されたと考え得る種類の文であるため、本研究で観察されたかき混ぜ文と受け身文の獲得状況の違いは、A 移動の獲得に時間がかかるとする議論に矛盾しない。また受け身の形態の複雑さによる獲得の遅延の可能性も無視できない。間接受け身文では受け身形態素*-rare* は動詞であるが、直接受け身文では接辞とされており、このような接辞の獲得は時間を要する事が、別の研究において独立に報告されている　(Murasugi and Hashimoto 2004)。また、この受け身接辞 は目的格と主題役割の吸収と主語への経験役割の付与という機能を持っており、直接受け身文の獲得の遅れが形態的複雑さに起因する可能性も否定できない。従って、受け身文の獲得の遅れは、A-移動の発現の遅れに加え、形態的複雑さによる獲得の遅れも考慮に入れるべきであろう。

6.　かき混ぜの獲得とパラメータ理論

6.1.　かき混ぜを司るパラメータ：幼児に与えられる言語経験の観点から

上記で議論したように、Otsu (1994)や Murasugi and Kawamura (2005)の研究により、かき混ぜに関する知識がすでに 2－3 歳児の段階で日本語を母語とする幼児に備わっていることが明らかとなっている。では、いったいどのようにしてこのようなかき混ぜの早期獲得が可能となるのだろうか。

この問いを考える際、Fukui (1993)および Saito and Fukui (1998)による理論的研究が有益な知見を与えてくれる。これらの研究は、日本語だけではなく、英語にも随意的な移動があることに注目する。

(21)　日英語の随意的移動：

a.　日本語：　　かき混ぜ

その本を$_i$　ジョンが　t_i　買った（こと）

b.　英語：　　重名詞句転移 (Heavy NP Shift)

They brought t_i into my room [the beautiful pink dress]$_i$.

Fukui (1993)および Saito and Fukui (1998)は、日本語の随意的移動が左方移動であるのに対し、英語の随意的移動が右方移動であるという違いに基づき、「随意的移動は、主要部パラメータの値を維持する方向に起こる」という一般化を提案している。日本語は、主要部後置型の言語であるため、随意的移動は、主要部の前方（つまり左方）へ起こるのに対し、英語は、主要部前置型の言語であるため、随意的移動は、主要部の後方（つまり右方）へと起こることになる。この理論的提案が正しければ、幼児にとっては、獲得しようとしている言語が主要部パラメータに関して主要部後置の値をとることを示す言語経験が、かき混ぜの獲得を助けてくれる重要な情報源となるはずである。Sugisaki (2012)は、この仮説の妥当性を、幼児が手にする言語経験の観点から検討した。

Sugisaki (2012)は、まず、幼児にとってかき混ぜの直接的な証拠になり得るであろう OSV（目的語－主語－動詞）の語順を持った文が、幼児に向けられた発話の中で、どのくらいの頻度を持つのかを分析した。CHIDES データベース(MacWhinney 2000)に収められた日本語を母語とする幼児 3 名分(Aki, Ryo, Tai; Miyata 2004 a,b,c)に関して、幼児に向けられた母親の発話を分析した。分析対象となったコーパスの基本的情報は(22)にまとめた通り

である。これらのコーパスに収められた母親の発話の中に、どの程度 OSV 文が含まれるかを分析したところ、結果は(23)の通りであった。

(22)　分析対象となった発話コーパスに関する情報

	子どもの年齢範囲	母親の発話の総数
Aki's Mother	1;05:07 - 3;00:00	20828
Ryo's Mother	1;04:03 - 3;00:30	7345
Tai's Mother	1;05:20 - 3;01:29	47377

(23)　幼児に向けた母親の発話における OSV 文の頻度

	SOV		OSV	
	母親の発話数	%	母親の発話数	%
Aki's Mother	58	0.278%	1	0.005%
Ryo's Mother	3	0.041%	0	0.000%
Tai's Mother	51	0.108%	2	0.004%

(23)の表から明らかな通り、幼児に向けられた発話(母親の発話数)の中で、OSV の語順を持った文はほとんど存在しないことが明らかとなった。したがって、幼児が OSV の語順を直接的な手掛かりとしてかき混ぜ文を獲得している可能性は非常に低いと言える。

同様の主張が、先行研究である Kang (2005)において、韓国語の獲得に関して既に成されている。Kang (2005)は、Cho (1982)の観察に基づき、韓国語の幼児が手にする言語経験において OSV 文の頻度が非常に低いことを報告し、OSV 文が韓国語におけるかき混ぜの獲得に関する直接的な手がかりとはならないと主張している。

(24)　韓国語における幼児に向けた母親の発話における OSV 文の頻度

		Word Orders	
		SOV	OSV
Alicia's Mother (2;03-2;09)	+Accusative Case	2	2
	-Accusative Case	87	8
Paul's Mother (2;07 - 2;11)	+Accusative Case	3	3
	-Accusative Case	155	11
Anne's Mother (2;10 - 3;04)	+Accusative Case	4	0
	-Accusative Case	160	32
Total		411	56

(Cho 1982, cited in Kang 2005)

したがって、(23)にまとめた結果は、韓国語獲得について成された Kang (2005)の主張が、日本語獲得においてもあてはまることを示すものである。

では、日本語を母語とする幼児にとって、獲得しようとしている言語が主要部後置型であることを示す言語経験はどのくらいの頻度で与えられるのだろうか。この点を明らかにするために、Sugisaki (2012)は、幼児に向けられた発話の中で、「ここから」のような後置詞句の出現頻度を分析した。結果は(25)にある表のとおりである。

(25)　幼児に向けた母親の発話における後置詞句の頻度

	母親の発話の総数	後置詞句	
		母親の発話数	%
Aki's Mother	20828	776	3.726%
Ryo's Mother	7345	204	2.777%
Tai's Mother	47377	1274	2.689%

(25)の表からわかる通り、幼児に向けられた母親の発話の中に、後置詞句は比較的頻繁に現れる。Legate and Yang (2002)は、空主語パラメータを非空主語型の値に固定するのに必要と考えられる情報を there 構文であると仮定し、英語を母語とする幼児に与えられる言語経験における there 構文の頻度を分析したところ、頻度は約 2.5%であった。日本語を母語とする幼児にはこの数値を超える頻度で後置詞句の情報が与えられているため、日本語を母語とする幼児にとって、獲得しようとしている言語が主要部後置型の値をとると決定するのに十分な情報が言語経験に含まれていると考えることができる。

上記の結果は、Fukui (1993)および Saito and Fukui (1998)の提案する「かき混ぜが可能であるかどうかは主要部パラメータと密接に結びついている」という仮説と合致するものであるが、果たしてかき混ぜを司るパラメータに関する他の理論的提案は、言語経験の分析から支持を得ることができるだろうか。以下では、自由語順に関する重要な理論研究の一つである Hale (1983)の提案に関して、検討を加える。

Hale (1983)は、Warlpiri 語（オーストラリア先住民の言語のひとつ）の分析に基づき、かき混ぜを許容するのは、生産的に空主語・空目的語を許容する言語であると提案した。Warlpiri 語も日本語も、空主語・空目的語を多用する言語であるが、では幼児が手にする言語経験にも、その点に関する十分な情報が含まれているだろうか。

スペイン語のように、空主語のみを許与する言語と日本語・Warlpiri 語のような言語を区別するためには、空目的語が明らかに含まれている文（つまり音形を持った主語に他動

詞が後続している文）に注目することが幼児にとっては必要であると考えられる。(22)にあげた 3 名の幼児の発話コーパスにおける母親の空目的語文の頻度を分析したところ、結果は(26)の通りとなった。

(26)　幼児に向けた母親の発話における空目的語文の頻度

	母親の発話の総数	空目的語文	
		母親の発話数	%
Aki's Mother	20828	46	0.221%
Ryo's Mother	7345	21	0.286%
Tai's Mother	47377	109	0.230%

(26)の表に示される通り、明らかに空目的語を含んでいると考えられる文は、幼児が手にする言語経験においては、1%にも満たない頻度でしか現れないことが明らかとなった。この数値は、上に述べた Legate and Yang (2002)の基準に照らすと、幼児にとって十分な量が与えられているとは言い難い。したがって、幼児がかき混ぜを獲得する際に、空目的語文に基づいてその可能性を決定している可能性は低いと考えられる。

以上をまとめると、幼児が手にする言語経験の性質から考えた際、当該言語においてかき混ぜが可能であるかどうかは主要部パラメータに依存している可能性は高いが、生産的な空目的語を許容するパラメータに依存している可能性は低いと考えられる。したがって、幼児の言語経験からの発見は、Fukui (1993)および Saito and Fukui (1998)の理論的提案が妥当である可能性を高めるものと解釈できる。

6.2.　幼児日本語における基本語順

日本語を母語とする幼児が手にする言語経験においては、日本語が主要部後置型であることを示す情報が十分に含まれていることが明らかとなった。一方で、十分な情報が与えられているからと言って、幼児が実際にその知識を早い段階で獲得しているとは限らない。では、日本語を母語とする幼児が早い段階から実際に「日本語は主要部パラメータに関して主要部後置型の値をとる」という知識を持つことを示す証拠はあるだろうか。

Sugisaki (2008)は、日本語を母語とする 2 歳児が、OV（目的語－動詞）の語順が基本語順であるという知識を持つことを示すことにより、上記の問いに答えている。成人の持つ日本語の知識においては、(27)のどちらの文も許容されるため、一見、OV の語順も VO の語順も可能であるかのように見える。

(27) a.　ジョンがその本を買ったよ。
　　b.　ジョンが買ったよ、その本を。

しかし、Tanaka (2001)の研究が示す通り、(27b)のような VO 文は、限られた環境でしか可能とはならない。例えば、VO 文は、埋め込み文では許容されず、また目的語 *wh* 疑問文においても用いることができない。

(28) a.　メアリーは[ジョンがその本を買った]と信じていた。
　　b. ＊メアリーは[ジョンが買った、その本を]と信じていた。
(29) a.　ジョンが昨日何を買ったの？
　　b.　＊　ジョンが昨日買ったの、何を？

これらの事実は、OV 文の方が VO 文よりも広い環境において許容されることを示し、従って日本語の基本語順は VO ではなく OV であるということを示すものと解釈できる。

Sugisaki (2008)は、自然発話分析を通して、日本語を母語とする幼児が、成人と同様に、OV 文のみしか許容されない環境があるという知識を持つことを示した。具体的には、CHILDES データベースに収められている 4 名の幼児の発話を分析し、(29a)のような OV 語順を伴った目的語 *wh* 疑問文と、(29b)のような VO 語順を伴った目的語 *wh* 疑問文の使用頻度を分析した。分析対象となった 4 名の幼児の発話コーパスに関する基本的情報が(30)の表であり、分析結果が(31)の表である。

(30)　分析対象となった幼児発話コーパス

幼児名	年齢範囲	幼児の発話の総数	発話データ収集者
Aki	2;06:15 - 3;00:00	12,415	Miyata (2004a)
Ryo	2;04:25 - 3;00:30	5,901	Miyata (2004b)
Tai	1;09:03 - 3;01:29	29,980	Miyata (2004c)
Jun	2;03:23 - 3;00:01	22,444	Ishii (2004)

(31) 分析結果

	Aki		Ryo		Tai		Jun	
	(S)OV	(S)VO	(S)OV	(S)VO	(S)OV	(S)VO	(S)OV	(S)VO
発話総数	518	38	252	43	1120	50	754	120
目的語 *wh* 疑問文の発話数	185	0	40	0	70	1	140	0
目的語 *wh* 疑問文の発話割合(%)	38.7	0	15.9	0	6.3	2	18.6	0

(31)の表が示す通り、日本語を母語とする幼児は、観察しうる最初期から、目的語 *wh* 疑問文においては OV 語順しか用いることをしない。この結果は、VO 語順は目的語 *wh* 疑問文において使用することができない、という知識を幼児がすでに持つことを示すものと解釈できる。つまり、この結果は、日本語を母語とする幼児が、日本語の基本語順は OV であるという知識をすでに持つことを示すものであり、したがって、「日本語は主要部パラメータに関して主要部後置型の値をとる」という知識が 2 歳の段階から備わっていることが明らかとなった。

6.3. かき混ぜを司るパラメータ: まとめ

6 節では、前節までに明らかとなった日本語におけるかき混ぜの早期獲得に基づき、いかにしてそのような早期獲得が可能となるのかについて検討した。幼児が手にする言語経験には、後置詞句に関する情報が豊富に含まれていること、および幼児が 2 歳までの段階で、日本語の基本語順が OV であるという知識を身につけていることを考慮すると、Fukui (1993)および Saito and Fukui (1998)が提案する「かき混ぜが可能である言語は、主要部パラメータの値が主要部後置の値をとる言語に限られる」という理論的仮説が言語獲得の観点からも妥当であることが明らかとなった。

7. かき混ぜの獲得： これまでの成果と今後の展望

本論文では、かき混ぜの獲得について、実験研究・自然発話分析の両面から、また幼児の持つ言語知識及び周りの大人から幼児に与えられる言語経験の両面から分析した。これらの研究から明らかとなったことは、大きく分けて以下の 2 点と考えられる。

(32) a. 日本語において、かき混ぜの知識は遅くとも 3 歳までには獲得されている。

b. 日本語を獲得中の幼児が手にする言語経験には、かき混ぜが可能であるということを直接的に示す文(OSV 文)がほとんど含まれていない。

(32b)の観察にもかかわらず(32a)が成り立つという発見は、母語獲得が生得的な「普遍文法」に支えられているという生成文法の基本的仮説に支持を与えるものである。したがって、日本語におけるかき混ぜの獲得に関する一連の研究は、母語獲得における「普遍文法」の関与に対し、日本語獲得からの新たな証拠を与えたものと解釈できる。かき混ぜという操作が英語には見られない点を考慮すると、(32)にまとめた発見の重要性は非常に大きいと考えられる。

一方で、かき混ぜの獲得に生得的な「普遍文法」が関与しているのであれば、より早い段階でかき混ぜの知識が獲得されていることも期待される。英語の獲得において、30 か月の幼児を対象とした実験研究（例えば、Sutton et al. 2012 など）が盛んになってきている現状を考慮すると、2 歳中頃の年齢を主な被験者としたかき混ぜの実験研究が今後の日本語獲得研究の一つのトピックになり得るだろう。

参考文献

Bever, T. 1970. The cognitive basis for linguistic structures. In *Cognition and the Development of Language*, ed. J. R. Hayes, 4-353. New York: Wiley.

Borer, H., and K. Wexler. 1987. The maturation of syntax. In *Parameter Setting*, eds. T. Roeper and E. Williams, 123-172. Dordrecht: Reidel.

Cho, S. W. 1982. The acquisition of word order in Korean. *Calgary Working Papers in Linguistics*. University of Calgary.

de Villiers, J., and P. de Villiers. 1973. Development of the use of word order in comprehension. *Journal of Psycholinguistic Research* 2:331-341.

Fukui, N. 1993. Parameters and optionality. *Linguistic Inquiry* 24:399-420.

Haig, J. H. 1976. Shadow pronoun deletion in Japanese. *Linguistic Inquiry* 7:363-371.

Hale, K. 1983. Warlpiri and the grammar of non-configurational languages. *Natural Language and Linguistic Theory* 1:5-47.

Harada, S.-I. 1977. Nihongo-ni ‘henkei’-wa hituyoo-da [Transformation is necessary in Japanese]. *Gengo* 6:11-12.

Hayashibe, H. 1975. Word order and particles: A developmental study in Japanese. *Descriptive and Applied Linguistics* 8:1-18.

Ishii, T. 2004 *Japanese: Ishii Corpus*, TalkBank 1-59642-054-5, Pittsburgh, PA.

Isobe, M. 2002. Reconstruction in child Japanese: A preliminary study. In *An Enterprise in the Cognitive Science of Language: A Festschrift for Yukio Otsu*, eds. T. Sano et al., 205-215. Tokyo: Hituzi Syobo Publishing.

Kang, B. 2005. A learnability puzzle in scrambling. In *Proceedings of the 29th Annual Boston University Conference on Language Development*, eds. A. Brugos, M. R. Clark-Cotton and S. Ha, 331-340. Somerville, Massachusetts: Cascadilla Press.

Kuroda, S.-Y. 1980. Bunkoozoo-no hikaku [The comparison of grammatical structures]. *Niti-eigo Hikaku-kooza 2: Bunpoo*, ed. by T. Kunihiro, 25-61. Tokyo: Taishukan.

Legate, J., and C. Yang. 2002. Empirical re-assessment of stimulus poverty arguments. *The Linguistic Review* 19:151-162.

Masunaga, K. 1983. Bridging. In *Proceedings of the XIIIth International Congress of Linguistics*, eds. S. Hattori and K. Inoue, 455-460. Tokyo: Proceedings Publishing Committee.

MacWhinney, B. 2000. *The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk*. Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum.

Minai, U. 2000. The acquisition of Japanese passives. In *Japanese/Korean Linguistics 9*, eds. M. Nakayama and C. J. Quinn Jr., 339-350. Stanford: CSLI Publications.

Miyata, S. 2004a. *Japanese: Aki Corpus*, TalkBank 1-59642-055-3, Pittsburgh, PA.

Miyata, S. 2004b. *Japanese: Ryo Corpus*, TalkBank 1-59642-056-1, Pittsburgh, PA.

Miyata, S. 2004c. *Japanese: Tai Corpus*, TalkBank 1-59642-057-X, Pittsburgh, PA.

Murasugi, K. 2000. Bunpoo kakutoku: Idou gensyoo-o tyuusin tosite [The acquisition of grammar with special reference to movement]. *Academia: Literature and Language* 68:223-259. Nagoya: Nanzan University.

Murasugi, K., and T. Hashimoto. 2004. Three Pieces of Acquisition Evidence for the v-VP Frame. *Nanzan Linguistics* 1:1-19. Center for Linguistics, Nanzan University.

Murasugi, K., and T. Kawamura. 2005. On the acquisition of scrambling in Japanese. In *The Free Word Order Phenomenon: Its Syntactic Sources and Diversity*, eds. J. Sabel and M. Saito, 221-242. Berlin: Mouton de Gruyter.

Otsu, Y. 1994. Early acquisition of scrambling in Japanese. In *Language Acquisition Studies in Generative Grammar*, eds. T. Hoekstra and B. D. Schwartz, 253-264. Amsterdam: John Benjamins.

Ross, J. R. 1967. *Constraints on Variables in Syntax*. Cambridge: MIT dissertation.

Saito, M. 1985. *Some Asymmetries in Japanese and Their Theoretical Implications*. Cambridge: MIT dissertation.

Saito, M. 1989. Scrambling as semantically vacuous A'-movement. *Alternative Conceptions of Phrase Structure*, ed. by M. Baltin and A. Kroch, 182-200. Chicago: University of Chicago Press.

Saito, M. and N. Fukui. 1998. Order in phrase structure and movement. *Linguistic Inquiry* 29:439-474.

Sano, K. 1977. An experimental study on the acquisition of Japanese simple sentences and cleft

sentences. *Descriptive and Applied Linguistics* 10:213-233.

Schaeffer, J. 1995. On the acquisition of scrambling in Dutch. In *Proceedings of the 19th annual Boston University Conference on Language Development*, eds. D. MacLaughlin and S. McEwen, 521-532. Somerville, Massachusetts: Cascadilla Press.

Sugisaki, K. 1999. Japanese passives in acquisition. In *Cranberry Linguistics: University of Connecticut Working Papers in Linguistics* 10, eds. D. Braze, K. Hiramatsu and Y. Kudo, 145-156. Cambridge, Massachusetts: MIT Working Papers in Linguistics.

Sugisaki, K.. 2008. Early acquisition of basic word order in Japanese. *Language Acquisition* 15:183-191.

Sugisaki, K. 2012. Poverty of the Stimulus in the Acquisition of Japanese Scrambling. Poster presented at Formal Approaches to Japanese Linguistics 6 (FAJL 6), ZAS/Humboldt University, Berlin, Germany. September 27, 2012.

Sugisaki, K. and M. Isobe 2001. What can child Japanese tell us about the syntax of scrambling? In *Proceedings of the 20th West Coast Conference on Formal Linguistics*, eds. K. Megerdoomian and L. A. Bar-el, 538-551. Somerville, Massachusetts: Cascadilla Press.

Sutton, M., M. Fetters, and J. Lidz. 2012. Parsing for principle C at 30 months. In *Proceedings of the 36th annual Boston University Conference on Language Development*, eds. A. K. Biller, E. Y. Chung and A. E. Kimball, 581-593. Somerville, Massachusetts: Cascadilla Press.

Suzuki, S. 1977. Nihongo-ni okeru gozyun hooryaku [The acquisition of word order in Japanese]. *Kyooiku-Sinrigaku Kenkyuu* 25:200-205.

Tanaka, H. 2001. Right-dislocation as Scrambling. *Journal of Linguistics* 37, 551-579.

日本語における *wh* 島制約の獲得：予備的研究 *

杉崎　鉱司・村杉　恵子

1.　はじめに

生成文法理論においては、母語知識の獲得は、(i) 獲得可能な言語の類を規定した生得的な仕組みである「普遍文法」(UG)と、(ii) 生後外界から取り込まれる言語経験の両者の相互作用により達成されると仮定されている。そして、生成文法理論に基づく母語獲得研究は、その主な成果の一つとして、UG に含まれると仮定される様々な属性に関し、それらが母語獲得の観察しうる最初期から幼児の言語知識に反映されていることを様々な手法を用いて示すことにより、UG の存在に対する極めて重要な証拠を与え続けてきた。これらの一連の研究の中で、主要な証拠の一つを成している研究に、*wh* 疑問文（に含まれる依存関係）に対する制約の獲得がある。例えば、de Villiers, Roeper, & Vainikka (1990)は、英語を母語とする幼児が(1)のような *wh* 疑問文を与えられた際、*wh* 句である *how* を、埋め込み節内の *paint* と結びつけて解釈することはせず、主節の *ask* と結びつけて解釈することを実験により示した。その観察に基づき、彼らは、(2a)に示したような間接疑問文からの移動を禁ずる「*wh* 島制約」(*wh*-island constraint) が、英語を母語とする 3-6 歳児の言語知識の中に存在すると主張した。

(1)　How did the girl ask [who to paint]?

(2)　a.　*　How$_1$ did the girl ask [who to paint　t_1]?

　　b.　　How$_1$ did the girl ask [who to paint]　t_1 ?

本研究では、このような研究の流れを踏まえ、日本語獲得においても同様に、*wh* 疑問文に対する制約が観察しうる最初期から幼児の言語知識に反映されているか否かを実証的に調査する。Otsu (2007)による先行研究を概観し、その問題点を指摘した後、我々自身の予備的な実験調査で得られた結果を報告する。

2.　日本語における *wh* 島制約の獲得：先行研究

上記の(2a)および以下の(3b)に示される通り、英語において、*wh* 句が埋め込み節内から文頭へと移動する際、その埋め込み節が疑問文である場合には非文となることが Chomsky (1973)などで観察されており、この効果を生み出す制約は「*wh* 島制約」(*wh*-island constraint)と呼ばれている。

* 本論文で報告されている実験調査の実施を許可してくださった津愛児園の先生方および保護者の方々、実験調査に参加してくださった園児の皆さん、そして実験補助を務めてくださった石橋果奈子さん・加藤実耶さん（三重大学人文学部）に、この場を借りて感謝申し上げる。

(3) a. What$_1$ did John say [that May liked t_1]?
b. * What$_1$ did John wonder [whether Mary liked t_1]?

Watanabe (1992)は、英語における *wh* 島制約と同様の効果が、（少なくとも顕在的には）義務的な *wh* 移動を持たない日本語においても見られると主張した。

(4) a. ジョンは[メアリーが何を買ったと]思っているの？
b. * ジョンは[メアリーが何を買ったかどうか]知りたがっているの？

日本語における(4b)の非文法性が、英語における(3b)の非文法性を生み出す制約と全く同一の制約から導かれるものであるのかどうかという点や、(4b)にかかわる制約が統語的な制約であるのか、あるいは意味的・音韻的な制約であるのかという点に関しては、非常に多くの理論的研究がすでになされており、様々なアプローチが提案されている（例えば、Richards 2008 による要約を参照）。しかし、(4b)の非文法性を直接的に示唆してくれるような言語経験が全ての幼児に必ず手に入るとは考えにくいことを考慮すると、(4b)を非文とする制約は、UG の属性を反映したものである可能性が高い。もしそうであるならば、日本語を母語とする幼児の持つ言語知識は、観察しうる最初期から、この制約に従う体系になっていることが予測される。

Otsu (2007)は、この予測の妥当性を調べるため、日本語を母語とする 3 歳児 20 名・4 歳児 20 名を対象とした実験調査を行った。実験の一つでは、まず、ジョンという人形を導入し、幼児には「ジョンが日本語を勉強中で、どれくらい日本語がわかるようになったか調べたいので、手伝ってほしい」という旨の説明を行った。その説明の後に、実験者が、幼児とジョンにお話を聞かせ、お話の後に、実験者がジョンに質問を行い、ジョンが質問に答えた。幼児が行うべき作業は、ジョンの答えそれぞれについて、「適切」なものであったかどうかを判断することであった。（なお、用いられている方法は、Crain & Thornton (1998)などで議論されている真偽値判断法(truth-value judgment task)に近いが、実際に幼児が判断を求められているのはジョンの答えの内容の「真偽」(truth)ではなく、ジョンの答えの形式の「適切さ」(appropriateness)であるため、若干方法が異なる。この点は、次節で述べる我々の実験にも当てはまる。）

実際に用いられたお話の一つは、(5)にある通りである。 このようなお話の後に、(6)のような質問と、それに対するジョンの答えが幼児に提示された。

(5) お話:
太郎君と花子さんがなかよくテレビでドラえもんを見ていました。そこへ、おかあさんがおかしを持ってきてくれました。そして、太郎君に「太郎はだれが好きなの?」と聞きました。太郎君は「もちろん、ドラえもんさ」と答えました。おかあさんは花子さんにも「花子はだれが好きなの？」と聞きました。花子さんはほんとうはのび太君が好きなのですが、ちょっとはずかしかったので、「ひみつ」と答えました。

(6) a. お母さんは花子さんに[誰が好きか]聞きましたか？ ジョン：はい。
b. 花子さんは[誰が好きか]言いましたか？ ジョン：*はい。
c. お母さんは太郎君にも[誰が好きか]聞きましたか？ ジョン：はい。
d. 太郎君は[誰が好きと]言いましたか。 ジョン：*はい。

(5)のようなお話および(6)のような質問を 2 種類提示し、それにより得られた結果は、(7)の表のとおりであった。

(7) Otsu (2007)の実験結果

質問の種類	人形の答え	正答数及び正答率
お母さんは花子さんに[誰が好きか]聞きましたか？	はい	80 / 80 (100%)
花子さんは[誰が好きか]言いましたか？	*はい	80 / 80 (100%)
お母さんは太郎君にも[誰が好きか]聞きましたか？	はい	80 / 80 (100%)
太郎君は[誰が好きと]言いましたか。	*はい	74 / 80 (92%)

Otsu (2007)は、得られた結果から、日本語を母語とする幼児は埋め込み文が「と」で導かれているか「か」で導かれているかによって *yes/no* 疑問文であるか *wh* 疑問文であるかを区別することができ、したがって *wh* 島制約の効果に関する知識を持つと結論付けている。

Otsu (2007)の実験は、日本語における *wh* 島制約の獲得を調査することで、日本語獲得における UG の関与を実証的に示そうとした点で、大変価値のあるものである。しかし、導かれた結論に照らすと、その実験方法には重大な問題が潜んでいると言わざるを得ない。(4b)に示した通り（以下に(8b)として再掲）、日本語における *wh* 島制約は、「かどうか」のような疑問文を示す標識で導かれた節の中にある *wh* 句が、「かどうか」を超えて主節を作用域とすることができない、という効果を生み出すものである。同様に、(9b)に示すように埋め込み文が「か」で導かれている場合には、*wh* 句は埋め込み節内の「か」と結びつき、それを超えて主節を作用域とすることはできないため、(9b)は *wh* 疑問文ではなく、*yes/no* 疑問文として解釈される。（談話の状況によっては、(9b)に対し、「言ったよ。リンゴだよ。」のような形で、*wh* 句に相当する情報を、「はい/いいえ」の答えに追加して供給することは可能であるが、その本質的な解釈は *yes/no* 疑問文に限定される。）

(8) a. ジョンは[メアリーが何を買ったと]思っているの？
b. * ジョンは[メアリーが何を買ったかどうか]知りたがっているの？
(9) a. ジョンは[メアリーが何を買ったと]お母さんに言ったの？
b. ジョンは[メアリーが何を買ったか]お母さんに言ったの？

したがって、幼児の言語知識の中に *wh* 島制約を反映した知識が存在することを示すためには、幼児が(9b)に対して、（その本質的な解釈として）*wh* 疑問文としての解釈を許容しない、という点を示さねばならない。一方で、Otsu (2007)の研究が端的に示した点は、幼児が(9a)のような「と」で導かれた埋め込み節を伴った *wh* 疑問文に対して、*yes/no* 疑問文としての解釈を許容しないという点のみであ

り、したがって幼児が *wh* 島制約の知識を持つか否かという点に関しては、答えを与えていないことになる。

次節で報告する予備的実験は、Otsu (2007)の実験研究の問題点を踏まえ、それを改善することにより、日本語を母語とする幼児が *wh* 島制約に関する知識を持つという点に対する明示的な証拠を与えることを目的としたものである。

3. 日本語における *wh* 島制約の獲得：新たな実験

我々の新たな実験においては、日本語を母語とする幼児 28 名（3 歳児 4 名、4 歳児 17 名、5 歳児 7 名；年齢範囲は 3 歳 9 か月から 5 歳 5 か月で、平均年齢は 4 歳 7 か月）に対して予備的調査を実施した。実験方法は、幼児に質問を行う方法(Question after Story)と、幼児に答えの適切さを問う判断法(Appropriateness Judgment Task)を組み合わせる方法を用いた。まず、Otsu (2007)の実験と同様に、人形（我々の実験では、恐竜の人形）を幼児に紹介し、「恐竜さんはまだ日本語が上手ではないので、質問に対する答えを間違えたら教えてあげてほしい」旨を伝えた。実験では、写真を見せながら、以下のようなお話を幼児に与えた。

(10) お話：
今日は、おさるさんがゾウさんのおうちに遊びに来ています。テーブルの上に、おやつのホットケーキと果物があったけど、2 人は一緒に果物を食べることにしました。ゾウさんはおさるさんに「何が一番好きなの？」と聞きました。おさるさんは「イチゴ！」と答えました。そこへ、ゾウさんのお父さんがお仕事から帰ってきました。お父さんは、ゾウさんに「何が一番好きなの？」と聞きました。ゾウさんは、ちょっと恥ずかしかったので、ないしょにしようかなと思いました。でも、おみやげに電車のおもちゃをもらったので、「ぶどう！」と教えてあげました。

①

②

③

④

⑤

(10)のようなお話の後に、(11)のような質問を、幼児と恐竜の人形の両方に対して行った。手順としては、各質問について、まず幼児に答えを求めた。そして、各質問ごとに、幼児が答えた後に、恐竜に対しても同じ質問を行い、その質問に恐竜が答えた。幼児には、自らに対する質問に答えることに加えて、その恐竜の答えが適切であったかどうかについて、恐竜が手にしている○・×の紙を指し示すことにより判断することが求められた。典型的な会話は、(12)のように行われた。

(11)　質問の例：

a.　おさるさんとゾウさんは、ホットケーキを食べたかな？
（恐竜：うん、食べたよ。）

b.　おさるさんは、何が一番好きとゾウさんに言ったかな？
（恐竜：イチゴだよ。）

c.　ゾウさんは、何が一番好きかお父さんに言ったかな？
（恐竜：ぶどうだよ。）

(12)　典型的な会話：

実験者：　（お話をした後に）今のお話わかったかな？じゃあまずたくちゃん（幼児の名前）に聞くよ。おさるさんとゾウさんは、ホットケーキを食べたかな？
幼児：　食べてない。
実験者：　じゃあ、恐竜くんにも聞いてみるね。恐竜くん、おさるさんとゾウさんは、ホットケーキを食べたかな？
恐竜：　うん、食べたよ。
実験者：　恐竜くんの答え、合ってたかな、変だったかな？
幼児：　（×を指さす。）
実験者：　よくできたね。じゃあまた、たくちゃんに聞くよ。おさるさんは、何が一番好きとゾウさんに言ったかな？
幼児：　イチゴ。
実験者：　じゃあまた、恐竜くんにも聞いてみるね。恐竜くん、おさるさんは何が一番好きとゾウさんに言ったかな？
恐竜：　イチゴだよ。
実験者：　恐竜くんの答え、合ってたかな、変だったかな？
幼児：　（○を指さす。）
実験者：　よくできたね。じゃあまた、たくちゃんに聞くよ。ゾウさんは、何が一番好きかお父さんに言ったかな？
幼児：　うん、言ったよ。
実験者：　じゃあまた、恐竜くんにも聞いてみるね。恐竜くん、ゾウさんは何が一番好きかお父さんに言ったかな？
恐竜：　ぶどうだよ。
実験者：　恐竜くんの答え、合ってたかな、変だったかな？
幼児：　（×を指さす。）

このように、幼児に質問を行う方法(Question after Story)と、幼児に答えの適切さを問う判断法(Appropriateness Judgment Task)の 2 種類を組み合わせた理由は、以下の通りである。前節でも述べたように、(11c)のような疑問文は、談話の状況によっては、「うん、言ったよ。ぶどうだよ。」のように、*wh* 句に相当する情報を、「はい/いいえ」の答えに追加して供給することが可能である。したがって、幼児に適切性の判断だけを求めてしまうと、(11c)に対する恐竜の答えが「適切」であるという反応が幼児から返ってきた際、それが(i)与えられた疑問文を *wh* 疑問文と解釈したためなのか、それとも(ii)「うん、言ったよ。ぶどうだよ。」のような答えの可能性に照らして「適切」と判断したのかの区別をつけることが難しい。そのため、各質問をまず幼児に尋ね、その答えを確認することで、幼児が与えられた疑問文を *wh* 疑問文と解釈したのか *yes/no* 疑問文と解釈したのかを確認した上で、人形の答えの「適切さ」を判断させることとした。

実験は、(10)のようなお話し 2 つと、フィラーとしてのお話し 2 つの計 4 つから構成された。お話の提示順・刺激文の提示順はそれぞれ 2 種類用意された。得られた結果は以下の通りである。

(13)　実験結果:

	(11a)のような練習問題		(11b)のような「～と～か」文		(11c)のような「～か～か」文	
	幼児の答え	適切性判断	幼児の答え	適切性判断	幼児の答え	適切性判断
正答数	55/56	55/56	54/56	54/56	47/56	46/56
正答数	98.2	98.2	96.4	96.4	83.9	82.1

上記の結果が示す通り、幼児は、(11c)のような埋め込み文が「か」で導かれている文に対し、83.9%という高い割合で、*yes/no* 疑問文として解釈して答えを与え、同様に 82.1%という高い割合で *wh* 疑問文として解釈した人形の答えに対し「不適切」という判断を下す、ということが分かった。4 名の幼児から、このような「～か～か」文に対して、一貫して、*wh* 疑問文として解釈したかのような反応(「ぶどう。」)が返ってくるとともに、そのような人形の答えに対しても「適切」であるとの反応が得られた。また、1 名の幼児からは、「～と～か」文に対して、一貫して *yes/no* 疑問文として解釈したかのような反応(「うん、言ったよ。」)が返ってくるとともに、人形の「イチゴだよ。」の答えに対しても「不適切」であるとの反応が得られた。この点については次節で簡単に議論するが、幼児から得られた大部分の反応が *wh* 島制約に従った反応であるという発見が弱められるわけではないと考えられる。

4.　「誤答」に対する分析

以上、本論文では、普遍文法を反映した属性と考えられる *wh* 島制約の知識が、観察しうる最初期から幼児の言語知識に含まれているか否かについて、予備的な実験調査を実施した。本研究では、Otsu (2007)による先行研究が、日本語を母語とする幼児に *wh* 島制約の知識があるかどうかという点に直接答える実験デザインにはなっていない点に着目し、その点を改善した調査を実施した。本研究は、獲得研究において、調べようとしている理論的性質の本質を正しく認識することの必要性を

示唆したものと解釈することができる。

本実験の調査方法は、本質的には「Question after Story」で、全ての質問に関して、まず幼児に対して質問を行い、幼児は質問に回答する。そして、幼児が答えた後に、さらに恐竜の人形に対しても同じ質問を行い、幼児はその人形の答えに判断を与える。したがって、通常の真偽値判断法(truth-value judgment task)とは異なり、連続して判断のみを行うわけではなく、判断を行う前に、必ず与えられた質問（*yes/no* 疑問文あるいは *wh* 疑問文）に自らが答えることが求められるという特徴がある。

今回の調査の結果、調査に参加した幼児達のうち、ほぼ大多数の反応において、本実験の主要な文となる「ゾウさんは何が好きかお父さんに言ったかな？」という質問に対し、幼児は、（大人と同様に正しく）「うん、言ったよ」と答え、人形の「ぶどう」という答えについては（大人と同様に正しく）「不適切」であると判断している。先に述べたように今回の実験においては、まず幼児から答えを引きだし、次に人形の答えについて、それが適切な答えであるかどうかについても判断させていることから、この実験結果は、幼児の知識を二重に確かめつつ引き出しており、極めて正確なものであるといえよう。本実験で得られた結果は、Otsu (2007)による先行研究よりははるかに説得力を持って、幼児に *wh* 島制約の知識があるということを示すことができたと考えられる。

さらに、本研究の結果では、少数の幼児からではあるが、興味深い「誤答」が、一定の一貫性を持って、複数の幼児から得られている。それは、上記の本実験の主要な文である「ゾウさんは何が好きかお父さんに言ったかな？」に対し、（「誤って」）「ぶどう」と子どもが答え、人形の答えにも「ぶどう」に対しても（「誤って」）適切であると判断しているのである。まずは、幼児の発話として、次に人形の答えの真偽の判断として、二重に示していることから、それは「理由のある誤答」であると考えることができる。そして、その結果は、単純に判断すると、幼児がこの文を *wh* 疑問文として解釈しており、しかも、*wh* 島制約に違反しているとも考えることもできうる。

しかし、先に述べたように、大多数の幼児が、他の場合については大人と同様の判断をしており、かつ、あるひとつの実験文ならびに文脈提示のときのみに一貫して観察される。このことから、これがいわゆる文法知識そのものに関わる問題ではなく、この「誤答」が、真偽値判断法の実験手法にある潜在的問題に関わる可能性があることを指摘したい。

問題となった実験文とその文脈提示を含むセットを再度みてみよう。

(13)　典型的な会話：「誤答」の場合

実験者：　（お話をした後に）今のお話わかったかな？じゃあまずたくちゃん（幼児の名前）に聞くよ。おさるさんとゾウさんは、ホットケーキを食べたかな？

幼児：　食べてない。

実験者：　じゃあ、恐竜くんにも聞いてみるね。恐竜くん、おさるさんとゾウさんは、ホットケーキを食べたかな？

恐竜：　うん、食べたよ。

実験者：　恐竜くんの答え、合ってたかな、変だったかな？

幼児：　（×を指さす。）

実験者:　よくできたね。じゃあまた、たくちゃんに聞くよ。おさるさんは、何が一番好きとゾウさんに言ったかな？
幼児:　イチゴ。
実験者:　じゃあまた、恐竜くんにも聞いてみるね。恐竜くん、おさるさんは何が一番好きとゾウさんに言ったかな？
恐竜:　イチゴだよ。
実験者:　恐竜くんの答え、合ってたかな、変だったかな？
幼児:　（○を指さす。）
実験者:　よくできたね。じゃあまた、たくちゃんに聞くよ。ゾウさんは、何が一番好きかお父さんに言ったかな？
幼児:　ぶどう。
実験者:　じゃあまた、恐竜くんにも聞いてみるね。恐竜くん、ゾウさんは何が一番好きかお父さんに言ったかな？
恐竜:　ぶどうだよ。
実験者:　恐竜くんの答え、合ってたかな、変だったかな？
幼児:　（○を指さす。）

実は、この三つの質問からなる最初の二つは、提示されたお話の内容について、人形が正しく理解しているかを試すものである。このとき、幼児に判断が求められているのは、内容に関する「真偽」の判断である。ところが、最後の一つで試されているのは、提示された質問に対しての人形の答えが、「答えの形式」として適切なものかどうかである。すなわち二つのタイプの質問、「提示された内容がと怪獣さんの答えが内容的に一致しているか」と「人形が *yes/no* 疑問文を *wh* 疑問文としてではなく、『はい/いいえ』のいずれかで答えることができるか」が、この順番で幼児に与えられる。

更に、このとき、人形の答えとして『誤って』示される「ぶどう」は、まさに文脈の中で与えられた状況と合致している。このお話の中で食べられたものは、「ぶどう」であり、それは談話上、正しい内容である。「ゾウさんは何が好きかお父さんに言ったかな？」のような文において「ぶどう」のような答えは、上記でも述べた通り、成人の談話においては、*yes* の答えに後続して出てくることが可能であるという点において、全く不可能とは言えない。

そして、複数の幼児が、この状況の下でのみ、三つ目の質問において、前の二つの答えと同様にお話の内容に関して答え、そして、その答えは、談話上、間違いとはいえないものを選んでいる。

先に述べたように、これらの結果が、幼児が、文法知識に問題があることを示しているとは考えにくい。 *wh* 疑問文と *yes/no* 疑問文を混乱していないことは、フィラー（filler）として与えている調査からも明らかである。例えば、「カッパちゃんは何を切ったかな？」という *wh* 疑問文を与え、幼児に答えてもらった後に、人形にも同じ質問を行い、人形は「うん、食べたよ」と答える。この場合には、幼児に判断が求められているのは、「真偽」ではなく、「答えの形式」となっており、それについては大人と同じように「正しく」答えることができるのである。

Nakayama (1996)をはじめ、真偽値判断法は、幼児が、提示された内容の真偽を判断しているのか、提示された文の形式とそこで聞かれた文の答えが合致しているのかを判断しているのか、それら

を分けて調査することが困難であることが指摘されている。今回の実験で一貫して見られた「誤答」も、文法上の要因によるものでなく、幼児が、実験上、二種類の答えについて判断することが求められている（すなわち最初の二つは、内容について正しい名詞句を選択し、最後の一つは、『正答』として「はい」あるいは「いいえ」と答えればよい）ことを意識しない限り、それまでの答え方と同じ（この場合は与えられたお話の内容についての）タイプの形式で答え、幼児は与えられた文脈と談話に基づいて「正しい」内容を選ぶと考えることができる。

このことは、今回の実験者の観察と矛盾しない。幼児の中には、「～かお父さんに言ったかな？」というタイプの問いに対し、「言ったよ。アンパンマン。」という答えを返す場合があることも観察されている。

異なるタイプの問題について、前の答え方と同じ答え方をし続けるのは、動作法（Act-Out Task）での“Bird in Hand Phenomenon”にも通ずる。幼児の傾向として、手にもったおもちゃを持ち続ける実験上の特徴のひとつは、真偽値判断法においても、いったん答える方法を決めたらそれを続け、同じ答え方を続けても、談話上、十分に、その答え方でもよいという範囲にあるのであれば、幼児は、判断に用いるスペースを談話まで広げ、結果的に、大人の文法としては『誤った』答えを選ぶ。

「いいえ」（No）と判断するに十分な材料が実験の場になければ、幼児は、「はい」（Yes）を選ぶとする Plausible Denial/ Plausible Dissent (Murasugi, 1988; Crain and Thornton 1998)の本質は、ここにもみられるといえよう。文字通り「はい」「いいえ」で答え「ればいい」ところを、前の答え方をひきずって、同じ答え方で談話上可能な広い範囲の中から答えを選ぶ特徴は、Plausible Ascent とでも称されるものかもしれない。[1]

5.　まとめ

本研究では、日本語を母語とする幼児が、*wh* 島制約の効果に関する知識を持つか否かに関する新たな実験調査を実施した。先行研究である Otsu (2007)の問題点を指摘した上で、それを改善した予備的実験の結果を報告した。本研究で得られた結果は、日本語を母語とする 3－5 歳児の中に、すでに *wh* 島制約の効果に関する知識が存在していることを示唆するものであると考えられる。日本語における *wh* 島制約が、UG の属性から導かれるのであれば、本研究の結果は、母語獲得に対する UG の関与に対して、日本語獲得からの新たな支持を与えるものであろう。

1. 今回の予備的実験では、「～か～か」文に対して、一貫して、*wh* 疑問文として解釈したかのような反応（「ぶどう。」）が返ってくるとともに、そのような人形の答えに対しても「適切」であるとの反応が数名から観察され、また「～と～か」文に対して、一貫して *yes/no* 疑問文として解釈したかのような反応（「うん、言ったよ。」）が返ってくるとともに、人形の「イチゴだよ。」の答えに対しても「不適切」であるとの反応も 1 名から得られている。これらの反応が、実験上の問題によるものであるのか、それとも幼児の言語知識から生じるのかは残された重要な課題である。これらの課題に取り組むために、またよりデータの精度をあげるために、再度、改訂されたデザインによる本実験を計画・実施予定である。

参考文献

Chomsky, Noam. 1973. “Conditions on transformations.” In *A festschrift for Morris Halle*, eds. Stephen Anderson and Paul Kiparsky, 232-286 New York: Holy, Rinehart and Winston.

Crain, Stephen, and Rosalind Thornton. 1998. *Investigations in Universal Grammar: A Guide to Experiments on the Acquisition of Syntax and Semantics*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.

de Villiers, Jill, Tom Roeper, & Anne Vainikka. 1990. “The acquisition of long-distance rules.” In *Language processing and language acquisition*, eds. Lyn Frazier and Jill de Villiers, 257-297. Dordrecht: Kluwer.

Murasugi, Keiko. 1988. “Structural and Pragmatic Constraints on Children’s Understanding of ‘Backwards Anaphora.’” *UConn Working Papers in Linguistics* 2: 40-68.

Nakayama, Mineharu. 1996. *Acquisition of Empty Categories.* Tokyo: Kuroshio.

Otsu, Yukio. 2007. “*Wh*-island in child Japanese.” Paper presented at Keio Workshop on Language, Mind, and the Brain. Keio University, March 18, 2007.

Richards, Norvin. 2008. “*Wh*-questions.” In *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, eds. Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito, 348-371. New York: Oxford University Press.

Watanabe, Akira. 1992. “Subjacency and S-structure movement of *wh*-in-situ.” *Journal of East Asian Linguistics* 1:255-291.

Appendix: 今回の予備実験で用いられたお話とテスト文

（注）　実際に提示された順序は、以下とは異なる。

A.　(Filler)

ライオンさんとかっぱちゃんが、お料理の練習をしています。ライオンさんは、お魚を切ろうかなと思いました。でも難しそうなので、ニンジンを切ることにしました。かっぱちゃんは、お料理が苦手なので、ライオンさんがニンジンを切るのを見てるだけにしようかなと思いました。でも、ライオンさんを見ていたらやってみたくなったので、かっぱちゃんは大好きなキュウリを切ってみました。

（質問 1）　ライオンさんは、お魚を切ったかな？
（恐竜の答え: いいや、切らなかったよ。）

（質問 2）　かっぱちゃんは、何を切ったかな？
（恐竜の答え: うん、切ったよ。）

B.　(Filler)

パンダさんとペンギンさんは、お絵かきをして遊ぶことにしました。パンダさんは、バスの絵を描こうかなと思っています。でも、新幹線の方がかっこいいので、新幹線の絵を描くことにしました。ペンギンさんは、絵を描くのが苦手なので、パンダさんが新幹線を描くのを見てるだけ

にしようかなと思いました。でも、パンダさんを見ていたらやってみたくなったので、ペンギンさんは大好きな飛行機の絵を描いてみました。

（質問 3）　パンダさんは、バスの絵を描いたかな？
（恐竜の答え: いいや、描かなかったよ。）

（質問 4）　ペンギンさんは、何を描いたかな？
（恐竜の答え:うん、描いたよ。）

C.　(Target Trial)

今日は、ウサギさんがカエルさんのおうちに遊びに来ました。ポケモンの絵本とアンパンマンの絵本があったけど、2 人は、一緒にアンパンマンの絵本を読むことにしました。カエルさんはウサギさんに「誰が一番好きなの？」と聞きました。ウサギさんは、「食パンマン！」と答えました。そこへ、カエルさんのお母さんがお買い物から帰ってきました。お母さんは、カエルさんに、「誰が一番好きなの？」と聞きました。カエルさんは、ちょっと恥ずかしかったので、ないしょにしようかなと思いました。でも、お母さんがおやつにリンゴをくれたので、「アンパンマン！」と教えてあげました。

（質問 5）　ウサギさんとカエルさんは、アンパンマンの絵本を読んだかな？
（恐竜の答え: うん、読んだよ。）

（質問 6）　ウサギさんは、誰が一番好きとカエルさんに言ったかな？
（恐竜の答え: 食パンマン。）

（質問 7）　カエルさんは、誰が一番好きかお母さんに言ったかな？
（恐竜の答え:アンパンマン。）

D.　(Target Trial)

今日は、おさるさんがゾウさんのおうちに遊びに来ています。テーブルの上に、おやつのホットケーキと果物があったけど、2 人は一緒に果物を食べることにしました。ゾウさんはおさるさんに「何が一番好きなの？」と聞きました。おさるさんは「いちご！」と答えました。そこへ、ゾウさんのお父さんがお仕事から帰ってきました。お父さんは、ゾウさんに「何が一番好きなの？」と聞きました。ゾウさんは、ちょっと恥ずかしかったので、ないしょにしようかなと思いました。でも、おみやげに電車のおもちゃをもらったので、「ぶどう！」と教えてあげました。

（質問 8）　おさるさんとゾウさんは、ホットケーキを食べたかな？
（恐竜の答え: うん、食べたよ。）

（質問 9）　おさるさんは、何が一番好きとゾウさんに言ったかな？
（恐竜の答え: いちご。）

（質問 10）　ゾウさんは、何が一番好きかお父さんに言ったかな？
（恐竜の答え: ぶどう。）

言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約：日本語獲得に基づく実証的研究

村杉　恵子

1. はじめに

20 世紀前半まで、言語学は、「英文法」、「日本語文法」というように個別言語の特徴に関して体系化が進められ、また、幼児は、母語を白紙の状態から学習するとする思想が主流であった。しかし、20 世紀中盤、言語学は大きな変革を遂げる。それは、言語獲得に関する疑問に始まる。人は、なぜ、そして、どのようにして言語を獲得するのだろうか。

幼児が言語を話すのは、一見、とても平凡なことに見える。しかし、人は、親の人種や社会的地位、あるいは知能指数に関わらず、生後わずか数年で、何語であっても生まれ育つ環境の文法を、母語として獲得する。幼児は、親から具体的に教わらずとも、はいはいをし、つかまり立ちをし、そして歩き出す。言語もまた、当たり前のように獲得される。それぞれの個人が置かれた言語環境は多種多様であるにもかかわらず、幼児は、本質的には均一の文法を自然に獲得し、聞いたことのないような文であっても発話するようになる。人は、なぜ、短期間に等質の言語知識を獲得できるのだろう。

生成文法理論は、脳科学の発展にも裏付けられ、人間科学の一部として確立される。人間言語に共通の普遍文法が実在することや文法獲得にも普遍的特徴があることが明らかにされている。幼児は、どの言語を母語としようとも、共通する段階を経て母語を獲得する。年齢に個人差はあるが、その段階は、6 ケ月ごろから 8 ケ月ごろには喃語期、10 ケ月から 1 歳には一語文が発話、二語文があらわれるのは 20 ケ月から 24 ケ月であるといわれている。

しかし、一見、文形式をもたないように見える発話においても、そこには実に不思議な人間の言語能力が垣間見られる。そして、膠着語であり主要部後置型である日本語だからこそ見えてくる幼児の言語特徴もある。

たとえば、日本語は、韓国語、ルーマニア語などと同様にオノマトペの豊かな言語である。日本語を母語とする幼児は、時制が文にあらわれない 1 歳前後の段階でオノマトペを

発話するようになるが、それはいわゆる親の発話を模倣したものではなく、自発的で自然発生的なものも少なくない。

自然発生的に生じた擬態語や擬声語が、裸動詞として用いられた後に「する」を伴って動詞句として表れるようになったり、裸名詞として用いられた後に指小辞(dimunitive)「ちゃん」を伴い名詞句として表れる段階が在ることは、日本語の母語獲得で広く観察されている。橋本知子氏（南山大学・大学院研修生）は、今回のプロジェクトの中で、日本語を母語とする幼児（あっくん）の観察記録の中からオノマトペの獲得過程を精査し、親の使ったことのない「こんこんこん」というオノマトペを、当初「かなづち」について「こんこんこん、ない（かなづちがない）」というように用いはじめ、しばらくすると「こんこんこん　ちゆ」(私はかなづちで（なにかを）打ちたい)と動詞として用いるようになったという発達段階を報告している。ここで注目されるのは、観察者(母親)が、一度もインプットとして与えていない擬態語や擬声語を幼児が自発的に発話している点である。自らの力で、音と意味を結びつける。

橋本氏は、さらに、親の発話の模倣によって擬態語が産出されるケースでも、その後、同擬態語が創造的に用いられるようになることも観察している。たとえば、母親が一度だけ (「あっくん」1;09 の時期)ケチャップを「ちゅんちゅんちゅん」と（食物に）かける動作を伴って発話をした後のことである。自分がぶりっこのような母親語を発してしまった、と記憶するたった一度の自分の発話の後に、あっくんは、同様に、ケチャップをつけるとき、「ちゅんちゅんちゅん」と産出しはじめた。そして、その後、ケチャップのみならずマヨネーズを食物にかけるとき (1;09), マーガリンを塗るとき（1;11）、名古屋名物「つけて味噌かけて味噌」のチューブ入りの甘味噌をかけるとき（2;00）、そして醤油をかけるとき（2;03）と、「液状の調味料」をかけるときに「ちゅんちゅんちゅん」を自発的に使用を拡張させたことを橋本氏は観察している。そして、その一方で、同幼児は、自発的に、粉チーズ、塩、こしょうなどの「液状ではない粉状のもの」を（食物に）かけるときには、「ちゃっ、ちゃっ、ちゃっ」と、異なる音形をもった表現を用いたとも観察している。この橋本氏の観察は、幼児が共通項をもつ意味を同じ音で表現し、共通項をもたない意味は別の音で表す力を、幼児自らが示すと分析されるだろう。

また、橋本氏の観察記録には、幼児の自発的な擬態語や擬声語にも多義性があり、単純に、語から語への類推でつくられているのではないと考えられる例もある。たとえば「あっくん」は、1;07 から 1;09 までは、「ぶーぶ」という語を、コップや飲み物、父親のビ

ール、お母さんのコーヒーなどの「液体」、あるいはその種の液体を「飲みたい」という（自らの）願望と・命令のいずれかのみについて用いていたのに対して、1;9 ごろからは、車やバス、ベビーカーなどの「車輪のついた乗り物」、あるいは、その種の車に「乗りたい」という意味と併用するようになったと橋本氏は観察している。この観察は、意味的に関連のない「液体」と「車輪のついた乗り物」が、同じ音形（「ぶーぶ」）として、幼児によって、自発的に、そして多義的に表されている例として分析される。

2013 年 5 月にロンドン大学で開かれた擬態語・擬声語に関するワークショップにおいては、擬態語や擬声語とは、ちょうど人が概念を自由に絵画に描写するように、概念を音として言語化して表現する方法であり、言語のみに特化した仕組みではないとする主張がオランダ・マックスプランク研究所の研究者を中心に活発になされた。

しかし、一見したところ文法とは異なる性質をもつように見える擬態語や擬声語であっても、 親の模倣のみで産出されるものでもなく、類推のみによってつくられているのでもない。また、親が一定の量のインプットを与えるからこそ産出されるものでもない。幼児は、自発的に、自分の心（mind）の中で、音と意味を独自の方法で結びつけ、大人の語彙へとつながる道を、自らの生得的に与えられた言語獲得装置に基づいて、つくる。人間の言語能力の一部には、音と意味をつなげる文法の素があることが、擬態語・擬声語の事例がからみてとれ、そこには、言語としての仕組みが見えるのである。[1] (Murasugi 2013)

幼児の生成する文が、単なる模倣ではないことは、幼児が共通して産出する「大人の文法では許されない文」の存在からも示される。日本語を母語とする幼児は、不思議なことに、言語獲得の過程で、大人の文法とは異なる文を(1)のように産出することがある。

(1)　a. 黒い*のクック（＝黒いエナメルの靴）

b. 意地悪な*のおばちゃん (=意地悪なおばちゃん、シンデレラの継母)

c. ごはん食べてる*のバーバ (＝ごはん食べている象のババール)

d. うさちゃん食べてる*のにんじん（＝うさぎが食べているにんじん）

[1] ここで紹介した橋本氏の観察は、本プロジェクトの研究成果としてまとめたものである。またここに概説した分析内容は、ロンドン大学で行われた Workshop on Mimetics (University of London, SOAS, 2013 年 5 月)において村杉が基調講演として発表した内容の一部である。

周囲から笑顔で受け止められては忘れられていく『幼児の誤用』は、常識的でわかりきったと思われる事柄であり、日常茶飯事のことのように見える。[2] しかし、親も言わない非文法的な文を、なぜ幼児は自発的に産出するのだろうか。何とも不思議な現象である。

自然科学は、一見、当たり前に見える事象について「これはなんだろう」と問う視点にはじまり、それが「なぜおきるのか」を問い、その解明にむけて理論的実証的研究を行う。大人も産出しない（幼児に入力されない）文を、なぜ幼児は、自発的に発話するのだろう。なぜ幼児の発話に文法的誤用が観察されるのだろう。

生成文法理論は、自然界の一部である人間の脳に在ると想定される言語を、いかなる機能が司るのかを解明しようとしている。その抽象的な機能が人間の多様な言語現象を説明しうるか否か、さらには、それがどのように説明しうるかを検証する試みである。生成文法理論の下では、文法とは、人間という種にのみ与えられた人間の生物学的な特性であると考えられている。

人間の生物学的特性は、経験に基づいてのみ学習されるものではない。人間は、ありとあらゆる言語の話者になりうる文法のメカニズムを持って生まれ出ずる。幼児は、生まれた環境の下で、直接的な言語教育を受けることもなく、生得的に与えられた言語獲得装置に従って、自ずと母語の文法体系を獲得する。言語経験の中で与えられる入力には個人差もあり、入力されるデータは、質的にも量的にも不十分であるにもかかわらず、生後わずか数年で個人差のない等質の母語文法に至る。その母語の文法に基づき、幼児は、自ら、誰からも聞いたこともないような文をすら、創造的に生成する。

母語の特性や言語にある普遍性（universality）や変異性（variations）は、いずれも基本的には普遍文法によって規定されている。世界の言語は、人間の生物学的特性を反映するものであるから、共通する特性を多く担う。しかし同時に、世界の言語は異なってもいる。そして言語間の相違もまた、人間言語の特性を反映する。Chomsky (1981)は、文法体系は普遍文法の一部として生物学的に規定された「すべての言語に共通する原理」と「言語間の違い（言語の多様性）を制限するパラメター」から成ると考えている。人間言語の多様性は（複数の値を持つ）パラメターとして、人間の生得的な言語のメカニズムの中で規定されると考えられている。

---

[2]幼児の誤用は、さまざまなレベルにおいて起きうる。たとえば、構音について、2 歳前後の幼児が、「自分で」を「ぶんじんで」、「さかきばらゆうきくん」を「さきからばゆうきくん」といった具合に挿入や転換をする現象もよく知られているが、本稿では、いわゆる文法に関する「誤用」に焦点をおく。

本プロジェクトは、生成文法理論のもとで大人の文法を分析し、それに関連する幼児の言語獲得のプロセスを研究することで、人間の「心」のメカニズムが説明されうるかについて、理論と実証の両面から研究を行う共同研究である。本報告書(日本語版)においては、英語版の成果報告書（2013 年 9 月完成）をさらに推し進めた内容を、本プロジェクトの研究成果として概観する。特に、「原理とパラメターの理論」の枠組みで、日本語という言語の大人の文法と獲得段階を研究するからこそ見えてくる興味深い記述と分析を提示したい。

前章では、かきまぜ操作とその特性についての獲得、さらに *wh*-問文とその制約に関する研究を紹介したが、報告書最後の章となる本稿では、幼児の『誤用』から見える日本語の特徴を概観したい。

母語の特性には、わずか 1 歳程度といった早期に獲得されるものもある。たとえば、母語の語順や、項脱落（主語や目的語などの項が音形を持たずに表れることができる言語現象）といった特性は、母語に触れてまもなく獲得される。一方、幼児は、大人の文法では非文法的な、共通した『誤用』を自発的に生成する。

幼児の『誤用』とは、幼児は親も直接教えもしないのに、自らの普遍文法に基づいて、母語以外の言語のパラメター値を自発的に試した結果である可能性がある。それは、母語体系のもとでは『誤用』とされるが、普遍文法に規定された範囲にある（母語以外の）文法の特性が表れたものであると考えることもできる。本稿では、文法的な誤用は単なる『間違え』ではなく、「自然言語に存在する文法の範囲内で規定されうる形である」とする提案とその根拠となる議論を紹介する。

2.　small *v* に関する『誤用』から見る幼児の文法知識

本報告書では、岸本氏やならびに斎藤氏により、複合述語文の構造が詳細に扱われているが、幼児の獲得においても、複合述語文は興味深い諸相を示す。

幼児は small *v* の構造そのものは、かなり早い段階から「する」などの動詞としてあらわすと考えられるが（Murasugi and Hashimoto 2004a）、動詞の活用として大人と同じ音形をもつようになるまでには時間がかかる。

自他交替に見られる誤用は 日本語を母語とする 2 歳前後から 4 歳頃の幼児に広く見られ、日本語獲得の中間段階に見られる代表的な現象である。(2)では、使役の意味を表す動詞や他動詞が自動詞として使われている。（発話の後の（　）内は意図された意味を表す。）

(2)　子ども：お父さん、膨らんで。（お父さん、風船を膨らませて）
　父親：膨らんでじゃないでしょ、膨らましてでしょ。
　子ども：ふくらんで。　（膨らませて）　（鈴木 1987）

これは、子どもが父親に風船を膨らませてくれるよう頼む状況での発話を記述したものである。父親は、動詞の形式が子どもの意図を表す動詞形ではないことを伝え、使役形「膨らませる」を明示的に教えるが、子どもはこの直接否定情報にもかかわらず、『誤った』非対格動詞「ふくらむ」を命令形の形式で産出し続けている。

この観察は、幼児の産出に誤用が在ることを記述しているに留まらない。幼児は、親から否定情報を直接的に与えられても、一定の時期が来なければ即座には修正できないことを、発話の状況とともに記述する極めて優れた観察記録である。

同様の『誤り』は 2 歳頃から 4 歳頃の他動詞と自動詞の関係においても見られる。

(3)　子ども(3;11): おとうちゃん、まど　あいて。（お父さん、窓を開けて）
　父親 ：　窓開けてだろ？
　子ども:　うん、まど　あいてよ。（うん、窓を開けてよ）　（大津 2002）

(3)では、子どもが父親に窓を開けるように頼んでいるが、子どもは他動詞の「あけて」（開ける）の代わりに、非対格動詞の命令形「あいて」（開く）を産出している。

実のところ、幼児が自動詞と他動詞を混同するのは日本語特有の現象ではない。たとえば、Bowerman(1974)と Figueira(1984)は、英語やポルトガル語を母語とする幼児が使役動詞や他動詞を自動詞で代用する誤用をそれぞれ報告している。

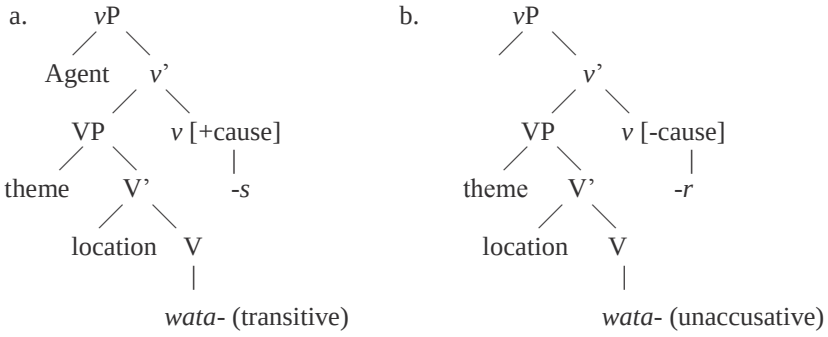
(4)　a. You can drink me the milk
　b. (･･･)　este balance　vai　te　cair
　　this　swing　go　you　fall　‘This swing is going to fall you.’

(4a)では子供は母親に牛乳を飲ませてくれるよう頼んでいるが「誤って」*drink* が使われており、(4b)では「落とす」とすべきところで「落ちる」に相当する動詞が使われている。但し、日本語の場合膠着語であることから、幼児言語で「させ」「せ」「え」等の[±cause]

を具現化する束縛形態素が落ちることが、明確に見てとれるのである。

ではなぜ、幼児は、(2)-(3)のような発話をするのだろう。大人の日本語で、他動詞と非対格動詞は、(5)に示すように異なった接尾辞が伴う形式を持つ。Murasugi and Hashimoto (2004a)ならびに Murasugi (2012)では、この動詞句類について、Larson (1988)、Hale and Keyser (1993)、Chomsky (1995) に従い VP−Shell 構造を採用し、膠着語特有の（個別に習得される）動詞の接尾辞は *v*P の主要部に相当すると分析している。(5a)で *v* [+cause]は -*s*、(5b)では *v* [-cause]は -*r* として具現化されている。

(5)



では、日本語を母語とする幼児は、なぜ、自動詞とすべきものを他動詞の形で、あるいは他動詞とすべきものを自動詞の形で産出するのだろか。Murasugi and Hashimoto (2004a)、Murasugi, Hashimoto and Fuji (2007)ならびに Murasugi (2012)では、日本語の獲得段階に見られる他動詞（使役動詞も含む）と非対格動詞の交替について、先行研究に蓄積されたデータに加え、独自の縦断的研究に基づき、動詞獲得のいくつかの段階とその過程で広く観察される『誤り』について記述した。そして上記の VP−Shell 分析を与えることにより、機能範疇 *v*（small v）は言語獲得早期に獲得されるが、形態を習得するのに時間（年月）がかかるため、幼児はある段階で非対格動詞を他動詞として用いたり、あるいは逆に他動詞を非対格動詞として用いたりすると説明している。すなわち、幼児の日本語に広く観察される(2)-(3)のような『誤り』は、 主語に意味役割を与える *v* が無標の値としてゼロ形態素と仮定されることが一因である提案している。

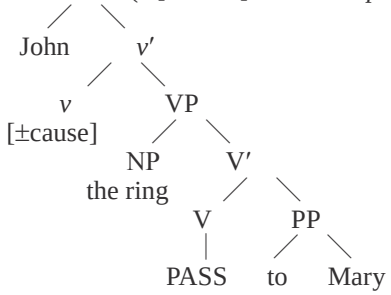
この幼児の言語獲得の中間段階にみられる『誤用』は、実は他の言語においては文法的であり、人間言語の多様性を表す証しともなる。大人の英語において、他動詞と非対格動詞はしばしば同じ音形を持つ。

(6)　a. John passed the ring to Mary

　　b. The ring passed to Mary

もしこれらの項構造が VP-Shell 構造として(7)のように表されるとすれば、この言語では *v* は音形を持たない“ゼロ形態素”として表れると分析される。すなわち、(6a)では *v* は[+cause]、(6b)では[-cause]の素性を持つが、いずれも音形を伴わない。その結果、*v* [+cause]+PASS も *v* [-cause]+PASS も同形の *pass* として具現化される。

(7)　*v*P　(*v* [+cause] + PASS = *pass*, *v* [–cause] + PASS = *pass*)



このように考えると、自他交替に関する幼児の『誤り』は、他動詞と非対格動詞が同じ音形によって表される英語のような言語の特徴を示すものであり、日本語以外の言語の一特徴が、幼児の言語発達段階に顕在化したものとして考えることができる。この事例は、幼児の動詞の『誤用』が、他言語において実際に可能な形式として具現化されうることを理論的に示唆するものであろう。

3.　時制に関する『誤用』から見る幼児の文法知識

3.1. 主節不定詞現象

前節に示したように、機能範疇の *v*（small v）が音声的にどのように具現するかを獲得するには時間がかかる。しかしそれ以前の段階において、幼児は、動詞とその屈折（活用）に関し、大人とは異なった形を用いる。

「主節不定詞現象」は、言語獲得理論において広く研究されてきた幼児の『誤用』の一つであり、1 歳から 3 歳頃の幼児が時制を伴わない動詞形式を主節内で使う現象である。フランス語、オランダ語、ドイツ語などでは不定詞が、英語では裸の動詞が、主節内で表れる。

(8)　a. Dormir　petit bébé.
sleep-INF　little baby
'Little baby sleep.'　(Daniel、フランス語：1;11)

b. Earst　kleine boekje lezen.
first　little　book　read-INF
'First (I/we) read little book.'　(Hein 、オランダ語：2;6)

c. Papa have it.　(Eve, 英語：1;6)

かつて、言語獲得研究史において、幼児の主節不定詞（Root Infinitives）の現象はすべての言語において観察されるわけではないとされてきた。空主語（pro）を許さない英語のような言語においては主節不定詞現象が存在するが、空主語を許すイタリア語のような言語では主節不定詞現象は見られないと議論する論文が発表され、空主語言語か否かが、主節不定詞の有無と強い相関関係を持つとする提案がなされたこともある（Guasti 1993/1994 等）。日本語もその例外ではなく、日本語のように空主語を許す言語においては主節不定詞現象が存在しないとする仮説（Sano 1995 等）も提案されてきた。

このような提案に対して、Murasugi, Fuji and Hashimoto (2007), Murasugi and Fuji (2009), Sawada and Murasugi (2011), Murasugi and Nakatani (2011)などでは、すべての言語の初期の言語獲得の段階には、時制を欠く動詞を産出する段階があり、それが「主節不定詞」現象に相当する現象と考えられ、当該の言語が空主語言語か否かは、その言語の主節不定詞の有無とは直接的な相関関係がないとする提案を発表してきた。[3]　日本語ではヨーロッパ言語の不定詞形に相当する形は顕在化しないが、日本語獲得においても、いわゆる主節において定形ではない動詞が表れる「疑似主節不定詞」が存在する。

さらに、日本語という膠着語であり格標示の豊かな言語の獲得を詳細に検討すると、「（疑似）主節不定詞」と称される現象が、実は時制に関する二つの独立した問題に起因するこ

[3] 本論で概観する主節不定詞現象についての詳細は、南山大学言語学研究センターのホームページにも一部掲載されている。Murasugi (2009a), Murasugi and Watanabe (2009), Murasugi, Nakatani and Fuji (2010), Sawada, Murasugi and Fuji (2010),Murasugi, Fuji and Hashimoto (2007), Murasugi and Fuji (2009), Sawada and Murasugi (2011), Murasugi and Nakatani (2011)等を参照されたい。これらの研究は南山大学大学院人間文化研究科言語科学専攻、南山大学言語学研究センター、そして国立国語研究所の活動の賜物である。本現象について共に研究を深めてきた仲間に感謝する。特に Luigi Rizzi 氏、Amritavalli 氏、Jayaseelan 氏、Diane Lillo-Martin 氏、William Snyder 氏、Bonnie Shwartz 氏、Kamil Deen 氏、Jonah Lin 氏、Peter Sells 氏、冨士千里氏、中谷友美氏、橋本知子氏、渡邊恵理子氏、澤田尚子氏、瀧田健介氏、河合道也氏、岸本秀樹氏、多田浩章氏、斎藤衛氏との議論の時間はかけがえのないものであった。この場を借りて、深い感謝の意を表する。

とがわかる。1 歳代のそれは Rizzi (1993/1994)の提案するように、時制節が投射されていない時期である。一方、2 歳代のそれは、時制節は獲得されているものの、母語の時制素性の詳細が決定されていない時期であり、このとき主語への主格付与において『誤用』が表れる。これは、Schütze and Wexler (1996)の述べるところの AGR/TNS Omission Model（ATOM）仮説によって説明される現象である。以下、幼児の言語獲得の初期段階に観察される主節不定詞現象について概観する。

3.2. フェイズで「切り取られた」構造を持つ獲得段階

幼児の初期の動詞「主節不定詞」は、いわゆる不定詞形を持たない（たとえばギリシャ語）言語においても別の形式を伴って表れる。言語差を超えた特徴として、主節不定詞は、要求や願望などを表すコンテクスト（Modal Context）において表れることが多く（Modal Reference Effects）、また出来事を表すイヴェンティヴ動詞が時制や一致を欠いた形式で産出される（Hoekstra and Hyams 1999）。同時期には幼児の「文」には空主語が多く表れ、補文標識（Complementizer）に関連する要素や助動詞や主格といった時制に関する機能要素も表れない。

日本語の「（疑似）主節不定詞」の「一層目」の段階は、1 歳代という早期に表れる。この段階では、日本語でも述語は時制などを表す形態を欠き、動詞の形式はいわゆる過去形の「－た形」で表れることが多く、形容詞は一貫して非過去（現在）の形式で表れる（Murasugi and Fuji 2009, Murasugi, Nakatani and Fuji 2010 等。）.

たとえば CHILDES コーパスにおさめられている野地コーパス（野地(1973-77)に基づく日本語を母語とする幼児「スミハレ」（男子、1948 年生まれ）の日記データ（縦断的自然発話観察記録））を詳細に検討すると、1 歳 6 ヶ月頃はほぼすべての動詞がイヴェンティヴなものであり、「－た形」（典型的には過去を表す活用形）で表れる。幼児の「－た形」は過去を表すだけでなく、(9)のように意志や要求、(10)のように結果相や進行相を表す場合もある。

(9) a. あっち　いた (1;6)　（あっちに行って/行け）

b. ちー　した (1;7)　（ちー（おしっこ）したい）

(10)　a. ばば　ついた (1;6)　（ばば（糸くず）が（指に）ついている）

　　b. ちーした (1;7)　（（けいこちゃんが）ちー（おしっこ）している）

この時期には格助詞や動詞･形容詞の時制の屈折､補文標識に関する要素が観察されず、発話者の要求や意志を表すコンテクストで主節不定詞が用いられる｡｢Modal Reference Effects｣が日本語においても認められるなどの点において、他言語の「（疑似）主節不定詞」の特徴と性質を一にする｡（疑似）主節不定詞が動詞の 100 パーセントを示したのは 1 歳 6 カ月頃であり、その後は、「ちゃった」形や「ちょうだい」形なども自然発話において併出する。

Rizzi (1993/1994)は、この時期の幼児特有の現象の説明として、TP 構造よりも下の位置で切り取りが行われるとする刈り取り仮説（Truncation Hypothesis）を提案している。大人の文は CP 構造を持つのに対し、幼児は、投射を途中で中断する段階があるという仮説である。この仮説は、主節不定詞の表れる時期に、疑問文（C 要素に関する項目）や助動詞（T 要素に関する項目）が表れず、また空主語が多く表れる事実も統一的に説明する。

日本語についても説明力を持つ。この時期、日本語においてもまた、時制を表す動詞の活用形のみならず、形容詞も活用形が一つ以上は表れることがなく、（疑似）主節不定詞と共起して疑問詞（C 要素に関する項目）や「が」格の主語が表れる事はない（Murasugi, Fuji and Hashimoto 2007, Murasugi, Nakatani and Fuji 2010 などを参照されたい）。

また、「もう」「まだ」「あした」等の時制に関する副詞も同一文内で主節不定詞とは共起しない。[4]

(11)　a. もう。(1;05, 1;06)

　　b. もう、ない。(1;09)

　　c. まだ。（1;11）

　　d. まだ、ぱん。(1;11)

　　e. また、あた。　（あした）　(1;01)

この種の副詞が、同一文内で動詞と共起しはじめるのは、非過去形（－る形）の形式が

[4] ここでの分析は、主節不定詞が表れる同時期に、時に関する副詞がどう表れるかをみることがその時の幼児の構造を調べるのに有効である可能性があるとして岸本秀樹氏（2011 年 12 月 17 日、p.c.）によるご指摘に基づくものである。中国語では、必ずしも、時制と副詞は顕在的に呼応した形式であらわれないことから、これについては今後も岸本氏とともに調査を続ける予定である。

異なる動詞において生産的に表れ始める 1 歳 11 カ月頃からである。このとき、副詞の音声的具現化は、（12b）に示すように、大人のそれとは一致しないことも少なくない。

(12) a. もう、つんだ。(＝すんだ) (コンテクスト : 便所ですむとこのように父に言う 1;10)
b. まだ、おちた。もっと、おちたよ。（コンテクスト：午前 7 時過ぎ、床の中にいて、キャラメルを落としたときに、いう 1;11)

『幼児の誤用』の中には、「同じ統語的範疇」内で『誤って』音声的・語彙的に具現化される場合が少なくないが、副詞もまた例外ではない。[5] 副詞が大人と同じような音形を伴って生産的に使用されるようになるのは、動詞の活用や主格が生産的に表れはじめる 2 歳以降である。

(13) a. やっとねんねした。 (2;2)
b. まだあいてないよ。 (2;1)
c. かあちゃん、おちゃ、もうないよ。(2;1)
d. いまさっきおったのくも、どこいった？ (2;5)
e. きのう、おふねがでなかったね。 (2;9)
f. きょう、なにゆったの？(2;7)

これらの事実は、（疑似）主節不定詞現象が、Rizzi(1993/1994)の述べるように、時制句の投射のない時期、より最近の分析では、フェイズ（phase）ごとに幼児が構造を切り取る段階と考える上での記述的な根拠となりうるだろう。

では、なぜ「－た形」が日本語の「（疑似）主節不定詞」なのか。興味深いことに、大人の文法において、この「－た形」は、過去のみならず「（さっさと）帰った！帰った！」といった命令形としても使われる。それは、イタリア語等で 強い命令形として不定詞が使用される現象に通ずる。また「－た形」は、非現実・未然（「もしも私が家を建てたなら」）、あるいは出来事の結果（「小さく切った大根」）といった形態も兼ねる。そして、「行ったり来たりする/した」というように時制に関して無指定の形態素としても用いられる。幼児は、

[5] この時期、いわゆる「*wh*-句」（「誰」「何」等）の補文標識に関連する要素も、疑似主節不定詞とは、同一文内で共起しない。ここで示された事実と分析については、村杉(印刷中)を参照されたい。

時制句を投射しない段階で、「不定形」としての「動詞の語幹＋た」の形式を、他の形態の代用形として用いていると考えることができる。

さらに Murasugi, Nakatani and Fuji (2010)ならびに Murasugi and Nakatani (2011)は、幼児言語の対照言語学的調査に基づき、いわゆる「（疑似）主節不定詞」の動詞の形態は、世界の言語を三分化すると提案している。裸動詞（英語、スワヒリ語等）の場合、不定詞（ドイツ語、オランダ、フランス語等）の場合も、そして動詞の語幹にデフォルトの形態が代用形として付いた形式で表れる場合（日本語、韓国語、トルコ語、ルーマニア語、アラビア語、ギリシャ語等）である。この言語間の相違は、当該言語において、動詞の語幹がそれ自体独立した形態として成立しうるか否かの違い（Stem Parameter）と関係する。語幹がそれ自体では形態的に成り立たない[-stem]のパラメター値を選ぶ言語を母語とする幼児は、いわゆる「不定形」として動詞の語幹に（当該の大人の文法での）デフォルトの形態を代用形として付ける形式を産出し、わずか 1 歳という段階で母語の動詞形態の体系の特性を反映した（疑似）主節不定詞の形式を選択する。Murasugi (2009a)は、屈折や活用の豊かな言語の主節不定詞が、そうでない言語（たとえば英語）よりも早期に表れる事実を示した上で、Wexler (1998)の Very Early Parameter Setting（VEPS）の提案（語順や空主語などに関するパラメターは生後かなり早い段階で設定されるとの提案）の一部に Stem Parameter も含まれ、形態的特徴は、わずか 1 歳で設定されるパラメター値の一つであると提案している。

3.3.　T(ense)の素性が未指定の時期

アスペクトを示す「ちゃった」「て（い）る」などが 1 歳代に表れた後、2 歳前後には多様な動詞や形容詞に時制が付加されるようになる。この時期は、多くの言語で、（疑似）主節不定詞が随意的（optional）に観察され、かつ主語の名詞句に、属格や与格が『誤って』付与される段階でもある。

この時期について、Schütze and Wexler (1996)は、T(ense)の持つ素性（Agreement/ Tense）が未指定な段階であるため、文の主語名詞句が、主格以外の『誤った』格に伴われて（たとえば**My do it ,*Me want it* などのように）表れると分析する。

この時期が、時制が投射されていない時期だとは考えにくい根拠は Radford (1998)による指摘からも独立に示される。たとえば 2 歳以降の属格主語の『誤用』が表れる時期には、英語において、助動詞も同一文内に共起している。

(14) a. Oh, my *can't* open it by myself (Child 3, 2;6,)

b. Can our do it again? (Sophie 3;0)

「主節不定詞」現象がヨーロッパ諸語を母語とする２歳頃の幼児に随意的に観察される頃、日本語を母語とする幼児もまた、主語名詞句を主格のみならず、随意的に属格あるいは奪格で格標示する『誤用』を示す。その時期は、多くの言語で主節不定詞動詞と同時期に主語の格が『誤って』表れる時期とほぼ一致する。そしてそれは、 大人と同じ動詞活用形がみられた後である。

(15) a. もこちゃん *の ぎゅうにゅう *の ほしいだってさ

（もこちゃんが牛乳が欲しいんだってさ） (2;0)

b. わたし *に かたじゅけるから（わたしが片付けるから） (2;0)

この段階では、時制や補文標識に関する要素が表れる。紙面の関係で詳細は省くが、属格主語を大人の文法で許すインドに実存するドラヴィダ諸語の一部（たとえば Malayalam 語や Kannada 語）や、与格主語を許す大人の文法でスカンジナビア語などに見られる言語の特性と性質を一にすると考えることができる。

「（疑似）主節不定詞」現象は世界の多くの幼児言語に共通に見られる『誤用』である。一段階目のそれは幼児特有の構造に因るが、二段階目のそれは、おそらくドラヴィダ諸言語やスカンジナビア言語の大人の文法に相当する。幼児は、ドラヴィダ言語やスカンジナビア言語のパラメター値を試している段階にあると考えられる。

4. 「の」の過剰生成

4.1. 3 種類の「の」の過剰生成

日本語を母語とする幼児の『誤用』のひとつに、本章の冒頭(1)でも示したような「の」の過剰生成がある。日本語を母語とする幼児が、１歳頃から４歳頃の間に、(16)で示すような「の」の過剰生成をみせることは広く知られている。

(16) a. ほわし 大きい ***の** ほわし（=お箸） (2;1) (永野 1960)

b. まあるい ***の** うんち (2;0) (横山 1990)

c.　ゆうたが　あしょんでる　***の**　やちゅ　は　これ、これ。(ゆうた 2;3)

(16a)と(16b)は形容詞と名詞の間に「の」があらわれる例であり、2 歳前後に観察される。(16c)は連体修飾節と名詞の間に「の」あらわれる例であるが、このような複合名詞句は、2 歳から 4 歳の間に観察される。過剰生成された「の」の統語範疇については、長く言語獲得研究の分野で議論されてきた。

大人の文法では「の」には主に 3 種類あり、英語の*'s* に相当する属格の「の」、*one* に相当する代名詞の「の」、そして分裂文において前提節の主要部 *that* に相当する補文標識の「の」が存在する (Murasugi 1991)。

(17)　a. 山田**の**本（属格表示）

b. 赤い**の**（代名詞）

c. えみが初めてロブスターを食べた**の**はボストンでだ。（補文標識）

幼児が『誤る』不思議な「の」は何か。大人の文法に従って、日本語の第一言語獲得に関する研究史において、過剰生成の「の」が代名詞であるとする仮説、属格であるとする仮説、そして補文標識であるとする仮説が提案されてきた。

三つの仮説が乱立する根拠のひとつには､これらの仮説が依って立つ過剰生成の観察される記述（時期と特徴）が異なる点がある。過剰生成が観察される時期は長く、1 歳から 2 歳（永野 1960 他)と観察する論文もあれば、4 歳ですら見られる(Murasugi 1991 他)とする観察まである。この奇妙なほどに長い「の」の誤用について、Murasugi and Hashimoto (2004b), 村杉・中谷(2006)、Murasugi, Nakatani and Fuji (2009)においては、縦断的観察とコーパス分析を重ね、その結果、 単一の現象に見える 「の」の過剰生成が、実は三つの独立した原因によるものであるとする研究成果を発表した。本プロジェクトでは、「の」の過剰生成の問題を整理し再考を加えている。本節ではその研究成果を紹介する。

4.2.　補文標識仮説：関係節のパラメター(Murasugi 1991)

Murasugi (1991)は、2 歳から 4 歳の長期にわたる実験・観察的調査をもとに、過剰生成されている「の」は補文標識であるとする分析を提案し、過剰生成の原因は、世界の言語の連体修飾節構造の多様性にあると考えている。原理とパラメター理論のもとに、連体修

飾節構造のパラメターがあり、世界の言語には、補文標識をもつ連体修飾節の値を持つ言語と補文標識をもたない連体修飾節の値をもつがあると提案している。大人の文法において、英語などの多くの言語では補文標識をもつ連体修飾節（CP）が選ばれ、日本語や韓国語では補文標識をもたない連体修飾節（TP）が選ばれる。ところが、興味深いことに、後者の言語を母語とする 幼児は、日本語においても韓国語においても、補文標識を持つ連体修飾節（CP）を使い、自身の到達言語とは異なる連体修飾節を設定する段階がある。これが補文標識「の」が過剰生成される理由であると分析している。

複合名詞句が自然発話に観察され始めるのは 2 歳をすぎてからである。多くの言語獲得現象がそうであるように、複合名詞句も最初は一定の表現でのみ表れ、その場合は、複合名詞句全体が「まとまり」として固定表現されているため、「の」の過剰生成は見られない (Murasugi and Hashimoto 2004b)。(18)の段階では動詞は常に「(買って)くれる」であり、名詞は「プレゼント」に限定されている。

(18) a. とったんが　買ってくれた　プレゼント　だよ。(ゆうた 2;0)
b. これ、ユキちゃんが　くれた　プレゼント　なの。(ゆうた 2;0)

その後、連体修飾節が創造的に産出されるようになると、「の」の過剰生成が始まり、幼児によっては、遅くは 4 歳頃まで過剰生成を続ける。

(19) a. 枯れてる　*の　花　だよ。(ゆうた 2;2、屈折動詞＋「の」＋名詞)
b. ゆうたがあしょんでる　*の　やちゅ　は、これ、これ。
(ゆうた 2;3、修飾節＋「の」＋名詞)
c. これ　長い　*の　やちゅ　だね。(ゆうた 2;3、形容詞＋「の」＋名詞)

Murasugi (1991)では、東京や長野において、「の」の過剰生成について実証的に調査した上で、富山方言と韓国語の大人の文法と幼児の獲得に関して分析し、この 2 歳から 4 歳頃まで連体修飾節に観察される「の」が、補文標識であると議論している。

富山方言の大人の文法では補文標識は「が」、属格は「の」であり、韓国語では補文標識は *kes*、属格は *uy* である。富山方言と韓国語の子供の発話を観察すると、過剰生成されているのは補文標識「が・*kes*」である事が分かる。

(20)　a. アンパンマン　付いとる　*が　コップ　　(富山方言、ケン 2;11、Murasugi 1991)

b. Acessi　otopai　　tha-nun　　*kes　　soli　ya.　(韓国語、2-3 years old、Kim1987)

uncle　mortorcycle rinding-is　KES　soundis

'*Lit.* (This) is the sound that a man is riding a motorcycle.'

ここで過剰生成されている要素は属格ではありえない。属格は、富山方言では「の」、韓国語は「uy」であり、この時期の幼児が過剰生成しているのは、富山方言では「が」、韓国語では「kes」であるからである。

また、この要素が代名詞ではないことは、この段階の幼児は名詞的要素と名詞的要素の間に「大人と同様に」属格の『の』を挿入できていることから説明される。もし、この要素が代名詞であるのならば、「アンパンマン　付いとる　*が　」「Acessi otopai　　tha-nun　*kes」は、名詞句となることが予測される。「コップ」、「soli」がそれぞれ名詞的な要素であることから、もしこの要素が代名詞ならば、たとえば、富山方言を母語とする幼児が発話すると予測される名詞句は、「アンパンマン　付いとる　*が　の　コップ」となることが予測されるが、実際には幼児はそのようには産出しない。したがって、このとき幼児が過剰生成している要素は、代名詞ではなく、補文標識であると考えられる。その仮定にたてば、幼児は英語と(語順は異なるものの)同じ連体修飾節の構造を仮定していることになる。そのことは、世界の言語の(大人の文法における)連体修飾節には二種類あり、幼児が母語とは違う構造を仮定すると考えることにより、原理とパラメター理論の下で、過剰生成された「の」が何かだけではなく、なぜ、幼児が「の」を過剰生成するのかという謎が説明されうる。

ところが、Murasugi (1991)の仮説では、説明しきれない記述が残されていることを、Murasugi and Hashimoto (2004b)は GLOW in Asia (韓国：ソウル)において発表している。それは、永野(1960)の観察を支持する記述が得られたことによる。永野(1960)の観察するように、いわゆる過剰生成の「の」は二語文の段階（1歳代）から見られ、この段階では属格もTやCに関連した要素も、発話には顕在化していない。この事実は、補文標識説だけでは過剰生成の「の」をすべて説明できないことを示す。Murasugi and Hashimoto (2004b)は、永野(1960)の代名詞仮説は基本的に正しく、過剰生成の「の」は補文標識である場合に加え、1歳から2歳のそれは、代名詞の「の」が表れていると論じている。

4.3. 代名詞仮説

永野 (1960)は、 属格の「の」が 2 歳 2 ヶ月で表れ始める前に、(21)に示すように代名詞の「の」が表れ、同時に(22)に示すように過剰生成の「の」が観察されるとしている。

(21) a. 大きい**の**。(2;1)

b. ちっちゃい**の**。(2;1) (永野 1960)

(22) a. ほわし　大きい　***の**　ほわし（=お箸）　(2;1)

b. アムナちっちゃい　***の**　アムナ（=ハルナ）(2;1)　(永野 1960)

永野（1960）によれば、この「の」の過剰生成が見られる時期には、「代名詞の「の」のみが産出されており、当該の幼児は、属格の「の」を挿入されるべき場所では、一切属格を挿入しない。この事実から、永野（1960)は、この過剰生成の「の」は属格ではないと結論づける。

Murasugi and Hashimoto (2004b), 村杉・橋本(2006)は、永野(1960)とパラレルな発達段階が、橋本氏による観察により、日本語を母語とする「あっくん」にも見られることを報告し、永野(1960)の仮説が正しいことを示している。さらに、この代名詞仮説（ならびに補文標識仮説）は、Murasugi, Nakatani and Fuji (2009)において、中谷友美氏の行った「ゆうた」の縦断的観察においても裏付けられている。

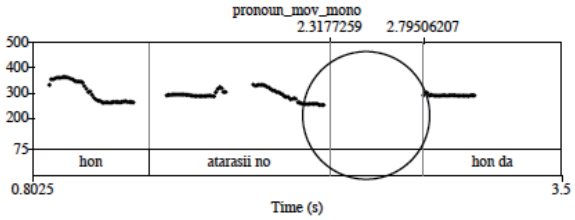
中谷友美氏の観察による日本語を母語とする幼児「ゆうた」は、本プロジェクトのデータベース作成の対象となった幼児でもある。この「ゆうた」もまた、言語獲得初期の過剰生成の「の」と指示的名詞句の間に、しばしポーズ（間）をおいて、属格のない時期に同様の発話をしている。このポーズ（間）の実在性は、PRAAT により証明されている。

(23) a. あっくん　ちいちゃい　**の**　こんこんこん。(2;4)

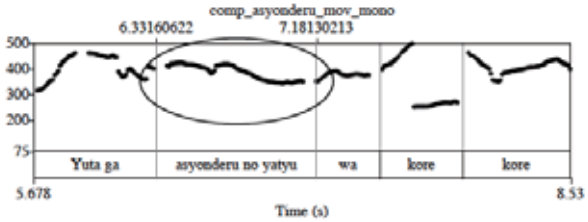
b. あっくん// (間) //ちいちゃい　**の**// (間) //　こんこんこん

(24)に示すように、この時期のゆうたの発話を PRAAT (Boersma and Weenink 2009)で分析すると、「の」とその後の指示的名詞の間に明らかなポーズ（間）がある事が分かる（図１）。

(24)　本、新しいの、本　だ。(1;10)

図 1


この結果は、この発話が 2 つの部分から成り立っている事を示しているものである。これは、2 歳以降に観察されるいわゆる複合名詞句内でおきる「の」の過剰生成とは異なる性質をもつ。2 歳以降で複合名詞句内の補文標識の「の」過剰生成の場合は、図 2 に示すように、このような「ポーズ（間）」は見られない。

図 2


ではなぜ、代名詞「の」が表れたあとに、ポーズ(間)があるのだろうか。Murasugi and Hashimoto (2004), 村杉・橋本(2006), Murasugi, Nakatani and Fuji (2009)では、1 歳から 2 歳にかけてみられる代名詞の「の」は文法上の誤用ではなく、2 語文の段階の子供の発話上（の限界）の特性を示す例であるとしている。この時期の子供はまだ修飾構造を完全に主要部と併合できないため、軽い名詞（代名詞「の」）を主要部にした名詞句をまず作って枠を作り、その後に指示的名詞を発話する。この現象は併合操作(merger)を獲得する上で、意味的内容を持たない(軽い)代名詞の「の」と名詞句をまず併合する段階があることを顕在化する現象であるとしている。

4.4.　属格仮説

Murasugi, Nakatani and Fuji (2009)では、1 歳から 2 歳に見られる「の」は代名詞、2 歳から 4 歳に見られる「の」は補文標識であるとする二つの仮説のみでは説明しきれない記述が残されていることを指摘する。それは、横山(1990)による観察が基本となる。

横山 (1990)の指摘するとおり、大人と同様に、名詞的要素と名詞句の間に「の」が（正しく）挿入される段階において、特定の形容詞の後にのみ、過剰生成の「の」が観察され

る段階が存在する。たとえば「ゆうた」は1歳１１ヶ月、野地氏による観察記録（「スミハレ」：CHILDES 収録）によれば2歳0ヶ月で、大人と同様に名詞的要素と名詞句との間に属格の「の」を挿入し、「お父さんの話」といった名詞句を使い始める。しかし同じ頃、特定の形容詞にのみ、「の」が挿入された名詞句が観察されるようになる。

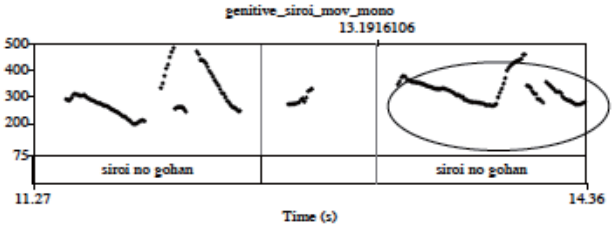
(25)　a. 新しい*の　紙 (ゆうた 1;11)

　　b. 白い*の　ご飯　(ゆうた 2;0)

　　c. 小さい*の　ぶうぶう　通った　よ。(スミハレ 1;11)

「ゆうた」の観察記録を PRAAT によって分析した結果、この場合、過剰生成の「の」と名詞句の間に、ポーズ（間）は見られない。

図 3



ここでは「白いのご飯」が一定の構成素として発話されていることから、上に示した代名詞の「の」の場合とは異なることは明らかである。また、この段階では子供はまだ複合名詞句を発話しておらず、分裂文も観察されないことから、この「の」が補文標識であるという可能性も考えにくい。

言語獲得研究史において、過剰生成の「の」が属格であるとする仮説は多くの研究者に提案されてきた。(岩渕、村石 1968, Harada 1980, 1984, Clancy 1985, 横山 1990, 伊藤 1998 他)その中で、横山 (1990)は、「の」の過剰生成は、色、大きさ、形、を言及する形容詞と共に表れるという不可思議な観察結果を報告している。ここでの観察は、Murasugi and Hashimoto (2004b)において、色、大きさ、形をあらわす形容詞は時制の屈折を伴わず、常に現在形であらわれるという記述と矛盾しない。

(26)　a. 大きい*の　魚　(1;8)

　　b. まあるい*の　うんち(2;0)

さらに、Murasugi, Nakatani and Fuji (2009)では、中谷による縦断的観察（ゆうた）のデータと野地氏による観察記録（スミハレ：CHILDES 収録）のコーパス分析に基づき、横山(1990)によって報告された、一見したところ、不思議ともいえる観察結果は、裏付けられると報告している。すなわち、色、大きさ、形と言った特定の形容詞が使われる時のみ、この「の」の過剰生成が見られ、一方、「痛い」「重い」「怖い」などの形容詞は、時制を伴って叙述的にあらわれ、この段階では名詞の前には表れず、したがって、「の」の過剰生成を伴う事もない。

(27)　a. おいしい、これ。おいしい、これ。(ゆうた 1;10)

　　b. ここ　ばばちい　よね。(スミハレ 2;0)

　　c. お母ちゃん　ぽんぽ(=胃) いたい　の？(スミハレ 2;0)

これらの記述的一般化に基づき、Murasugi, Nakatani and Fuji (2009)は、なぜこのような奇妙な一般化がみられるのかを問う。そしてその答えの一つの可能性として、幼児が形容詞を大人とは異なる範疇でとらえている段階があると指摘している。色や形のような「『の』の過剰生成」をひきおこす形容詞は、実はいわゆる形容詞ではなく、名詞的要素（名詞的形容詞）であり、「『の』の過剰生成」をひきおこさない形容詞は、動詞的要素（動詞的形容詞）であると提案している。

この仮説は、以下の根拠により支持される。表 1 は「ゆうた」の発話、表 2 は「スミハレ」の発話 を示すものであるが、ここに示すように、名詞的形容詞の過去形が極めて遅く表れるのに対し、動詞的形容詞の過去形は比較的早く表れる。

表 1: 形容詞の現在形、過去形があらわれ始めた年齢（ゆうた）

名詞的形容詞（触覚、視覚に関するもの）			動詞的形容詞		
形容詞	現在形	過去形	形容詞	現在形	過去形
大きい	大きい(1;8)	大きかった(2;0)	痛い	痛い(1;11)	痛かった(1;11)
小さい	小さい(1;11)	小さいかった(2;1)	おいしい	おいしい(1;10)	おいしかった(1;10)
黒い	黒い(2;0)	黒かった(2;4)	怖い	怖い(1;10)	怖かった(2;2)

表 2: 形容詞の現在形、過去形があらわれ始めた年齢（スミハレ）

名詞的形容詞（触覚、視覚に関するもの）			動詞的形容詞		
形容詞	現在形	過去形	形容詞	現在形	過去形
大きい	大きい(1;11)	大きかった(2;9)	痛い	痛い(1;8)	痛かった(2;0)
赤い	赤い(1;11)	赤かった(4;0)	重い	重い(1;8)	重かった(2;2)
白い	白い(2;2)	白かった(3;6)	臭い	臭い(2;2)	臭かった(2;3)

この事実に基づき、幼児は、大人の形容詞とは異なり、形容詞を名詞的か動詞的かに分類していると考えると、それは上記の記述のみならず、他の事実に対しても説明力をもつ。例えば、「の」の過剰生成を伴う名詞的形容詞は、指示的名詞としても(大人の文法とは異なり)　項の位置に表れる。

(28)　a. *黄色い　と　*赤い　と　　(スミハレ 2;9)

　　b. *小さい　こおて(=買って)や　(スミハレ 2;7)

(29)　*ちっちゃいがあって、*まあるいがあって…こんな*大きいがあって… (ゆうた 2;2)

(28a)の形容詞「黄色い」「赤い」はそれぞれ「黄色いクレヨン」「赤いクレヨン」を意味し、(28b)の「小さい」は、実際は、小さい犬を指している。これらの名詞的形容詞は格をうけて表れ、また(29)においては、形容詞が主語位置に表れ、主格「が」が伴われている。

このような証拠に基づき、Murasugi, Nakatani and Fuji (2009)は、 色、大きさ、形、状態の形容詞は名詞として分類される段階があり、過剰生成の「の」は、名詞として間違って認識された形容詞に、(大人と同様に正しく)属格が付与された現象であるとして分析している。すなわち、横山 (1990)に観察された記述的一般化は、形容詞という範疇の獲得の困難さによるものであり、属格が過剰生成されている現象ではないと分析している。

ではなぜ、子供は特定の形容詞を名詞として認識するのか。色、大きさ、形を表す形容詞は他の情緒的、評価的な形容詞と異なり具体名詞に通ずる特徴を持っている(Berman 1988, Mints and Gleitman 2002)。また、de Villiers and de Villiers (1978)は、子供が大きさ、形、色を表す形容詞を一つのグループとして捉えていると論じている。更に、形容詞は 「流動的範疇」とされ、習得が難しいとする論もある(Gassar and Smith 1998, Berman 1988, Polinsky 2005, 他)。

実際、日本語では、(30)にみるように形容詞も名詞も「です」の前に表れ、また(31)に示すように形容詞も動詞も時制を伴い活用することから、形容詞としての統語的手がかりが曖昧である。

(30)　a. 赤いです。（形容詞）
　　b. 赤です。（名詞）

(31)　a. 大きい–大きかった（形容詞）
　　b. 赤い–赤かった（形容詞）
　　c. 食べる–食べた（動詞）
　　d. 飲む–飲んだ（動詞）

これらの事実と分析は、形容詞は、その習得に時間がかかる範疇であることを示す。それは世界の言語の中の形容詞という範疇の多様性にも通ずるだろう。すなわち、幼児の文法獲得途上には、（大人のそれとは異なり）名詞のようにふるまう形容詞（名詞的形容詞）と動詞のようにふるまう形容詞（動詞的形容詞）が実在する。したがって名詞的形容詞と名詞句との間に、（大人の文法と同様に）属格を挿入する段階が存在することになり、それが「属格の『の』」仮説として提案されていた段階を説明するものであろう。[6]

60 年に及んで議論されてきた「の」の過剰生成の問題は、記述のレベルにおいてすら矛盾を孕む混乱の中にあったといえるだろう。その問題の根幹には、この過剰生成の「の」が単独の現象と信じられていたことにもある。また過剰生成されている「の」が何かという問いに焦点があてられ、「の」の過剰生成がなぜおきるのかが問われない傾向にあったこ

[6] Murasugi, Nakatani and Fuji (2009)では、この３つの要因が「『の』の過剰生成」にあるとする結論は、複数のコーパス分析により、更に裏付けている。

とも、混乱の原因の一端であったといえるだろう。

本節では過剰生成の「の」は、(i)代名詞の「の」(1 歳後半)、(ii)属格の「の」(2 歳前後)、(iii)補文標識の「の」(2 歳から 4 歳)、の 3 つの段階を含むと提案し、過去 60 年に言語獲得史の中で提案されてきた 3 つの仮説が、基本的にすべて正しい可能性を示した。言語理論上「過剰生成」と言えるのは、連体修飾節の構造のパラメターの設定により過剰生成される補文標識の「の」の場合のみである。他の「の」は、併合操作の獲得過程、ならびに形容詞の統語範疇の獲得に起因し、代名詞の「の」、ならびに属格の「の」はそれぞれ大人のそれと齟齬がないものと考えられる。

本節で概観した幼児が見せる『誤用』もまた、言語の本質を理解するために、日本語だからこそ見える重要な鍵となるだろう。生成文法理論(言語理論)の下で「なぜ」を問い、世界の言語を射程に入れて一定の基準のもとで比較検討するとき、人の心に実在する文法の重要な特性を、日本語は見せてくれる。

5. 結びにかえて：自然科学としての『幼児の誤用』

幼児は無意識に普遍文法の道を辿る。

言語獲得研究において、普遍文法の特性が早期から獲得されていることが実証的に示されていることは、前章のかき混ぜや移動にかかる制約に関する紹介においても述べた。

本プロジェクトにおいては、日本語の項削除についても理論的実証的な研究を行っている。本成果報告書において斎藤氏と高橋氏が大人の体系について研究を行うように、項削除は東アジア言語の独特な特徴であり、それは、項削除以外のどのような言語現象と関連する特徴であるかが理論的実証的に進められつつある。空の項の先行詞が照応形を含む場合、厳密同一読み(strict-identity interpretation)と緩い同一読み(sloppy-identity interpretation)が見られ、(38b)は多義的になる。

(38) a. ジョンが自分のコンピューターを壊した。

b. メアリーも ***e*** 壊した。

(*e* = ジョンのコンピューター、メアリーのコンピューター)

この緩い同一読みは代名詞（それ）を使った文では見られない。

(39)　a.　ジョンが　自分のコンピューターを　壊した。

b.　メアリーも**それを**　壊した。

(*それ* = ジョンのコンピューター、#メアリーのコンピューター)

ここから、(38)の空目的語は代名詞 *pro* ではなく、 項(DP)の削除によるものと考えられるが、幼児の自然発話においても、項削除と思われる例は、動詞が活用をはじめ、かき混ぜ文が表れる 2 歳前半という早期に観察される。（40a）は、スミハレがパンツを一人で履くとき、（40b）は、レモン水をいれているとき、父親が「お母ちゃんのは？」と聞いて、スミハレが母親に向かって産出したとき，（40c）は、母親に抱かれている弟について、「またおっぱい飲んだ？」と聞かれたとき、（40d）は、母が弟のおかゆをたこうとして母親が「お粥たこうね」というのを聞いて、それぞれスミハレが発話した例である。

(40)　a. ぼくもひとり　はく　(2;01)

b. おかあちゃんも　のむ？(2;03)

c. また ぼくものむよ (2;04)

d. ぼくもちょうだいね (2;05)

更に、杉崎氏は、本プロジェクトの英語による成果報告書の中で、この項削除のもつ統語的特徴についても幼児が観察しうる早い時期に獲得していることを実験的に示している。

このように、言語獲得研究において、普遍文法の特性が早期から獲得されていることが示される一方で、幼児の文法的な『誤用』は、普遍文法の制限の範囲内で起こりうることも明らかにされつつある。母語のパラメターの値は、総じて早期に決定されるとは限らない。人間は、あらゆる言語の話者になりうるメカニズムを持って生まれ出ずるがゆえに、自身の母語に不必要な特性を「捨てる」過程も経うる。言語獲得の中間段階に、普遍文法に基づき母語とは異なる自然言語に許された文法値を仮定する段階があるすれば、言語は学習や経験、構文パターンの推論のみにより習得されるのではない。そのとき、幼児は、世界の言語にある共通性と多様性を規定する生得的な抽象的システムと、言語環境にある母語の特性とを結びつけている段階にあるといえよう。本稿では、主節不定詞現象や動詞の自動詞・他動詞の『誤った』交替などの日本語を母語とする幼児に観察される典型的な誤用をとり上げ、これらの文法的誤用が、単なる『間違え』ではなく、自然言語に存在す

る普遍文法の範囲内で規定された（母語以外の）文法の特性が表れる段階とする分析を提案した。

このように考えると、幼児が母語を獲得するとは、すなわち、成長の過程で、母語の特性が具体的になんであるのかを決定するプロセスを意味する。Chomsky (1981)の枠組みで捉えなおせば、母語獲得とは、母語のパラメターの値がなんであるかを、世界の言語で許されるいくつかの値の可能性の中から選択することである。母語の値が当該のパラメターのデフォルト値でないとき、あるいは有標なものであるとき、その選択には時間がかかる。そのために、現実の言語獲得は、瞬時的ではなく、時間がかかると考えられる。

20 世紀前半、科学者である中谷宇吉郎は、雪の結晶には多様な形状があることに注目し、それがいかなる気象条件のときにできるのかという視点から、気象条件と雪の結晶が形成される過程の関係を解明した。彼は、『雪』（岩波文庫）の中で、以下のように述べている。「さて、雪は高層において、まず中心部が出来それが地表まで降って来る間、各層においてそれぞれ異なる生長をして、複雑な形になって、地表へ達すると考えねばならない。それで雪の結晶形及び模様が如何なる条件で出来たかということがわかれば、結晶の顕微鏡写真を見れば、上層から地表までの大気の構造を知ることが出来るはずである。そのためには雪の結晶を人工的に作って見て、天然に見られる雪の全種類を作ることが出来れば、その実験室内の測定値から、今度は逆にその形の雪が降った時の上層の気象の状態を類推することが出来るはずである。このように見れば雪の結晶は、天から送られた手紙であるということが出来る。そしてその中の文句は結晶の形及び模様という暗号で書かれているのである。その暗号を読みとく仕事が即ち人工雪の研究であるということも出来るのである。」

雪の結晶に多様な形状があるように、世界の言語にも多様性がある。その多様性もまた、人間言語に潜む原理的なメカニズムによって生じている。[7] この科学者の言葉を借りるとすれば、言語学は自然科学であり、『幼児の誤用』もまた、天から送られた手紙であるということもできよう。手紙にある文章は、当該の幼児の「母語」である文法とは異なる文法に基づいて書かれている。その文法を読み解く仕事が、すなわち、人間言語の多様性のルーツを研究するということもできるだろう。

---

[7] 本稿で引用する中谷宇吉郎の著作と自然科学者としての優れた知見、そして言語科学との関連については、北原久嗣氏の南山大学大学院人間文化研究科の集中講義（2012 年 9 月 12 日）にてご教示いただいた。ここに、記して感謝する。

参考文献

Berman, Ruth (1988) “Word Class Distinctions in Developing Grammar.” In Yonata Levy, I. Schlesinger, and Martin D. S. Braine, eds., Categories and Processes in Language Acquisition, Lawrence Erlbaum Associates, Hillsdale, 45–72.

Boersma, Paul and David Weenink (2009) Praat: Doing Phonetics by Computer (Version 5.1.23) [Computer Program], Retrieved October 31, 2009, from http://www. praat.org/

Bowerman, Melissa (1974) “Learning the Structure of Causative Verbs: A Study in the Relationship of Cognitive, Semantic, and Syntactic Development.” *Papers and Report on Child Language Development* 8. 142-178.

Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding.* Foris: Dordrecht.

Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, MA: MIT Press.

Clancy, Patricia (1985) “The Acquisition of Japanese.” In Dan Isaac Slobin, ed., The Cross Linguistic Study of Language Acquisition Volume 1: The Data, Erlbaum, Hillsdale, N.J., 373–524.

de Villiers, Jill G. and Peter A. de Villiers (1978) Language Acquisition, Harvard University Press, Cambridge, Mass.

Figueira, Rosa Attié (1984) “On the Development of the Expression of Causativity: A Syntactic Hypothesis.” *Journal of Child Language* 11. 109-127.

Gasser, Michael and Linda B. Smith (1998) “Learning Noun and Adjective Meanings: A Connectionist Account,” Language and Cognitive Processes Special Issue: Language Acquisition and Connectionism 13, 269–306.

Guasti, Maria Teresa (1993/1994) “Verb Syntax in Italian Child Grammar: Finite and Non-finite Forms.” *Language Acquisition* 3(1), 1-40.

Hale, Ken and Samuel Jay Keyser (1993) “On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations.” In Ken Hale and Samuel Jay Keyser (eds.), *The View from Building 20: Essays in Linguistics in Honour of Sylvain Bromberger*. Cambridge, MA: MIT Press, 53-109.

Harada, Kazuko (1980) “Notes on the Acquisition of the Genitive Case Particle No,” ms. University of New Mexico, Albuquerque.

Harada, Kazuko (1984) “On the Acquisition of Japanese,” 『金城学院大学論集、英米文学編』25, 149–171.

Hoekstra, Teun and Nina Hyams (1999) “The Eventivity Constraint and Modal Reference Effect in Root Infinitives.” Proceedings of BUCLD 23. Cascadilla Press, 240-252.

Kim, Young-Joo (1987) The Acquisition of Relative Clauses in English and Korean: Development in Spontaneous Production, Ph.D. dissertation, Harvard University.

Larson, Richard (1988) “On the Double Object Construction.” *Linguistic Inquiry* 19. 335-391.

Mintz, Toben H. and Lila R. Gleitman (2002) “Adjectives Really Do Modify Nouns: The Incremental and Restricted Nature of Early Adjective Acquisition,” Cognition 84, 267–293.

Murasugi, Keiko (1991) Noun Phrases in Japanese and English: A Study in Syntax, Learnability and Acquisition, Ph.D. dissertation, University of Connecticut.

Murasugi, Keiko (2009a) “What Japanese-speaking Children’s Errors Tell Us about Syntax,” Paper presented at the Asian GLOW VII, English and Foreign Languages University, Hyderabad, India, February 28.

Murasugi, Keiko (2009b) “The Onset of Complex NPs in Child Production.” In Hiroki Maezawa and Azusa Yokogoshi, eds., Proceedings of the 6th Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL6), MIT Working Papers in Linguistics 61, 47–78.

Murasugi, Keiko (2012) “Children's ‘Erroneous’ Intransitives, Transitives, and Causatives and the Implications for Syntactic Theory.” Paper presented at NINJAL International Symposium: Valency Classes and Alternations in Japanese. NINJAL. August 4.

Murasugi, Keiko (2013) “Mimetics and Onomatopoeia as Japanese Root Infinitive Analogues.” *Grammar of Mimetics*, SOAS, University of London, London, GB. 2013 年 5 月 11 日.

Murasugi, Keiko and Chisato Fuji (2009) “Root Infinitives in Japanese and the Late Acquisition of Head-movement.” *BUCLD 33 Proceedings Supplement*. Cascadilla Press.

Murasugi, Keiko, Chisato Fuji and Tomoko Hashimoto (2007) “What’s Acquired Later in an Agglutinative Language.” Paper presented at the Asian GLOW VI, Chinese University of Hong Kong. December 27.

Murasugi, Keiko, Chisato Fuji and Tomoko Hashimoto (2010) “What’s Acquired Later in an Agglutinative Language.” *Nanzan Linguistics* 6. 47-78.

Murasugi, Keiko and Tomoko Hashimoto (2004a) “Three Pieces of Acquisition Evidence for the

v-VP Frame.” *Nanzan Linguistics* 1. Nanzan University. 1-19.

Murasugi, Keiko and Tomoko Hashimoto (2004b) “Two Different Types of Overgeneration of ‘no’ in Japanese Noun Phrases,” in Hang-Jin Yoon, ed., Proceedings of the 4th Asian GLOW in Seoul, Hankook, Seoul, 327–349.

Murasugi, Keiko, Tomoko Hashimoto, and Chisato Fuji (2007) “VP-Shell Analysis for the Acquisition of Japanese Intransitive Verbs, Transitive Verbs, and Causatives,” *Linguistics* 45, 615-651.

Murasugi, Keiko and Tomomi Nakatani (2011) "Three types of 'Root Infinitives': Theoretical implications from Child Japanese" Paper presented at 20th Japanese/Korean Linguistics Conference. Oxford University. October 1.

Murasugi, Keiko, Tomomi Nakatani and Chisato Fuji (2009) “A Trihedral Approach to the Overgeneration of No in the Acquisition of Japanese Noun Phrase,” paper presented at the 19th Japanese/Korean Linguistics Conference, University of Hawaii, November 12–14.

Murasugi, Keiko, Tomomi Nakatani, and Chisato Fuji (2010) “The Roots of the Root Infinitives” *BUCLD 34 Proceedings Supplement*. Cascadilla Press.

Murasugi, Keiko and Eriko Watanabe (2009) “Case Errors in Child Japanese and the Implications.” *Proceedings of the 3rd GALANA*, 143-164. Cascadilla Press.

Polinsky, Maria (2005) “Word Class Distinctions in an Incomplete Grammar.” In Dorit D. Ravid and Hava Bat-Zeev Shyldkrodt, eds., Perspectives on Language and Language Development, Kluwer, Dordrecht, 419–436.

Radford, Andrew (1998) “Genitive Subject in Child English [Electric version],” *Lingua* 106, 113-131.

Rizzi, Luigi (1993/1994) “Some Notes on Linguistic Theory and Language Development: the Case of Root Infinitives.” *Language Acquisition 3*. 371-393.

Sano, Tetsuya (1995) *Roots in Language Acquisition: A Comparative Study of Japanese and European Languages*. Ph.D. dissertation, UCLA.

Sawada, Naoko and Keiko Murasugi (2011) “A Cross-linguistic Approach to the ‘Erroneous' Genitive Subjects: Underspecification of Tense in Child Grammar Revisited.” *Selected Proceedings of the 4th GALANA*, 209-226. Cascadilla Press.

Sawada, Naoko, Keiko Murasugi and Chisato Fuji (2010) “A Theoretical Account for the

‘Erroneous’ Genitive Subjects in Child Japanese and the Specification of Tense.” *BUCLD 34 Proceedings supplement*. Cascadilla Press.

Schütze, Carlson and Kenneth Wexler (1996) “Subject Case Licensing and English Root Infinitives.” *BUCLD* 20, 670-681, Cascadilla Press.

Wexler, Kenneth (1998) “Very Early Parameter Setting and the Unique Checking Constraint: A New Explanation of the Optional Infinitive Stage.” *Lingua* 106, 23-79.

伊藤友彦 (1998) 「過剰生成される「ノ」の統語カテゴリー：幼児一例の縦断研究」『東京学芸大学紀要第一部門教育科学』49, 143–149.

岩渕悦太郎、村石昭三 (1968) 「言葉の習得」岩渕悦太郎、波多野完治、内藤寿七郎、切替一郎・時実利彦・沢島政行・村石昭三・滝沢武久著 『言葉の誕生：産声から五歳まで』日本放送出版協会、東京、109–177.

大津由紀雄 (2002) 「言語の獲得」 大津由紀雄・今西典子・池内正幸・水光雅則編『言語研究入門』研究社, 179-191.

鈴木精一 (1987) 「幼児の文法能力」 福沢周亮編『子どもの言語心理 (2) 幼児のことば』大日本図書, 141-180.

中谷宇吉郎 (1994) 『雪』岩波書店.

永野賢 (1960) 「幼児の言語発達—とくに助詞の「の」の習得過程について」 関西大学国文学会、『島田教授古希記念国文学論集』405–418.

野地潤家（1973−77）『幼児言語の生活の実態 I～IV』文化評論出版. 東京.

村杉恵子 （印刷中） 「幼児の『誤用』はなぜ生じるのか：幼児の言語獲得における普遍文法の役割」 『日本語文法』 第 13 巻 2 号、くろしお出版.

村杉恵子、橋本知子（2006）「言語獲得における名詞句内での過剰生成」 KSL 26、関西言語学会、12–21.

横山正幸 (1990)「幼児の連体修飾発話における助詞「ノ」の誤用」『発達心理学研究』1, 2–9.

大学共同利用機関法人人間文化研究機構　国立国語研究所
理論・構造研究系　領域指定型プロジェクト

言語の普遍性及び多様性を司る生得的制約：日本語獲得に基づく実証的研究
Linguistic Variations within the Confines of Language Faculty: Studies in the Acquisition of Japanese and Parametric Syntax

発行日　2013 年 9 月
編集•発行　南山大学　村杉恵子
（プロジェクトリーダー）